

エイリアンvsプレデター Level 2

ムラムリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

成人の儀式とは比較にならないレベルの難易度の高い試練に挑戦したプレデーターの話

※pixivにも投稿しています

B G 1. 1. 1. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1.
a o 2. 1. 0.
d s

E d | | | | | | | |

n E | | | | | | | |

d n |

d

[View Details](#) | [Edit](#) | [Delete](#)

106 | P a g e

For more information about the study, please contact Dr. John Smith at (555) 123-4567 or via email at john.smith@researchinstitute.org.

100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000

For more information about the study, please contact Dr. John Smith at (555) 123-4567 or via email at john.smith@researchinstitute.org.

Figure 1. The relationship between the number of species and the area of forest cover in each state.

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

147 135 124 115 107 102 89 80 70 58 48 34 20 1

147 155 124 115 107 102 89 80 70 50 40 34 20 1

三

次

1.

歩いても足音がしない。

ゼノモーフの巣窟はいつもそうだ。粘液で固められた凹凸のある通路はゼノモーフが音なく迅速かつ、縦横無尽に駆けられるように出来ている。

触ればぺたりとくつつく、気持ちの悪い柔らかさ。

そんな中を一人のプレデターが警戒を怠らずに歩いていた。

これは試練の一つであつた。成人の儀式などという生温いものではなく、ゼノモーフに蹂躪された星で一定期間生き延びるという、確かに高度な試練である。

そしてこのプレデターは、長い期間狩の腕前と名誉を求めて戦つてきた歴戦の戦士であつた。

ゼノモーフに限らず、様々な知的生命体の戦いに紛れ込み、その中で幾多の屍を築き上げて來た。多種の優秀な遺伝子を取り込むなどというような卑怯な事もせずに、その腕前だけでのし上がつて來たその肉体はプレデターの中でもしなやかさと強靭さを兼ね備えており、そしてまた幾多の古傷に覆われていた。

強さを求める事は、このプレデターにとつて生きる事そのものと同義であつた。そして積み重ねて來た努力、実績からその類稀なる強さを認められた事により、更なる試練への挑戦権を獲得したのだつた。

*

ゼノモーフに占領された星に足を付ける者は必ず他者による送迎が必要となる。

幾らそのゼノモーフの酸に耐え得るような宇宙船を持とうとも、その強靭な顎と鋭利な手足、そして尾による攻撃を跳ねのけるような頑丈な素材で作れはしない。

低空に浮かぶ宇宙船。そこからハツチが開き、二人のプレデターがその縁に立つ。

一人が言つた。

「まだ、引き返す事も可能だが」

もう一人がすぐさま返した。

「まさか」

「……健闘を祈る」

試練を受けるそのプレデターが槍を伸ばして跳躍した。

着地、異変を察知し駆け付けていたゼノモーフ達をその槍捌きで難なく片付けると、しかしそれ程の実力がありながらも一旦身を潜めた。

提示された生き延びなければいけない期間は短くはない。そしてまた、この試練の成功率はどんな猛者であろうとも慎重にさせる程に低い。

また宇宙へと、母星へと戻つていく宇宙船を眺め終えると、静かな緊張がプレデターを包み始めた。

ゼノモーフは言葉を持たない。しかしながらテレパシーを使つてただの獣より難解な意思疎通を言葉を使わずとも行う事は良く知られている事だつた。

女王を頂点とする蜂や蟻に似た社会構造は、プレデターという侵入者に対して迅速に動いた。

その女王を一人で屠つた事もあるそのプレデターは、そんな差し向けられた雑兵に対して傷を負う事など全く無く、蹴散らしていく。ただ、昼夜を問わずに断続的に攻められる事は少なからず精神を消耗していった。

姿を見つけられた時点での位置が群れの全体に伝わる。長い休息を得る為には自身を発見したゼノモーフを全て駆逐した後でそこから誰にも見つからずに遠く離れる必要があつた。

しかし、そんな難度の高い事もそう多くない回数での試行で行えてしまうのがこのプレデターの狩りの腕前と経験の深さを物語ついた。

ゼノモーフに宿主としての役割を持たれているであろう、無害な野生動物を狩つて腹を満たす。

そして時折槍を抱いたまま浅く眠る。それを見つけたゼノモーフが音を立てずに忍び寄る事もあつたが、プレデターはそれでも瞬時に

気付き、ゼノモーフに何もさせないままに一突きで仕留めた。

耐酸の加工が為されたその槍の血を振つて払うと、体を伸ばしてまた動き始めた。

*

指定された期間の四分の一程をプレデターは無傷で生き延びていた。

その頃になるとただの雑兵では力不足と認識されたのか、プレトリアン……女王を守る親衛隊であり女王候補もある巨大なゼノモーフや、敏捷性、隠密性に優れ、直接攻撃はして来ないが遠くから幾らでも追い掛け来るランナー、酸吐きによる遠距離攻撃を得意とするスピッターなど様々な能力に特化したエイリアン達が攻めて来るようになつてきていた。

ただ、そんなゼノモーフも歴戦のプレデターの前には敵わない。

そしてまた、プレデターは複数の群れの領域を理解し始めていた。一匹の女王が支配出来る範囲は広大とは言え、限られている。特にゼノモーフに占領されてしまつた星に女王は数えきれない程居るし、それを捕獲しに多数のプレデターが赴く事もあつた。

その繩張りの境界線に立つていればどうなるか？　起きるのは同士討ちであつた。

プレデターという侵入者はまた、ゼノモーフ、プレデリアンにすれば強大な戦力となる。プレデターはそのプレデリアンとも戦つた事もあつたが、その肉体の強靭さと生命力の高さに強く苦労させられた記憶があつた。

殺す事よりも捕らえる事を優先した結果、ゼノモーフ達は互いに争い始める。

互いに酸の効かない相手に対して起こるのは純粹な肉弾戦だ。爪で、尾で、隠し顎で甲殻を貫き、酸性の血を至る所に撒き散らす。

見ていると愉快でもあつたが、その酸性の血は危険な事極まりないので見る事の余裕があつても遠くからのみに留めていた。

平穏が作り出すのはいつだつて闘争だ。

闘争が終わると、残るのはより勢力の大きい群れの優れた個体のみ

になる。しかし、それぞれは少なからず傷ついており、この戦力ではプレデターを捕らえる事は出来ないだろうと判断してか続いて襲い掛かつて来る事は無かつた。

プレデターも酸に塗れたその戦場に躍り出る事はせず、姿を消した。

狩りそのものの実力も優れていたが、それ以上にプレデターを強くたらしめているのは危機意識であつた。危険を冒した事は数知れないが、無謀をした事は無い。

この試練そのものも、自分ならば達成する事が可能だという経験に裏付けられた自信があつてこそ挑戦したのだ。それは無謀でも命知らずでもない。

そして、治療薬も武器も補給される事は無いと言う前提から来るそのプレデターの慎重さは、ゼノモーフ全体に対しても捕獲する事への手強さを知らしめつつあつた。

しかし次にプレデターを襲つたのはより強いゼノモーフ達の襲撃ではなく、食料の不足であつた。

失つた兵隊を取り戻そうという動きもあつたのだろう。少なくない数が居たはずの野生動物が全く姿を見せなくなつていた。

空腹は堪えようとも自身の動きの精細に強く関わる。群れ同士での争いもあって弱体化した繩張りの中ではござす事は、地理も理解出来た事もあつて極めて簡単な事であつたが、プレデターはその有利を捨てようともこの場所から離れる事を決意した。

ゼノモーフの群れの本拠地に躍り込み群れを殲滅させる事もこのプレデターの力量ならば不可能ではないが、物資が非常に限られている今はすべき事ではなかつた。

遠くの木の上から監視しているランナーに屠つたゼノモーフの尾と木の枝で作つた即席の投げ槍を唐突に投擲する。

しかし、そこまで届く剛腕を持つていようとも距離が離れ過ぎていて当たる前に避けられた。

「……」

他の群れの領域に入る頃には追跡して来るのを諦めるだろうか。

それとも、どこかでおびき寄せて殺すか。

警戒を更に強くしたゼノモーフ、その中でも隠密に長けたランナーを殺す事はこのプレデターでもやや時間を掛ける事であった。

頭の隅で悩みながらもプレデターは移動を開始した。

期間の三分の一が過ぎようとしていた。

*

ある程度の期間を過ごした場所から遠く離れて、二つの縄張りから完全に離れた場所へと訪れた。

追つて来ていたランナーも気付けば姿を消しており、撒けたのだろうと思う。

野生動物も見つかり、腹ごなしにも成功した。

休息も取りたいところだつたが、その前にこの場所の地理を知つておこうと思い、また行動を開始した。

しかしながら、程なくしてゼノモーフが一匹も見当たらぬ事に気付いた。野生動物も多い。

「ここは……？」

つい、呟いていた。

誰も答える事は無い。

偶々ゼノモーフの縄張りから外れた場所に迷い込んだのだろうか？ そう楽観的に捉える事も出来たが、決めつけてしまうのには危険が強過ぎた。

それに縄張りではないという事は逆に、隣接している複数の群れから一気に攻められる可能性があるという事でもあつた。

段々と、直感がここは危険だと伝え始めた。何がどうとかそんな根拠は一切ないが、それに従つた方が良いと思つた。だが来た道を戻り始めてすぐ、見たのはプレデリアンが自分を追つて来ていたランナーを虐げているところだつた。

体の危険信号が一気に最大までアラートを上げた。

「ギ……イ……」

片腕でランナーの首を無造作に掴み持ち上げているプレデリアン。ランナーはゼノモーフの中でも非力だ。それを振り解こうと足搔い

てもプレデリアンはびくともしなかつた。

そしてぶぢゅう、とその首が握り潰されるとランナーは事切れる。

プレデターは、そのプレデリアンと対峙する事も避けるべきだと考えた。勝利出来るだけの腕前を持つているとは言え、無傷で確実に勝利出来ると断言出来る程ではなかつた。

更に一体だけとは限らないと言う事もあつた。

プレデリアンはプレデターに気付き、強く咆哮を上げた。それはただのゼノモーフと比べてより力強さが籠つている、雄叫びと言つた方が相応しいものだつた。

そこにプラズマキヤノンを当てた。電力の回復が簡単に出来ない今は気軽に使えないものであつたが、出し惜しみをしている状況でもない。

ただのゼノモーフならば体が弾き飛ぶ威力のものであつたが、プレデリアンは吹き飛ばされるだけに留まつた。

しかしながら隙は出来た。プレデターは来た道を戻ろうとプレデリアンの横を走り抜け、続けざまにプラズマキヤノンを起き上がりうとしたプレデリアンに放つ。

今度は躱され、更に溜めを作るような姿勢になつたかと思えば一跳びで追いついてきた。

咄嗟に槍をその軌道上に置く。

その刹那、悪寒が体を包んだ。脳裏を過つたのは体を貫かれても平然と動いて来たプレデリアンとの戦闘の記憶。

寸前で躱した。プレデリアンが派手にその隣に着地し、腕を振つて來た。

強い風切り音。ゼノモーフは宿主よりも優れた肉体を備えて誕生する。それは元が何であれ、自身と同じ種から誕生したゼノモーフには純粹な肉弾戦では勝てない事を意味していた。

しかし、それを埋めるのが技術であった。

振り回した腕は無造作で、目の前には振り向かれた首が晒してあつた。

リストブレードを即座に伸ばし、そこへ向けて腕を振るう。

「グウッ！」

血が噴き出し、それを即座に回避しようと跳躍したその足首を掴まれた。

首を裂かれようとも動くその生命力、飛び散った酸が体に掛かった。耐酸のコーディングをされた鎧がそれを防いだが、運が良いだけだ、全身が鎧に覆われている訳ではない。

反撃しようとプラズマキヤノンの照準を合わせるが、プレデリアンはそのままプレデターを地面に叩きつけた。

プラズマキヤノンの射撃はあらぬ方向へと飛んで行き、空気が肺から一気に吐き出される。

「ヒューッ、ヒューッ」

致命傷なのは確かだ、血は今も強く流れ続けている。しかしプレデリアンはまだ動いていた。プレデターが怯んだその僅かな時間、プレデリアンが活動出来る残り僅かな時間の最後にした事は、プレデターを殺す事ではなかった。

その怪力を以て、思いきりある方向へと投げ飛ばした。

その先にあつたのは、深い穴だつた。

プレデターが嵌められたと気付いた時にはただ落ちていくだけ。穴の側壁は柔らかく、槍を突き刺してもぼろりと崩れた。

着地こそしたもの、自身の脚力では跳躍して戻る事も出来ず、登っていく事も出来ない。

その穴の深さは丁度良く、プレデターに飛び越せず、プレデリアンにのみ飛び越せる高さにされていた。

「……」

出来る事は、掘られたゼノモーフの巣窟の中を進んでいく事、ただそれだけだった。

*

ゼノモーフの巣窟へと入つてしまつたのは望んだ事では無かつた。

プレデリアンが後から追つて来る事は無かつた。どうやら殺せたらしい。

ただ、安堵は出来ない。複雑に分かれた道を記憶しながら、極力そ

の中核には行かないよう歩いて行く。

巣の構造はゼノモーフにしてはとても良く考えられていた。先が見えないよう微妙なカーブが常に続いている。

出口は何個か見つけたが全て、跳躍で脱出する事も出来なければ登る事も出来ないように作られていた。

それが二、三か所あつたところで、プレデターはプレデリアンが複数体居る事を確信する。この巣はプレデリアンに適した作りになっている。

しかしながら新たなゼノモーフ、プレデリアンが自分を捕らえようとしては来なかつた。

警戒されているのだろうと思う。

外側を沿うように歩いても、脱出できるような場所は一か所も見つからない。内側へと歩いて行く事、巣の中核へと向かう事を覚悟しなければいけないようだつた。

「……」

呼吸を一度整え、覚悟を決めた。

「よし」

今までの中で最も無謀に近い。しかし、それ以外の手段は残されていない。

死中にこそ活がある事をプレデターはまた、知っていた。
ただ……既にもう詰みなのだと理解していなかつた。

していても認めなかつただろうが。

中へと歩いて暫く。曲がりくねつた道の先から、何者かが倒れているのが見えた。

しかもそれは、同種族、プレデターだつた。

……罠、なのか？

分からぬが、最大限の警戒をしつつプレデターはその倒れている同種族に近付いた。

罠も何も仕掛けられていない。その倒れているプレデターは裸であつたが、手に槍を持っていた。

「……おい？」

プレデターは肩に手を掛けて揺すつた。

そうすると倒れていた裸のプレデターは顔を上げて、目の前に同種族が居る事に酷く驚いた。

「……ッ、……!!」

何かを喋ろうとしていたが、喉を潰されている。

マスクも外されている。ここはプレデターにとつて必ずしも呼吸が楽な環境ではないはずだが……。

しかし喋れない事は呼吸が苦しい事ではなく、単純に喉を潰されているから、それだけだ。

「何か伝えたい事があるのか？」

そうするとガントレットを手に取られ、ボタンを押し始めた。一二三のボタンを叩かれた瞬間プレデターは青ざめ、その相手を蹴り飛ばした。

押そうとしていたのは自爆の起動コマンドであつた。しかも躊躇いもなく。

ここで起きていた事が何であろうとも、プレデターは死ぬつもりなど微塵も無かつた。

蹴り飛ばされた裸のプレデターは、暫し逡巡した後に槍を伸ばす。構えにブレは無い。迷いも失せている。その姿は、紛れもなく自分と同じ歴戦の猛者であつた。

しかしその目的は自身を打ち倒し、自爆する事だ。そんな歴戦の猛者がそのような選択を迷わずする程の何かがここで起きている。

しかしながらやはり、そんな逃げに付き合つつもりなどプレデターには更々なかつた。

このプレデターに勝てなければどうせ自身はここから脱出出来もしないのだろう。

互いに槍を構え、間合いを詰めていく。そして先に動いたのは裸のプレデターの方だった。体に回転の勢いをつけ、的確に首元へと薙いできた。

速い！

それはまるでプレデリアンの膂力そのものだつた。自ずと避け幅

が増える。その余分な動きに追撃を仕掛けて突きを見舞われる。

弾いては駄目だと直感して躱す事に専念する。

躱す事 자체はそこまで難しい事ではなかつた。動きそのものは洗練されていても単調だつた。長らく戦つていなかつたのだろうと思う。

何度目かの薙ぎ、跳躍して避ける。蹴りが跳んできたがそれを地面に槍を突き立てて空中に留まる事で回避し、逆に頭に蹴りを喰らわせた。

同じプレデターと言えど、首の骨を折る程の威力はあるはずだつたが、裸のプレデターは痛みを堪えながら立ち上がるに留まつた。考えるのは後だ。体勢を立て直される前に追撃を仕掛ける。頭への突きは避けられたが掠つた。そのまま薙ぎ、頭蓋を削つた感触が届く。

よろけた所に更に追撃、をワンテンポ遅らせた。槍を握る手が緩まつていない事が反撃を予想させた。

そしてそれは想定通り薙ぎとして跳んできた。二回転、その残心の隙に距離を詰め、今度こそ首へと槍を薙いだ。

「……ツ……」

膝から崩れ落ち、そのまま倒れた裸のプレデター。

「……槍は貰っていくぞ」

それは良く見れば自分のと同じ、ゼノモーフ用に耐酸のコートイングが為されたものだつた。

このプレデターはやはり、この試練に挑んだ者だつたのだ。

しかし生かされていた理由は何だ？ 考えても余り良い予感はしなかつた。そしてふと、前を見た時だつた。

目の前から数多のプレデリアンが現れた。ぞろぞろと五とか十とかそんな数ではない、大量のプレデリアンが走つてきている。

完全に予想外の数だつた。いや、想定すべきだつたのだろうか？ 大人しく自爆すべきだつたのだろうか？

思わず足が引け、また悪寒がして咄嗟に後ろを見る。同じく背後からもプレデリアンが数多にやつて来ていた。

この巣窟に落とされてしまつた時から詰んでいたのだ、とプレデターはそこで理解した。何をされるか、それは少なくとも良い事ではない。

槍を落としそうさまガントレットの自爆のコマンドを叩き始めるが、プレデリアンがそれよりも先に強靭な脚力を以てプレデターに次々と飛び掛かり、全身の動きを拘束していく。押し倒され、踏みつけられる。

ガントレットは破壊され、鎧は剥がされた。マスクも剥がされて、呼吸が苦しくなる。全身を数多のその日の無い顔が自身の肉体を物色し始めていた。

*

槍以外を破壊されて、その槍も奪われた。一匹のプレデリアンに足を引きずられて他のプレデリアンと共に巣の中核へと連れて行かれる。

二足歩行でゆつくりと歩いて行くその様には自分に対する警戒などもうとっくに無かつた。

暴れれば蹴られ、何度も踏みつけられた拳句に尾で全身を強く締め付けられた。

単なるゼノモーフよりも太く長いその尾の拘束は、プレデターが幾ら力を込めようとも外れる事は無かつた。

そして連れて来られた先には、子供のプレデターが数多に居た。

マスクも着けずに、そして捕獲されて粘液で壁に貼り付けられる訳でもない。

「なつ……!」

そう叫んだところを、プレデリアンが忘れていたかのように顔を近づけて来た。

そして首を掴むと、気管を的確に潰した。

「がつ、ひゅーつ、ひゅーつ」

そんな自分を子供のプレデター達が無邪気な、何も知らない顔で眺めて来る。まるで珍しいものを見るかのようだ。

そしてプレデターは理解した。ここは農場だ。プレデリアンを作

る為の。

子供のプレデター達の表情には恐怖などというものは存在しなかつた。自分の事を哀れだとも何も思っていなかつた。

言葉も持たせられず、何の知識も身に着ける事なく。ただ宿主として繁殖させられている事さえ知らない。

大きくなつたら自分のようにではなく、プレデリアンのようになるとでも思つてゐるのだろう。

する、するとまだ引き摺られていく。

そして自分が生かされて捕らえられた訳は。自身が殺したあの裸のプレデターが生かされていた訳は。あのプレデターが槍を持たされていた訳は。

全て、自分を宿主として欲していたからではない。自分とあの裸のプレデターのどちらが子種として優秀か計る為だつたのだ。

子供のプレデターが乗り越えられないような高さの崖を越えたその先には、やはりと言うべきか妊婦のプレデターが数多に居た。粘液で固められて、そして粘液と体の一部が同化している。一様に無気力な顔をしていた。

ゼノモーフの粘液は、血管を張り巡らせるかのようにそれそのものが生きておいる。卵を長期間保存する為だつたり、ゼノモーフの寝床になつたりと多様な用途を持たせられる。

食事をする必要も最早無いのだろうか。

そんな事を思つていると、頭を唐突に掴まれ、持ち上げられた。目の前には妙な液体が溜められた池のようなものがあつた。
「こほ、こほ」と時々妙な音を立ててゐる。

「がつ、ぐつ」

抵抗するも虚しく、そこに顔を突つ込まれた。

飲めという事だろう。だが、こんなもの死んでも飲みたくないがつた。けれど呼吸が続かない。ただでさえマスクを外されて呼吸が苦しくなつてゐるというのに。

暴れようとしても尾の拘束はびくともしない。呼吸を求める肺が勝手に空氣を吐き出す。吐いた空氣と共に飲んでしまう。どろりと

した感覚が喉を伝わって来る。

もう意識が続かないとなつた時、プレデリアンが頭を持ち上げた。
「げぼつ、がほつ、ひゅーつ……ひゅーつ……」

吐かねば……そう思うも、プレデリアンはそんな自分の様子を見る
と不満気に喉を鳴らした。するとプレデリアン自身がその池に顔を
突っ込んで液体を飲み始めた。

口移しをする気だと分かつた。プレデリアンに口移しなどされる
ならば素直に飲んだ方がマシだつた。そしてどちらも死を選べるな
ら選びたかった。

「あ、つ、ヴうつ!!」

やめろ、やめてくれ！

声も出ない、潰された喉で叫ぶと引きちぎれそうになるが、引きち
ぎれて欲しかつた。もう殺して欲しかつた。

拘束をより一層強めて体の骨を折つて欲しかつた。

液体をたっぷりと飲んだプレデリアンが顔を上げ、近づけて来る。
巨大な手が後頭部に回され、プレデターの口をそのまま模した、より
大きな口がプレデターの顔を覆う。

「ん、ーー!! ん、ーー!!」

隠し顎がゆつくりと自分の喉の中へと入つた。そしてその中から
液体がどろどろと、先程の量とは比べ物にならない程に胃に直接流れ
込んでいく。

プレデターは自然と涙を流し始めていた。

こんな屈辱を味わう事など想像すらしなかつた。もう、きっと死ぬ
事すら許されないのだ。子種として生かされ続けるのだ。

プレデリアンが液体を流し終えると、それがしつかりと胃まで到達
した事を確認して口を放した。

「ぐつ、ぐうつ？」

体が熱くなり始めた。何か、体の構造を書き換えられている感覚。
ゼノモーフにとつて生物の肉体を改造する事が得意な事だとして
も、自分の体に何が起こり始めたか想像したくはなかつた。
プレデリアンがそこでやつと自分を尾の拘束から解放したが、プレ

デター自身はその体の熱さにのたうち回るしか出来なかつた。

*

気が付いた時には呼吸が楽になつていた。

体を起こすと全身は裸で、周りではプレデリアンが寛いでいたり、また外から獲つて来たであろう野生動物を食していたりする。

また、この暗闇に近い場所で視界がより鮮明になつており、拳を握るとより強い力が備わつていて気付いた。

きっとゼノモーフの因子を体に植え付けられたのだろうと思つた。そして、自殺はさせて貰えないだろう。自分の近くに居るプレデリアンは、自分の事を気に留めていた。

何か害する事をしようとした瞬間に複数体が飛び掛かってきて、抑えつけてくる。

「……」

ただ、害する事を何もしなければ自由に行動する事は許容されいるようだつた。

プレデターは立ち上がり、そして歩き始めた。

プレデリアンも付いては来るが。

肉体的に劣つていて監視を撒く事は非常に難しいと言わざるを得ない。そしてまたこの巣の内部構造を理解したところで、きっと百を遙かに超える数のプレデリアンから逃げきれるとは思えなかつた。

同種から誕生したゼノモーフに対して勝利する為に必要なのは技術と知恵だ。それらを縛られてしまつた今、勝利する手段は無いに等しかつた。

試練は失敗した。自分は子種として生かされ続ける。

名譽ある死などというような理想の死に方もう出来ない。

深いどん底に突き落とされた氣分であるのは確かだつたが、何かもがどうでも良くなつてしまふ程ではなかつた。

自身に落ち度があると分かつていただだろうか。プレデリアンの生命力を侮つてはいなかつたとは言え、それでも穴に落とされてしまつたのが敗因である事は分かり切つていた。

自分はプレデリアンそのものに敗北したのではない。この群れに敗北したのだ。

そしてその群れを司る女王を見ておきたかった。

暫く歩くと、道が分岐していた。その片方からはやや成長したプレデターがプレデリアンに連れられて歩いて来ていた。

「……」

プレデターはプレデリアンに引き摺られている訳でもなく、自らの意志でプレデリアンに付いて行っている。

その先に待つのが死だとしても、きっと腹からチエストバスターが飛び出してくる瞬間まで自らがその為に育てられた事を理解しないのだろう。

そのプレデリアンに付いて行くと、更に幾度と曲がりくねった道の先にエイリアンエッグが大量に配置された場所へと辿り着いた。

プレデターに自爆された事があるのだろうか？

あの場所プレデターの操作を許して自爆しようとも、ここまでその爆発が届いてくれるようには思えなかつた。

プレデリアンに連れられて、子供のプレデターはエイリアンエッグの前に立たされた。

自分に付いてきたプレデリアンが自分への距離を縮めて來た。自分に寄生させる訳にはいかないのだと理解しているようだつた。

くばあ、とエイリアンエッグが開くのを子供のプレデターは興味津々に眺め、そしてフェイスハガーが八本の脚をせわしなく動かしながら出て来る。

ぱつ、と飛びついたのを避けられる訳でもなく、プレデターは次の瞬間気持ち悪さからか引きはがそうとしたが、フェイスハガーの首の締め付けによつてそれよりも先に気絶していった。

「……」

プレデリアンはそこまで見届けると、子供のプレデターを壁へと磔にした。

顔を上げると、そんなエイリアンエッグの先に動く巨大な生物が見えた。

プレデリアン達を統率するクイーンだろう。エイリアンエッグの間を通り抜けて歩いて行くのに、プレデリアンはすぐ隣を歩いて来る。

侵入者への罠としても作動するはずのエイリアンエッグは、そのプレデリアンの意志でか全く開く気配を見せなかつた。

そして、歩いて行くとクイーンがより鮮明に見えて来た。

クイーンもまたプレデリアンから派生した者であるらしく、プレデターのような口の形を強く残していた。後頭部にはプレデターの髪の名残もある。しかしどれも、プレデター、プレデリアンと比較しても禍々しく成長していた。

また肉体はただのクイーンよりも見るからに強靭で、一撃一撃がプレデターの肉体をバラバラにするような力を持つてゐるようになえた。

そのクイーンが頭の甲殻をずらし、自分の方を見て來た。隣のプレデリアンが動いたかと思えば、跪いていた。まるでプレデターが目上の者に敬意を表す時のように。

ぶちい、ぶちぶち、とクイーンが産卵管を引き千切る音がした。顔を戻すと、ずんづん、と強い衝撃を響かせながらクイーンが地面へと着地していた。

そして一步一歩、自分の方へと歩いて來る。

膝が笑っていた。武者震いとかそんなものではない。単純な恐怖だ。格が違う。

自分が何体居ようともこのクイーンには手も足も出ないという確信。

自分に顔を近づけて来る、口が開かれ、吐息が自分に強く吐きかけられた。

そんなプレデターがした行動は恭順を示す事、他のプレデリアンと同様に跪く事だった。

「グルル……」

ただ、しかしクイーンはそれに不満を示すかのように唸つた。

尻尾が動いていた。それは自分の頭上に置かれ、つつと頭を軽く刺

した。

もつと頭を下げると言ふかのように。

力は段々と強くなつてお、プレデターが次に咄嗟にした行動は土下座だつた。プレデリアンと同等の構えは、プレデリアンと自分が同じ立場に居ようとした事だと捉えられたのだと理解した。

クイーンは、そして頭を踏みつけた。

柔らかい粘液で固められた地面に頭が沈んでいく。

ぐり、ぐりぐりと踏みにじられていき、首までが地面に埋まつてから、クイーンは指でそれを掘り起こした。

目を開くとまた顔が目の前にあり、全身が震えた。それを鬱陶しい

と思つたのか強く握られて持ち上げられる。

プレデリアンの尾の拘束が生易しいものに思える程の握力、しかし体は壊れないように最低限配慮されていた。

そしてクイーンはプレデターを暫くの間觀察すると、興味を失つかのようにプレデリアンに投げつけた。

プレデリアンはプレデターを受け止め、そしてクイーンは自身の居るべき場所へと戻つていく。

「あ、あ……」

プレデターは震えを止められなかつた。クイーンではなくプレデリアンに抱かれている事に安堵さえ覚えていた。

*

プレデリアンに抱かれたまま元の場所まで戻つてきて、そして仕事を命じられた時プレデターはもうそれに反抗はしなかつた。

プレデリアンの数を増やす為に、プレデターの子を為す。

プレデターにとつてもクイーンは自身が仕えるべき主だという認識を刷り込まれたかのように。

それは飲まされたものの影響もあるのか無いのか、プレデターには判断が付かなかつた。

自分が殺したプレデターは女王の姿を見る事は無かつたのだろうか？ それは分からなかつた。

ただ、分かる事はプレデリアンの数は、自分が子種となつてからあ

る程度の期間が過ぎると倍近くにまで膨れ上がった事だ。

恐怖はまた、敬意でもあつた。体の隅々まで染み込んだその恐怖はまた、プレデターに絶対的な恭順を課していた。

それに伴つて群れの範囲も拡大し、そして他の群れとの闘争もあつたようだつた。しかしそれにクイーンが直接赴く事は無く、持つて来られたのはその群れのクイーンの頭蓋のみ。

しかし、それすらもプレデリアンのクイーンにとつては興味を引くものでは無かつたようで、渡された後に投げ捨てられる。

そんな投げ捨てられた頭蓋を見れば、自分がトロフィーとして所持していたそのクイーンの頭蓋になど何の価値も無いように思えた。

そして、ある時。

プレデリアンから槍を渡され、ある場所へと歩いて行くように命じられた。

「……」

潰された喉も治つていた。再度潰される事は無く、喋る事は出来る。

言葉を使う気は無かつたし、反抗しようという気も全く無かつたらだろう。

歩いて行くと、プレデターが見えてきた。

マスクをつけ、プラズマキヤノンを装備し、全身に鎧を身に着けたプレデターだ。

「お前は……？」

そんなプレデターに対し、槍を無言で伸ばした。

「会話は通じないのか」

する気が無いだけだ。そう、心の中で思つてから戦いを始めた。そして勝者は雄叫びを上げた。

しかし敗者に止めを刺す事はなく、ガントレットからプラズマキヤノンからそれら全てを自らの手で破壊していく。

鎧も剥いだ頃に、プレデリアン達がやってきて、彼等と共にクイーンの元へと歩いた。

献上品としてのプレデターは数多のプレデリアン、そしてプレデ

ターに見守られながら、また叫び声を上げながらフェイスハガードに寄生される。

プレデターは今の自分の立ち位置に満足していた。自分がどう足搔こうと勝てない強者に仕える事。強さを求め続けた身としてはそれは身に余る光栄であつた。

2.

プレデターを宿主として生まれるゼノモーフの事を、プレデター達、特に位が上の者達は忌まわしき者と呼ぶ程に嫌悪、忌避している。理由をこのプレデターは知らない。その存在に対しても思考をする事すら許されていない程の禁忌であつたからだ。

しかし、だ。ゼノモーフそのものは成人の為の儀式に不可欠な物として扱っているのにも関わらず、プレデターから生まれるゼノモーフの事だけをそれだけ嫌っているのには何か理由があるはずだった。

ただ……考えてしまえば理由は容易に想像出来た。

宇宙に点在する知的生命体の中でも優れた技術と突出した肉体を併せ持つこの自分達、至る所で捕食者、狩人という名称で呼ばれるプレデターと言う種族は、その名の通りに同時に極めて好戦的であった。本能にも刻み込まれる程の狩猟意欲は、プレデターを宿主としたゼノモーフ、プレデリアンにも姿と共に引き継がれている。繁殖を何よりの目的として活動するはづが、もう既に他のどの群れよりも突出した力とそれによる安寧を保持しているのにも関わらず、他の群れを蹂躪しに行き、そしてクイーンの頭を千切つて持ち帰つて来る程に。

また、このプレデターの中にも初めて戦つた時の印象は強く残つている。掃除屋の真似事として、成人の儀式に失敗してしまった。プレデターの後始末として戦つたのだが、あの時は久々に死が眼前まで訪れていた。それと同時に高揚は激しく、屠つた時には思わず遺跡全体に響く程の勝鬨を吼えた。

その後から時折ふつと湧き出る、プレデリアンと再戦したいと言う欲望。脳裏に浮かぶ、同族を寄生させてしまえば良いと言う禁忌の手段。

きっと、実際にそれを行つた者が居たのだろう。

長年鍛えてきた自分でさえ、一対一がやつとある程の強さだ。繁殖を許してしまえば、もう爆発させるしかない。

そしてもし……そこで一匹でも生き残つてしまつたならばプレデ

リアンは絶対に学習し、対応する。何せこの宇宙の中でも優れた文明を持つ種族を素に誕生するのだから、戦闘能力と同等に学習能力も高いに違いない。

もしかしたら、母星の一つでも乗つ取られていても全くおかしくないと思える。

しかし……ここに居るプレデリアン達は、らしくないのだ。

全身を粘液によつて肉体と直接繋げられた、とつくなき昔に感情も失っている女性のプレデター達。彼女等はプレデリアン達によつて肉体をも弄られているのだろう、明らかに性交から出産までのペースも早かつた。

数も多く、クイーンに忠誠を誓つたプレデターが今日も性交を終えるとある程度の自由を許される。

この環境にもすっかりと馴染み切つていた。同族を贊に差し出せば、もう監視にプレデリアンが付いてくる事も無く。子種としての扱いは変わらずとも、信頼度は高くなつていた。

それだけの時間を過ごせば、もうプレデリアン達がどのように一日を過ごしているのかも大体理解出来てくる。

食糧を調達に外に出る。巣を広げる為に手足を、時に酸を使つて地下を掘つていく。程々に成長したプレデター達を見定め、フェイスハガードに寄生させる。時に邪魔になつた群れを一掃しに出ていく。主に行動としてはその位だ。

外に出て他の群れを潰しに行く時はクイーンの首を引き千切つて持つて帰つて来るが、やるべき事をやつたら後はエネルギーの消費を極力抑えるかの如くじつとしているだけ。

自分というプレデターの中でも優れた個体の遺伝子を引き継いだ子を素にしたプレデリアンでもそうだ。

加えて言うのならば、この群れには通常個体しか居ない。例えばランナー、スピッター、プレトリアン、クラッシャー、キヤリアー……。そんな派生個体が一匹たりとも居ない。

ある程度繁栄に成功した群れならば、もしくは群れの拡大に手こずつているのならば、その群れには一つの事柄に特化した個体が湧き

出してくるものなのだが。

ただ、そんな個体を生み出さなくとも安寧は手に入れられる程の力を持つてゐるのは確かではある。

要するに、こここのプレデリアン達には、狩りへの欲望、高みへの渴望と言つた、本能レベルでプレデターが抱き、そして色濃く引き継がれているはずの習性が無い。

もう少し細かく言うのならば、意図的に抑えつけられているように感じる。

誰に？

クイーンしか居ない。

何故？

安寧。地位への固執。何であろうと、クイーンは少なからずもう上を目指していないのだ。今居る位置に満足している。

そしてそれは、プレデターに反逆へと向かわせる契機になるのには十分過ぎる理由であつた。

プレデリアンのクイーン。それが一体どのように誕生したのかは分からぬ。分かるのは、数多の戦場を思うがままにしてきた自分でさえも恐怖で塗り尽くされる程の強さを持っていた事。

それに屈服し、そして魅入られたからこそ、自分は抵抗を止めてゼノモーフの群れに貢献する事を選んだ。

しかし、それは今日までだ。

クイーンは安寧を求めている。今の地位を維持する為に、子供達の成長を止めている。それが分かった瞬間、クイーンは服従する対象ではなく、超えるべき対象となつた。

ただ、それは今ではない。

やるべき事は色々とある。まずそもそも、クイーンに挑もうとしても直接は戦つてくれないだろう。プレデリアン達が殺到してきて数の暴力で滅殺される。

また、そのクイーンとの力量差は、ゼノモーフの因子を植え付けられて肉体が改造、強化された今の状態で槍を持たされたとしても、百回挑んで一回勝てるかと言う程だ。

加えて言うならば、ゼノモーフの因子が入ったこの肉体をまだ完全に慣れ切っている訳でもなく、しかし自分を鍛える場所も無い。必要なのは……。

プレデターはエッグチェンバーより一回り大きく分厚い、生きた水瓶の方を見た。中にはここに来て最初に飲まされた、ゼノモーフの因子を体に植え付ける液体が入っている。

思いついた展望より良いものが考えられなかつたら、自分はこれを再び飲まなければいけないだろう。

季節が一回巡る頃、また新たな挑戦者がこの付近へと迷い込んできたのを、プレデターは知った。

プレデターはクイーンの前に跪き、言つた。

——要望が御座います。

玉座に座るクイーン。頭を保護する冠をずらし、顔を向けて来た。
……ここが一番の勝負所だ。

クイーンを越えると決意してから数日後の事。

ゼノモーフが声以外の方法によつて意思疎通をする事は知られている事だ。超音波か電磁波か、それともフェロモンか、プレデターの科学力を以てしても未だ未解明な部分はあるが、プレデターはその意思疎通が出来るようにならなければいけなかつた。

その液体を再び摂取しようとすると、プレデリアンが止めに来る事は無く、しかしやはり躊躇いは強い。飲んだ挙句に意思疎通が出来るようにならなかつたら意味など無いのだが、数日考へても最初に思い浮かんだ展望よりも良いものは無かつた。飲む事でしか先には進めない。

プレデリアンに口付けをされて流し込まれた感触を思い出して吐き気も催すが、それも堪えて手にその液体を掬う。
まるで液体そのものが生きているかのように生温く、うぞうぞと動いているような感触がする。

「……最後にしたいもんだ」

そう呟いて口に含み、一気に飲み込んだ。

しかし、その意思疎通が出来るようになるまで三度も飲む必要がある。最終的にヤケになつて、その生きた水瓶に顔を突っ込んで飲んだ。

そうすると今度は胸が火傷する程に熱くなり、のたうち回る。目が覚めれば、本格的に自分の体が書き換わったような感覚と共に、その能力を手に入れていた。

——種如きが要望だと？

早速向けられたのは怒りの感情だ。しかし、プレデターは冷静を努めて言つた。

——種として、私はより貢献したいのです。種である私がより強くなれば、この群れもより強くなりましよう。

幸い、追い風な出来事もあつた。プレデリアンは今でも時々周囲の群れを掃討する為に外へと出ていくのだが、時が経つに連れて損耗は増えていた。

周りの群れもこの群れの事を警戒し、策を練るようになり始めている。単純なスペックの暴力だけでは簡単に事が進まなくなりつつあつた。

クイーンは多少の思考を挟み、言つた。

——……言つてみる。

——私を他の群れの掃討に同行させて下さい。

クイーンはそんな発言をしたプレデターを、じつと目の無い顔で眺めた。跪いて頭を下げたままのプレデターには分からないが、暫く返答がない事に不安になる。

——……この時にそんな提案をしてくるなど、貴様は随分と臆病なようだ。

確かに、クイーンへの伺いをこの時に立てたのは、子種としての保険を作れる時だからという理由があつての事だ。

しかし、その返答には怒りが湧いた。思わず殴り出したくなる程の怒りは、多分ゼノモーフの因子をより多く自分に取り込んだからか。それとも元来の狩人としての誇りを傷つけられたからか。必死に抑え込んでいると、クイーンは続けた。

——だが、良いだろう。但し、今回の侵入者には貴様の獲物は渡さん。それで仕留められなればそのまま死ね。

——ありがとうございます。

そうしてクイーンは冠を戻して、顔を正面に戻した。

立ち上がると、プレデリアンが後ろで待っている。

——付いて来い。

その意志は、相変わらず無機質だつた。

意思疎通が出来るようになつてプレデリアンに話しかける事も何度かしたが、基本的には無視されるか怒りの感情を向けられるか、それだけだつた。

しかしそれは、種如きが群れの一員に会話を持ちかけるなどというような矜持などではなく、単純に自身の責務では無いから、と言つたような無機質なものだつた。

クイーンの支配は強力で、少なくともこの巣の中ではプレデリアンは何の変わりようも無い。

しかし、他の群れを掃討しに行く時、クイーンから遠く離れる時ならばチャンスはあると踏んだ。味方出来ればベストだが、ゼノモーフをそのまま味方に出来るなどとは思つていなかつた。最終的に、この種の目的は脅威の排除、群れの繁殖、その二つだけに集中するのだから。

最低限は、クイーンの支配を崩し、向上心を焚きつける事だ。クイーンから離れて独立しようとする動き、それだけでも自分には有利に働く。

——こからは貴様だけで歩け。

そう言われて、プレデターは歩き始める。

程なくして巣の中に入つて来た、もう既に詰んでいるとは知らない挑戦者と会つた。

「なんだお前……その姿は……？」

自分の今の顔は分からない。ただ、プレデリアンと似通つたような形に変質しているのだろうとは思つた。

飲んだ液体の合計は、胃の中を満杯以上にする程だろうから。

無言で歩み寄っていくと「近付くな！」と叫び、槍を構えてプラズマキヤノンの照準を定めた。

足を止める。

「おま」

再び口を開いた瞬間に斜めに跳んだ。プラズマが居た位置に着弾する。虚を突いても挑戦者は冷静に自分を見ている。

着地。引きつけられている。しかし、それならば一撃を掻い潜れば勝ちだ。膂力はこちらの方が圧倒的に上だ。

ただ、動体視力や反射神経までは強化されていない。しかしこの挑戦者に素手で勝てないようでは、クイーンに立ち向かう事など出来やしない！

プラズマキヤノンの二発目が飛ぶ前に、挑戦者に向かつて柔らかな地面を蹴った。

突いて来る？ 難いで来る？ 足の捩じりが見えた。難ぎだ！

首に向けて的確に槍の穂先が向かつて来る。けれどその軌道が読めていれば対応出来る。柄を掴んだ。

「うつ!?

着地、槍を引き抜けば手を離されて、既にリストブレイドを伸ばしている。

プラズマキヤノンも同時にチャージが終わり、今にも放たれようとしている。しかしその脇腹を蹴るのが先に届いた。

メギイツ、と肋骨が折れた、それ以上の感触。

「がああつ!?

プラズマはあらぬ方向へと飛んで行き、挑戦者は立ち上がる事も出来ない。

かひゅー、こひゅー、と呼吸もおかしい。

想像以上に自分の肉体は強化されていたようで、内臓まで駄目にしまつたらしい。

そう思つていると、遠くで待機していたプレデリアン達がやつて來た。

「がひゅつ!? ぐぶうつ!?

驚きながらも早速自爆しようとしていたので、その腕を踏みつける。

——内臓を潰してしまったが、子種としての保険には出来る。

治療器具も持っている筈だから。

——素手の貴様に負けるようならば、貴様の子の方が適している。

そう伝えながら、プレデリアンは防具やらを全て破壊していく。内臓の損傷すらも一瞬で治すそのクソ痛い治療器具も。

「なるほど」

そう初めて声を出すと、マスクを剥がされた挑戦者が血塗れの顔で、自分の方を見て来た。

「な、なんだつ、お前は!? ジーブつ、げひゅうつ、どうしてこいつらなんかとぼおつ!!」

叫んでいると、プレデリアンに喉を踏まれて潰される。

「俺は子種として生かされているだけだ。俺より優秀な子種になれたかった時点でお前は苗床だよ」

尻尾で巻きつけられ、絶望に染まつた目で連れて行かれる。

「びやあ、ばんぶえつ」

それでも叫ぶ挑戦者は、頭を踏みつけられて気絶させられた。

踏みつけたプレデリアンは暫くの間、鬱陶し気にぐりぐりと挑戦者を踏みにじっていた。

起きる頃にはきっと、腹の中でチエストバスターが蠢いているだろう。

最後に潰された言葉で聞こうとした言葉はきっと。

じやあ、何で自爆装置を壊した?

「それは、俺が超える為さ」

呟いた言葉にプレデリアンは誰も反応しない。意思疎通が出来るようになつていても、言葉を理解されている訳ではない。

そして奪った槍を渡そうとすると、プレデリアンが言つてきた。

——群れの掃討に向かう。

早速か、と思いながらも頷く。

——しかし。貴様が途中で逃げ出すような事があれば、私達は何よ

りも優先して貴様を追い掛け、捕らえる。そして雌達と同様に四肢を
挽いで我々の群れの礎にさせる。

——逃げるつもりなどない。

逃げる事は可能かもしれないが、敗北したまま逃走する事など、
ライドが許さなかつた。

プレデリアンはそれに返答はしなかつた。
数多のプレデリアンに連れられて、プレデターは巣の外へと向か
う。もう、跳躍は地上へと届いた。

プレデリアンと同等の膂力を手に入れた事。ゼノモーフと意思疎
通が出来るようになつた事。

もう、自分は外見しかプレデターという種族ではないのでは?
内側はゼノモーフに染まり切つてゐるのではないか?

そんな疑問が浮かぶ。しかし、片手に持つこの槍だけは、プレデ
ターとゼノモーフをはつきりと分かつものだつた。

ゼノモーフは学習はしても、何かを生み出す事はしない。経験に
よつて個が強くなる事はあるうと、それが引き継がれ、研鑽されてい
く事も無い。

そう区切りも付けられた所で。

しかし数年振りとも思える外の清々しさを味わう余裕もなく、さつ
さと歩けと言うように尻尾で尻を叩かれる。

多少よろけながら、プレデターも歩き出す。

「……さて」

そしてプレデターは久々に高揚を覚え始めていた。
久々の狩りだ。

ただの力づくでは届かない領域があると言う事を、この抑圧された
プレデリアン達に知らしめてやろう。

* * * *

歩いていくに連れて、プレデリアン達の動きが機械じみた程の統率
からずれていく。クイーンの命令が緩んできている。

クイーンに忠実な個体は自分を監視しながらもひたすらに歩く。
プレデターの本能を色濃く引き継いだような個体は血に飢えたよう

に、時に尻尾をゆらゆらと動かしながら、手を握りしめたり、はたまたインナーマウスを出したりしながら、若干落ち着きの無いように歩く。

……誑かすならば、後者だな。

しかし、仕掛けるのはまだ先だ。自分が何も成果を上げていない時点でプレデリアンと意思疎通をしてもそれには何の意味も持たない。何であれそれは子種の戯言でしかない。

成果を上げてこそ自分の言葉は重みを持つ。

幾許かの時間を歩いていると、プレデリアンの死体やゼノモーフ達の死体が散見された。数多の血はもう既にその強烈な酸性を失わせているようだが、地面をも溶かすその血は、木々を枯らすには十分過ぎる。そんな場所に動物達も近寄る訳もなく、命の気配が完全に失せた土地となっていた。

その死体の割合としては、勿論だがプレデリアンより他のゼノモーフの方が多い。

強固な守りをも打ち破る、二足を捨てた巨体のゼノモーフ、クラッシャーの死体。そのクイーン並みに巨大な頭はプレデリアンの怪力によつてかボロボロになつていた。岩と挟まれ、潰れたプレデリアンの死体が幾つかあつた。

クイーンを傍らで守る、小型のクイーンと言うような形のゼノモーフ、プレトリアンの死体。首をへし折られており、そして木に突き刺さつた尻尾にはプレデリアンの頭が貫かれていた。

そんな様子を見ていると、プレデリアンは真正面から戦つてばかりのように見えた。

しかしそれに対しても、周りの群れの幾つかは結託しつつあるように見える。クラッシャーやプレトリアンが多いこの戦闘の痕は、プレデリアン達に対してどのように立ち向かえばより痛手を与えるのかを試行錯誤しているように見える。そして、そのクラッシャーやプレトリアンを生み出すのは勿論、単なるゼノモーフを生み出すよりもコストがかかる。時間的、食料的、そしてクイーンの疲労も。

ここに転がっているクラッシャーやプレトリアンの数は、一つの群

れが生み出せる数を既に越えていた。

プレデターという宿主はどこもが喉から手が出る程欲しいものである事は疑いようがない。

それを独占しているこの群れは、普通結託などしないクイーン同士が結託する程に鬱陶しいのだろう。

もう暫く歩みを続けていると、ゼノモーフの足跡が目の先に見えた。まだそう時間の経つていらない足跡。

繁殖、脅威の殲滅に対しても優先に動くゼノモーフという種は、外敵に対して極めて敏感だ。プレデリアン達もそれに気付き、辺りを見回す。

しかし、先に気付いたのは長らくゼノモーフを狩つて来た経験のあるプレデターの方だった。

ランナーが一匹、木の陰に潜んでいる。

——目の前。二番目に高い木に隠れている。

返つて来たのは子種如きに、と言うような屈辱の感情だった。しかし、その感情を隠さないままにプレデリアンの一匹、クイーンの命令に忠実な個体が自分に命じて来た。

——その槍を投げて殺せ。

……こいつが一番厄介だな。

そう思いながらも返した。

——この距離からでは躲される。

舌があつたら舌打ちをしていそうな不満を隠さない素振りで、プレデリアンは伝えた。

——このまま進む。届く距離になつたら即座に殺せ。

——分かった。

その時だった。

「キィイイイイッ!!」

そのランナーが叫び、逃げていく。

それを見た血氣逸るプレデリアン達が追い掛けて行き、視界の遠くで仕留める頃、地響きが聞こえて来た。
木々をへし折る音が至る所から。

これは……既に囮まれている。

プレデリアン達は戦闘態勢に入つた。プレデターは槍を伸ばし、次いでに体も伸ばした。

どうしてだろうか、子種となる前でもこの状況に陥つたら焦らずには居られないだろうに、今は酷く落ち着いていた。

武器は槍の一本だけ。裸で防具はなく、治療器具もなく。

そうか。それでも思い出してみれば、洞穴の中で前後から数え切れないプレデリアンに囮まれるよりかは全く楽な状況だつた。

四方八方からクラッシャーが木々をへし折りながら突進して来る。

プレデリアン達も学習しているのか、まともにそのクラッシャーの突進を受ける気は無さそうだ。そして、ランナーを屠りに行つたプレデリアン達が先にクラッシャーと相対する。クラッシャーの突進に跳躍して回避。しかしそこに合わせてクラッシャーの背に乗つていた、クラッシャーの巨大な頭に隠れて見えなかつたランナーが跳躍した。それにしがみつかれたプレデリアンはそれを振り解く前に、後続のクラッシャーにランナードと踏み潰された。

それだけで死ぬほどヤワな肉体はしていないだろうが、後からはプレトリアンも来ている。踏み潰されたであろうプレデリアンに尾を突き刺す姿が見えた。

【成程】

短く呟いて、プレデターはクラッシャーと相対する。

クラッシャーの弱点は、正面以外の全てだ。その重量と速さ、頑丈さまでを併せ持つ突進は確かに脅威だが、逆に言えばその突進以外は脅威ではない。小回りは効かず、背中に乗られたら何も出来ない。それを補う為にランナーが乗り、後続にはまたクラッシャーが、そしてプレトリアンが続いていた。

プレデターはプレデリアンと同様に跳躍し、しかしそこに向かつてきたランナーを串刺しにしながらクラッシャーの背中に着地、そのままクラッシャーの首に槍を貫いた。

【ガツ】

ランナーを踏みつけ、槍を引き抜くと同時に倒れたクラッシャー。

その後に続くクラッシャーが飛び掛かり、自分を叩き潰そうとしてくる。

身を限界まで低くし、屠ったゼノモーフの背を蹴る。ゼノモーフの因子を色濃く身に取り込み、強化された肉体がその刹那、跳躍したクラッシャーの下を潜り抜ける事を可能にした。

最後に居るプレトリアン。その二足で駆ける巨躯はしかし、いきなりクラッシャーの下から現れたプレデターに反応出来ないままに首を裂かれて崩れ落ちる。

振り向けば、消えたプレデターを探すクラッシャーと、やつと気付いた背に乗るランナー。

それを屠るのに苦労などするはずも無かつた。

プレデリアン達は少なくない数がその初撃で殺されていた。クラッシャー同士の衝突に潰され、跳躍をランナーに引きずり降ろされ、潰され、貫かれ。残るプレデリアン達もクラッシャーやプレトリアンの致死的な攻撃とランナーの素早い連撃に屠られ続けている。

しかし、そこに混じる異物。何故かプレデリアンの味方をしているプレデターは、槍の一振りで簡単にゼノモーフ達の命を刈り取つていく。クラッシャーだろうとプレトリアンだろうと、急所を貫かれ、切り裂かれ、その身に傷は一つも付いていない。

精銳達がその異物に簡単に殺されていくのに、ゼノモーフ達は何故プレデターが？ という疑念よりもその脅威に漸く対処し始める。

捕らえられれば強力なプレデリアンと出来る、がプレトリアンも簡単に屠られていくその様に捕獲などと言つた手段を選ぶ事も出来ず、逆に殺されるまでの時間を延ばすのが精一杯。

そしてプレデターに注意が行けば、プレデリアン達がクラッシャーやプレトリアン達を力づくで壊していくのに余裕が出来る。

そうして、襲い掛かつて来たゼノモーフの半数以上が地に伏したところで、ゼノモーフ達は撤退して行つた。

呼吸を荒げているプレデリアン達に対し、プレデターは多少息を上げているだけだった。そしてプレデターはプレデリアン達よりも遥かに戦果を上げていた。

無傷のプレデリアンは少なく、また死んだ、もしくは致命傷を負った。プレデリアンの割合はざつと見積もつても三割以上だ。

しかしプレデターは問いかけた。

——戻るのか？

その挑発に対し、プレデリアンは怒るがしかし、手までは出して来ない。それが自分に手を出す事が群れの不利益に繋がるからか、容姿の一部と共に引き継がれた。プレデターの狩猟本能、誇りから来るものなのは分からぬ。

ただ、それは綻びだ。クイーンの抑圧から解放する手立ては確実にある事を示している。

そして、一番クイーンに忠実そうな個体が問い合わせて来た。

——これ以上の損耗を女王は望んでいない。貴様は、これ以上に犠牲を出さずに女王の首を奪えると言うのか？

……意外と、こいつを寝返らせるのが一番簡単かもしれないな。

賢いが故に、自分達のクイーンが大した事をしていないのに気付くだろう。

——無理だな。

プレデターがそう返すと、その個体は皆に帰還を命じた。プレデリアン達がもう助からない個体に冷徹に止めを刺していくのを眺めながら、プレデターは血を払い、槍を縮める。

「上々だな」

クラツシャーの下で埋もれた、まだ生きているランナーが見えた。一匹だけ取り残されて、事が終わるまで隠れようとしているようだつた。

氣付かれて、捨て身で飛び出してきたその首と掴みかかつて来た腕を掴み、背骨を膝でへし折る。

「ギ……イ……」

まだ辛うじて生きていた。首を踏んで折ると何も言わなくなる。

——行くぞ。

プレデリアンが命じて來るのに従う。戦闘前とは僅かながらも、プレデリアンから向けられる感情は異なつていた。

3.

巣へと戻つていくに連れて、多少ながらも個性を見せていた。プレデリアン達の様子が段々と元の無機質な動きへと戻つていく。

プレデター自身にも多少ながら感じられる、クイーンが発するその抑圧はしかし、そう強くプレデターには影響を及ぼさない。

ゼノモーフの因子を色濃く受け継いだとは言え、未だその肉体はプレデターのものであつた。この体の何割かがゼノモーフのものに変質したのだろう？

三割か、四割か。はつきりとした事は分からないが、これ以上あの液体を飲んだとしたら今度こそ自分はこのプレデリアン達と同じようくクイーンの支配下に置かれてしまうだろう。

穴が近付いて来る。槍を渡すように言われ、縮めて渡した。

……流石に、信用はされないか。

クイーンはただのゼノモーフより何倍も賢い。唯一の母親であり、そして最強である。また冷徹であり、慎重であり、策士である。

そしてやはり、クイーンの中でも最も強い意志は、自身が唯一のプレデターを素とするゼノモーフを有する最強の群れである事だ。

しかし、そこにプレデターが有する強さへの欲求や誇りと言つたものは微塵も無い。

何故プレデターを素とするゼノモーフでありながらそのような意志を持つに至つたのかは些か疑念に思う所はあるが、結局子種の域を出ない自分が聞こうとしても返答が返つて来るのは思えないし、最悪怒つて最期の口移しでもされるか、子種としての務めしか出来ない体にでもされる事だろう。

だから必要なのは、クイーンにとつては便利である、位の認識で留めさせておく事。

刃向かう可能性など微塵も見せてはいけない。クイーンに刃を届かせられるような存在とも見做されてはいけない。その首を獲る瞬間までは。

穴の中、巣へと戻る前にふと、後ろを振り返りたくなつた。恒星の中

温かみを感じられる明かりをまた暫く浴びられなくなるのは少し寂しいが、それを浴びていられる時でもない。

そんな素振りは今、微塵も見せてはいけない。気持ちを抑えて穴の中へと飛び降りた。

薄暗い、粘液で固められた洞穴。

「……」

懐かしさを覚えている訳ではない、と思いたい。帰つて来たのだと感じている訳ではない、と思いたい。

ただ、従順な僕として、子種としてここに居た期間はそう感じさせてしまう程に長かった。

けれど、今は悪態を吐く事すら憚られた。

プレデリアン達は次第に巣の中へとばらく、自分も巣の中に居るのならばある程度は自由となる。

完全にばらけて、自分一人だけになつた状態になつてから、プレデーターは立ち止まつた。

「……クソ」

そこでやつと一言を吐いた。

「けれど一步だ。俺は踏み出した。踏み出せた」

自分を見失わないように、半ば自分に言い聞かせるように呟く。呼吸をし直した。

暫く歩き、崖を飛び降りる。崖の下、そこはプレデターの飼育場だ。子供のプレデター達が好き勝手に走つたり、プレデリアンが狩つてきた、無造作に投げ捨てられた獲物を手づかみで食べている。自分に気付くと、プレデリアンとは全く違うその姿を興味深く、言葉ではないただの奇声を上げながらじろじろと観察される。

結局の所、何に対しても運という要素から逃れる事は出来ない。

プレデターはその子供を生み出しているのが自分だという事を理解しながらも、運が悪かつたと済ませながら哀れな目でそれらを眺めた。

歩き去つて、崖を飛び上がる。その崖の周りには虚ろな目をするだけの女性のプレデターが粘液に磔にされている。

一人、剥がされた痕があつた。もう産めないと断じられたのだろう、きっと今は宿主として寄生されて、そしてやつとの最期を迎えるとしている。

ストレスが溜まっていた。憂き晴らしをするかのようにプレデターは命じられている日課に励み、それが済んでもう暫く歩けば寝床へと着いた。

寝床と言つても、ゼノモーフが壁に張り付いて丸まつて休むような、ただの壁に作られた窪みだ。近くにもプレデリアンは今も多く丸まつて寝ており、中には先程まで共に戦闘に出ていたプレデリアンが返り血をそのままにして寝てもいた。

周りがプレデリアンだらけの中を歩いて、その自分の寝床に座つた。妙に体に吸い付くその生きた柔らかさは、もう落ち着いてしまって慣れてしまつたものでもあつた。

再び一息吐く。久々の戦闘ではあつたが、ゼノモーフの因子を色濃く取り込んだこの肉体はそう疲労していない。ただ、気付ければそれを遙かに超える精神的な疲労が体を巡つていた。

それはそうだと思い直す。クイーンに伺いを立てた、それだけでもかなりの精神の摩耗が発生していたはずだから。

……まだ、先は長い。

ここから先は全てが綱渡りだ。プレデリアン達にその身に宿るプレデターとしての意欲を目覚めさせなければいけない。そしてそれをクイーンに勘付かれてはならない。

ただ、そんな初の試みをするのに対して、体を包むのは挑戦への高揚であつた。

少なくとも、クイーンがつまらない安寧を望んでいるのならば、それに従い続けるよりは遙かに生きていると実感させてくれる。

失敗すれば四肢でも挽がれて子種としてのみ生かされるか、最期の口付けを強要されるか、それでもだ。その命を賭けたスリルを楽しむ事は久しく忘れていたが、日常茶飯事でもあつた。

この寝床は自らが座るべき場所ではもう、無い。

けれど今はまだ、そういう場所である。

眠気が襲つてきた。一度、従順なる子種になつてからは熟睡してしまう事も増えたが、またそろそろいつものように戻るべきだ。

……ただ、今日だけは……。

また、明日からは子種としての日々が暫く続くだろう。クラッシャーもプレトリアンも大量に屠つた。連續で攻めて来るのは考えづらい。

それにこんな疲労、狩りでは早々覚えないものだ。

そう言い訳を重ねて、目を閉じた。

早速眠気が訪れて、しかし耳が何か異音を拾う。

「~~~~!!」

遠くからの激しい、声にならない悲鳴だつた。

自分が倒したプレデターから、チエストバスターが胸を突き破つたのだろう。

歴戦の猛者だ、いつも犠牲となる子供とは違つて、喉を潰されても声がここまで届いて来た。

きっと、他のプレデリアンと比べても強いプレデリアンになる事だろう。

そう思つて再び眠りに就こうとした時、プレデリアンが語り掛けて來た。

——女王がお呼びだ。

一瞬で意識が覚醒した。

何か気に障つたか？ そう思いながらも、平静を努めて歩く。

今、従う以外に出来る事は無い。逃げられもしなければ、反逆する為の槍も実力も無い。必要なのは思い出す事だ。従順な子種だった自分を、そしてそれに徹する事だ。

それには意外とすぐに慣れる。プレデターがその従順な子種になつたその最大の理由である絶対的な強さは変わつていないからだ。しかし、それもある程度までに留まつた。

……本当に精神性も伴つていれば、従順な子種でも不満ではなかつたんだがな。

そんな思考を振り払う。今は絶対的なその強さだけを敬つていれ

ば良い。しかしそれでも付き纏つて来る恐怖までは搔き消せない。体が震える。危険因子だと判断されたら最期、自分は死ぬ。何の抵抗も出来ずに。

考えないようにしても難しかった。命の危険に晒された事は幾度とあろうとも、共にしてきた武器と培ってきた経験を以て切り抜ける道があつた。今は何もない。クイーンの機嫌に祈るしかない。

呼吸を整えようとしても無駄だつた。プレデターの自爆対策であろう、曲がりくねつた道。前と後ろを歩くプレデリアン、時折すれ違うプレデリアン。

筋力は自分と同等かそれ以上。体躯を生かす技術は無いに等しいが、何をしようとも滅多な事では怯まず、致命傷を与えても暫くは動き続ける生命力。

そもそもゼノモーフとの近接戦闘は熟練のプレデターであつても油断できないものだ。インナーマウスによる一撃は勿論、尾の刺突さえもがプレデターの叡智を結集させた硬質な鎧をいとも容易く打ち破る。傷付ければ流れ出すのは、溶かせないものなど無いと言わんばかりの強酸だ。如何に鎧がその酸をも防ぐように作られていようとも、鎧の隙間からでも流れてしまえば体は焼け爛れて致命傷になる。素でそれなのに、プレデターという優れた遺伝子を取り込んだ結果がこれだ。

今なら一、二匹程度ならば素手でもどうにか出来るかも知れないが、この閉鎖空間、そしてこの数に対して逆らう術は自分が如何様になろうとも何一つとして出来ないだろう。

思考が恐怖に妨げられ、どうしようもないままにクイーンの居る広間までの距離は無慈悲に淡々と縮んでいく。

歩みを止める事すら出来ない。

そしてプレデターは広間に着いてしまつた。

エッグチエンバーが數え切れぬ程にある広間。壁には磔にされ、胸を食い破られたプレデターの死体が並んでいる。そしてその中には先程まで生きていた、自分が倒した歴戦のプレデターと、未だ生きている、子を産めなくなり苗床としての末路を迎える女性のプレデター

が居た。

その女性のプレデターがびくりと動いた。

胸からチエストバスターが勢い良く飛び出してくるのと同時にその女性のプレデターは息絶えた。

……落ち着け、落ち着け。

そう思つてゐると、さつさと歩けと言うように後ろからブレーテリア
ニ印がれた。一矢ゲニラウーニがる。

目の前には数え切れぬ程のエツグチエンバー。

……そうた
殺すならもう殺されているはずだ
呼ふ必要などな

そう考えたのが少しだけ安心出来た。

エツグ チエンバーの間を歩いていく。プレデリアンのクイーン、い

一見でも極めて恐怖を覺悟するにせよ、その覺悟

そこまで歩いて
蹠いた。

ケイレンが冠をすりして頭を上げる

——やはり 貴様に臆病なあなたがここに来るまでの怯え

たのか。

けれども、何故呼ばれたかも分からぬ今は怒りを感じる余裕も無つた。

• • • • • • • • •

答えずに居ると、クイーンは他に何も聞いて来ない。

その分からなさがプレデターを混乱させた。そして下に向いていると何も分からぬ。クイーンは今にも、自らの尾を自分の頭に突き刺して終わらせようとしているのかもしれない。

鼓動が激しい。何故呼ばれたんだ？

その頬に、ひとりと冷たいものが触れた。体がびく、と思わず強く震えた。

正体はその、想像したばかりのクイーンの尾の先端だつた。プレデターが鍛え研いだ刃と同等かそれ以上に鋭く、そして分厚く長い、鏡面のような輝きを見せる尾。

それはプレデターの顎を持ち上げ、顔を上げさせた。

クイーンがじっと自分を見つめて来る。剥き出しの歯。

そこでやつと、ここに来させた理由を理解した。

これは自分に反逆の意志があるかどうかの確認だ。掃討に同行した理由が本当に、群れに貢献する為だけだつたのか。

その意志があると認識された瞬間、この尾は自らの首を刎ねて飛ばすだろう。

——何に怯えている?

唐突に飛んできた問い。咄嗟に出て来た嘘を、そのままに伝えた。
——外の掃討して来たゼノモーフ達とクイーンが天と地程の差があると再認識しまして……。

嘘ではあるが、事実もある。ただのクラッシャーやプレトリアンなど、このクイーンにとつては足蹴にするだけで四散するだろう。フスーツ、スース……。

クイーンから吐息が漏れる。

そして尾は、自分の顎から離れて戻つて行つた。

——戻れ。

そう言うと、クイーンは冠を元に戻した。

しかし、体が強張つて中々動かない。

必死になつて立ち上がる頃には、プレデリアンが先程胸を食い破られた歴戦のプレデターを引き摺つて來ていた。

何だ? と思うも、後ろから再びクイーンの吐息が聞こえてきて急いで歩き始める。
エツグチエンバーの間を通つて戻るその最中、ぱりい、ぐちゅう、と後ろから聞こえて來た。

クイーンがそのプレデターを食している音だつた。

骨をも碎き、胃袋へと流し込んでいく咀嚼音。自分が広間から去るよりも前に、その音はしなくなつっていた。

……この怯えは、結果的には幸いだったのだろうか？

けれど今はそれに結論を付けるよりも、もうとにかく眠りたかった。

寝床まで戻つて体を丸めるとすっかり落ち着いてしまい、それに拒絶を感じる間も無く瞼は閉じられていった。

* * * *

時が経つ。

プレデターは外に出る度にプレデリアン何体分の戦果を挙げていく。物事が噛み合つた時など、きっと十体分以上の屍を築き上げているだろう。

しかし、それ以上の事は何も出来ていない。想像以上にクイーンは慎重だと実感した。プレデリアンを唆した後に巣に帰つたならば、きっともう、苗床にされて死ねる事が喜びと思える程の結末が待つている。

そしてそれ以上にクイーンに対して再び植え付けられた恐怖が拭いきれなかつた。

外に出て自分の技量を上げる事は可能となつた。このゼノモーフの因子を色濃く受け継ぎ強化された肉体を武器と共に十全に使いこなす事も出来るようになつてきた。

しかし、クイーンに對しては勝てる気がしない。微塵たりとも。

前に立つただけでこの体は怯えてしまう。殺意を向けられた時点で槍を握っている事すら覚束なくなる。

腕ごと槍を吹き飛ばされ、何も出来なくなつたところで体を握り砕かれる。

突き刺した槍が引き抜けないその隙に叩き落とされ、踏み潰される。

不用意に跳んだその瞬間に腹をその尾で貫かれて目の前にまで持つて行かれたその末に、頭を丸ごとインナーマウスで食い千切られる。

そんな凄惨な最期を迎える、確信めいた予感はいつまで経つてもプレーの中に居座り続けた。

……少なくとも、この怯えをどうにかしなくては何をしようとも話にならない。

また、唐突に逃げてプレデーターの船が来るのを待ち、帰るだけならば可能だろうと思えるが。

これ程の怯えを植え付けられながらも、敗北したままに帰還する事は誇りが許さなかつた。

プラズマキャノンもガントレットも、リストブレイドもレーザーディスクも何もかもが無く、持てる武器がこの槍だけだとしても、この敗北をそのままに帰還するならば死んだ方がマシだつた。

……だから必要なのは、慣れだ。

しかし、クイーンの前に立ち続ける事など不愉快に思われて殺されるだけだろうし、それにそうしたところで慣れは訪れてくれないだろう。

そうなると。

ただのゼノモーフのクイーンと戦いたい。そうして体を慣らしていきたい。

そう思い始めた。そして、その機会は訪れるべくして訪れた。

唆す事自体は、プレデーターは始めていた。

対象を群れのプレデリアンではなく、駆除対象のゼノモーフに変えたのだ。

混戦の中、プレデリアン達が物量や力に苛まれていてその最中に、殺すのではなく敢えて柄で殴りつけて怯ませた、逃げる事が得意なランナーに伝えた。

巣の中には子種と出来るプレデーター達が数多に居る事や、自分が強大なるクイーンに対して反逆を志している事を。

それと共にほんの僅かに、最も重要な巣の情報を加えて最後に選択させる。

死んだ振りをしてこの情報を持ち帰れ。もつと情報が欲しいのならば自分の要求に応えろ、と。

その、プレデーターが要求した事はたつた一つ。

貴様らのクイーンと三回戦わせる。そして敗北したならば情報は

全て吐く。そして苗床にでも子種にでも好きにしていい、と。

三回戦えても、全ての情報を渡そうとも。

群れの長を自分の糧に捧げると言う、普通なら絶対に通らない要求であるが、またプレデリアンにそれを告げ返されたら自分は詰んでしまうが、それでも応えるだろうという目測はあった。

まず、強い力を持つ特殊個体の数が一つの群れで賄えない程である事から、複数の群れが結託している事は明らかだ。

また既に築き上げられた屍の数は一つの群れの総数では足りない程であつたし、苗床、食料という資源も、プレデリアンの繩張りを除いたその近辺からはほぼほぼ尽きつつある。

クラッシャーやプレトリアンを数多に生み出してプレデリアンに善戦出来始めたかと思えば、自分という異物に遮られ、更にクイーンはその自分よりも遙かに強いという事実。

そして、複数の群れが結託しているとは言え、そこにあるのは友好的な関係ではないだろう。ゼノモーフは複数の群れで仲良しこよしするような存在ではない。あるのは、プレデーターという優良な子種を手に入れたい為の打算的なものだろう。

ライバルを蹴落とす事も出来るこの欲求は、必ずしも悪いものではないはずだ。

そして返つて来た、それに対する答えは、信用を見せるとの事だった。プレデリアンを数匹、乱戦の最中に殺した。僅かにでも反逆を悟らせないようにその長い頭を一直線に貫き、捩じりながら即座に引き抜く。そして証拠隠滅の為にもクラッシャーやプレトリアンに踏み潰させる。

そこまでやると、次にクイーンがやって來た。

都合の良い事に、プレデリアン達は他のゼノモーフ達の猛攻に阻まれ、自分とクイーンが一対一の関係になる。

自分の糧とする事を全面的に承諾したのか、それとも……。

また、プレデリアンのクイーンではない、ただのクイーンを見るのは久々で、逆に珍しいような感覚になつた。

後ろから襲い掛かつて來たゼノモーフを一難ぎで屠りながら、その

クイーンの様子をざつくりと眺めた。

頭の冠は砕けて新しく、その胸から生える小さな腕の一つは千切れている。他にも引っ搔かれたような傷は数多にあり、クイーン同士の戦いにでも敗北したかのような様相だった。

そして体は巨大であれど、恐怖など微塵も感じない。

——先に情報を渡せ、さもなくば貴様の裏切りを告げてやろう。プレデターは、プレデリアンの現在の数の概算と地中深くのその巣の大きさを、そのクイーンにではなく、近くで飛び掛かるのを躊躇しているゼノモーフに伝えた。

その途端に走り去つて行くゼノモーフを見届けたところで、クイーンに向き直して聞いてみる。

——ここに居るのはもう全て、お前の子であろうともお前の配下では無いだろう？ 最弱の女王様？

「ガアアアアアアッ！」

一気に怒り頂点に達したクイーンは、その巨体を回転させて尾を薙ぎ払ってきた。

最低限の跳躍で避ける。

……触れられてはいけない。きっとプレデリアンのクイーンの攻撃の全ては、掠つただけでも致命的なものになる。

ただのクイーンと言えど、前に戦った時は鎧を身に着けて、多様な武器を備え、それらを駆使していた。

しかし、今あるのは一本の槍だけであつても、今のプレデターにとつては大した相手ではなかつた。

動きはどれもが大振りで、目に見えて分かる。同じ体躯のクイーンと戦う時と全く同じであろう戦い方。

群れを統率する長なのに、頭が圧倒的に足りてない。何故こんな個体がクイーンになつてしまつたのかと思う程に落胆する。

多分、強いプレデリアンならば一匹だけでもこのクイーンには勝てるだろう。一撃を躱して首にでも飛び付き、振り解かれる前に強引に首の血管でも引き千切るか、胸に手を突つ込み、心臓を抉り出すか。——弱い。

落胆する気持ちを隠さずにプレデターは告げた。

それでもクイーンは全く変わらない。怒りに任せて腕を、尾を振るうだけ。

残り二体もこんな様子だつたら流石に困る。そんな事を思いながら、プレデターは振るわれた手の、指の一本を切り飛ばした。

「ギアッ!」

怯み、思わず後ろに下がるその一瞬。前に詰める。反射的に飛んでくる直線的な尾。一步ずれればそれは隣の空間を突き刺しただけ。後ろから捩じつて刺しに来るような素振りも無い。

尻尾を踏んで軽く跳躍、両手で槍を持ち直して高く振りかぶる。膂力と体重を込めて振り下ろされた槍の先端は、今度は胸から生えるもう一本の腕を切り落とした。

絶叫と共に血しぶきが上がる。流石に数歩下がり、しかし初めて引いたプレデターに対してクイーンは攻めては来なかつた。

度重なる痛手にクイーンが攻撃を躊躇したその瞬間、怒りが痛みで冷めたその瞬間、未だ無傷なプレデターが目に入り直つた。

息切れもしていなければ、緊張すらしていない。その自らを見る目は明らかに自身に失望している、自然体で立つその姿。

ただ、クイーンには戦つて勝つ以外に生きる道ももう無かつた。

プレデターの画策に乗る事にした周りのクイーン達は、特殊個体を数多く産む事も出来なければ、群れ自体の強さもそう大した事もないこのクイーンの群れを、もう既に潰していた。

今からでもこいつを捕らえられれば、比較出来ない程に強い子を作り出せる。返り咲ける。

けれども、それでも。このプレデターに勝てるビジョンは何一つとして見えなかつた。

肉体は矮小で、血を浴びてしまえば焼け爛れて死ぬだけのか弱い存在のはずなのに。その手に持つ武器はこの尾よりも遙かに短く、曲がりもしない単純なものなのに。

「ギ……グ……」

今更そんな実力の差に気付いたクイーンに対し、プレデターは冷

めた感情を向けながらこのクイーンを限界まで甚振る事に決めた。

不用意な腕の振りは、その代償として指の一本一本が失われる結果をもたらした。背後に回れば首を貫かれるのではなく背中の管を千切られ、それを突き刺そうとすれば自らの背中を突き刺してしまい、情けない悲鳴を上げた。

当たる事を願つて振り回した尻尾は、その先端が一度目の斬撃で感覚を失わされ、次の斬撃で切り落とされた。

流される血は次第に体の動きを鈍くし始める程の量となり、両方の腕から指が失せた頃、クイーンはどうとう膝を着いた。

「つまらなかつたな」

そう呟き、プレデターはそのクイーンの前に立ち直す。その瞬間、クイーンはプレデターに向かつて飛び掛かった。突然の動き、プレデターが緊張を解いた直後、しかしプレデターはひらりと予期していたかのように身を躰した。

全ての指が無くなつた手は何も抱く事もなく、喰らいつこうと出したそのインナーマウスのその側には、槍を高く掲げたプレデター。

恐怖は、絶望はもう既に味わい尽くしていたその筈でも、全身が凍る程のそれを覚えた。そして、インナーマウスは槍によつて串刺しされた。

「くくく！」

結局、血を浴びせる事はおろか、その身に触れる事すら叶わなかつた。

クイーンは身も心も完全に折られ、そして最後、プレデターは切り落としたそのクイーンの尾の先端で首を搔つ切つた。

数多に流れて行くその血、クイーンはゼノモーフらしきを失つたかのような程の悲壯に囚われ、そして死んでいった。

槍を引き抜いて振り返れば、プレデリアン達とゼノモーフ達の戦闘も終わりが近付いている。

今回は特殊個体はそう多くなかつたが、戦法を工夫しているようで少くないプレデリアンが死亡していた。

結局それは、数多くのゼノモーフを圧倒出来る程の技量を持つてい

ないからに過ぎない。

今のプレデターならば、首を搔つ切ろうとも、胸を貫かれようとも多少動けるような馬鹿げた生命力も無いならば、そして閉鎖空間でないのならば、プレデリアンの群れが来ようとも圧倒出来るだろう。

そう出来ないからこそ、プレデターはプレデリアンと戦う事を避けていたのであつて、そして罠に嵌つた後は何も出来ずに子種とさせられた訳だが。

そうでないただのゼノモーフには、簡単に圧倒出来る。

加勢してやるか、と思つたその時。ゼノモーフの数体が一気に吹き飛んだ。そこから姿を現したプレデリアンは、他のゼノモーフの纏まりに飛び込んでいく。

腕の一振りがゼノモーフの頭を叩くと首ごと捩じ折り、同時に尾が別のゼノモーフを串刺しにしている。そのまま全身を強く回転させ、それをモーニングスターのように他のゼノモーフに叩き付けた。骨が砕け、身が弾ける、派手にも程がある威力だ。

まるで嵐のような戦い方。

おお、と感心しているとそのプレデリアンが告げて来る。

——子種などに頼られるか。

プレデリアンの自我も、日を追う毎に強くなっている。

ただ……これは喜ばしい事なのだろうか？

それがクイーンからの独立の芽となるのか、それとも自分に対する強い障壁となるのか。

今のプレデターには分からなかつた。

ゼノモーフの女王が出来る過程は二つある。

一つは、女王となるゼノモーフを寄生させるロイヤルフェイスハガーから生誕したチエストバスターがそのまま女王となる場合。

そしてもう一つは、不慮の事態によつて女王が死亡した場合に、その群れで最も優秀な個体が女王となる場合。

前者は勿論、最上の胚から生誕したゼノモーフであるからこそ、女王としても強者である事が定められている。しかし、その最上であるというのは、そのフェイスハガーを生み出す前回の女王、もしくは死体からフェイスハガーを作り出すゼノモーフの素質に左右される。後者は、前者に比べれば個体の質としては低くなりがちだ。だがしかし、それを補つて余る知識、経験、狡猾さと言つたものを獲得している。

どちらが手強いかと問われればそれは勿論、後者だ。時にその女王を単騎で打ち倒してしまった程に技術に長けたプレデターに対抗するのに必要なものは、女王自身の膂力や群れの数と言つたものではない。自らの群れを使って如何にプレデターを消耗させ尽くすか、その思考だ。

しかし。

プレデリアンの女王に反逆を志すそのプレデターは、そんな女王からしてももう、既に逸脱した存在となっていた。

二番目に来た女王は、プレデターから見ても並よりは遥かに強いと直感出来る程であった。その兜は強く欠け、全身には傷が見受けられる。

だがそれは全て古傷だった。最初に贅とされた女王のような惨めな傷ではない。群れ同士で争い、それに勝利して来た証であつた。

そして向かつて来るその足取りにも惨めさは感じられない。自らの意志でこの自分を苗床にしようとするつて来ている。自分を倒せる程の策を案じて来たのだろう。

数で囲まれたプレデリアン達に対し、プレデターはその外で欠け

兜の女王と対峙している。また、敏捷性に長けるランナーや遠距離から酸を吐き出せるスピッターと言つたゼノモーフ達が周りを取り囲んでいた。

数はざつと見ただけでも百を超えていた。

——臆病な事で。

そう挑発しても、欠け兜の女王は何も反応を返さなかつた。自分の強さを理解されていると思うと嬉しくもあつたが、流石に余裕も少ない。

ここを訪れたばかりの自分ならば、自爆を迷う程に死を覚悟していただろうが。

槍を構える。修行の時間だ。

そして唐突にプレデターは欠け兜の女王へと駆けた。その瞬間、スピッター達がプレデターに向かつて、そしてクイーンの直前に向かつて酸を吐く。

どうやら、この行動は想定されていたらしい。

ゼノモーフの因子を色濃く取り込んだその血はもう既に酸性を示し始めている。身に受けても一気に体が焼け爛れ、崩れ落ちていくまでの致命傷にはならないだろう。

だが、無傷でも居られない。体を捩じり、槍を振つて直撃を避ける。僅かな飛沫が体に降りかかる。

じわりと音を立てるが、表皮が黒ずみ、剥がれ落ちるに留まつた。筋肉までには届いていない。血溜まりを踏んではいけない事は変わらないが、多少は気が楽だ。

ランナーが四方八方から駆けてくる。飛び掛かつては来ず、距離を取つてギリギリ届く位置から尾を突いて来る。スピッターが更に酸を吐いて来る。そして欠け兜の女王は一步離れた位置に居るが、隙あらば致命の一撃を叩き込もうと窺つている。

成程、出来るだけ損害を抑えつつ自分を摩耗させようと企んでいた。

だが、プレデターは突いてきた一匹の尾を掴み、力づくで振り回した。

「ギイツッ!」

片腕で易々と振り回せる膂力も既に備えている、それは飛んでくる酸を打ち消した。搔い潜つて飛び掛かつたランナーの数匹は、しかしそんな最中のプレデターにも傷一つ付けられずに槍で首を切り裂かれる。

そのまま投げ飛ばされたランナーは別のランナーにぶつかり、ごろごろと転がる。そしてその二匹は駆け始めたプレデターによつて起き上がる事も叶わなかつた。

そうして狭い包囲を搔い潜れば、ランナーの尾を根本から切つて手に取る。その身長程の長さを誇るゼノモーフの尾は、ゼノモーフにとつての主力武器であり、そのままで鞭としてプレデターも活用する程だ。

「久々に使うが」

そう呟いてビチイツ！ と一度振えば、その先端はまた包囲をしようとしていた一匹のランナーの頭を反応も許さず弾き飛ばしていた。

「……」

ただ、敏捷性を第一に誕生させられたランナーの尾は細い。自分の膂力で振るつていてはそんな長持ちはしなさそうだった。

まるで手が付けられない。未だプレデターに触れた子は居らず、子供は着々と数を減らされている。

そして、欠け兜の女王はそんな相手に対してもう新たな手立てを思いつけていなかつた。

この欠け兜の女王はプレデターが想像した通りに、女王となる事を定められた女王ではなく、女王を喪つた群れの、最も優秀なゼノモーフとして新たに成った女王であつた。

女王と成る前は幾多の戦闘を経験して勝利、生き延びて來た。そうする内に自らの主導で一つの群れを潰した事もあつた。

自らが女王と成った後には、子を数多く産みながらも他の群れを幾つか潰して我が物とした。襲撃に對して全て防衛を成功させてきた。

そんな歴戦且つ、経験豊富な策略家である欠け兜の女王は、このプレデターもまた我が物と出来る自信があつた。

最初の無能とは違つて、自ら我が物とする為に前に出た。油断せずに確実に仕留められるように策も練つた、はづだつた。

悔つた訳ではない、はづだ。そう思いながらも、我が子は次々と屠られている事実は変わりない。傷と言えば、その身に僅かに付着した酸だけ。

しかし、欠け兜の女王には一つ、それもプレデターを相手取る上で重大な要因に対して認識出来ていない事があった。

プレデターと言う種族は、狩りを本能レベルで好いている事。狩りの為ならば、その腕前の向上の為ならば、自らの命を死地に差し出す事は勿論、宇宙に飛び出して他の知的生命体に文明を与える事さえも厭わない。

そうして引き継がれていく技術は、個々に培われていく経験は、知的生命体の中でも遙かに高度であり、プレデリアンの女王ですら罠に嵌めて抗いようのない数で圧し潰す事を選んでいる程だ。

そして今、その技術と経験は、ゼノモーフの因子を身に取り込んだ事によつて更に底上げされている。

身体能力の向上、酸への耐性に始まり、そしてゼノモーフとしての精神性——時に命を投げ打つ事さえも厭わない程の忠誠、女王の為ならば碎ける事のない意志の強さ。

その長所のみをもう既にこのプレデターは十全に使いこなしていた。プレデリアンの女王への忠誠は……未だ怖気づいているが一応仮初めである。

プレデリアンとしか対峙した事のない欠け兜の女王は、それを認識出来ない。しかしながらも、新たに策を打つて出る。

自らの子の死体を蔑ろにする事は、少なくとも好める事ではない。だが、このプレデターを倒す為に必要ならば行うべき事であつた。今も尚、子は殺され続けているのだから。

そうして、欠け兜の女王は子の死体を叩き潰した。酸が弾け飛ぶ。また骨が碎け、肉が千切れたそれをプレデターに向けて投げつける。寸前に気付いたプレデターは、強く横に跳躍した。回転しながら飛んで行くそれは酸を激しく撒き散らしながら、他のゼノモーフにぶつ

かるだけに留まつた。

しかし、後の事を考へる時間まではなかつた。跳んだ先にはゼノモーフがなるべく少ない場所を選んだが、既にそこにはスピッターが酸を吐いている。

槍を突き立て、着地をずらす。転がつて構え直したその目の先では、欠け兜の女王がそんな新たな武器を量産しており、ゼノモーフ達も死体を引き千切つてゐるその様子。

これからは叩き潰された死体の他に腕や足も数多に飛んでくる。

「嫌らしい事しやがる……」

敵陣の中に突つ込んだ拳句にその身を爆発させるゼノモーフの種類も居ると聞いた時には、ゼノモーフと言う種族が追い詰められたらそこまでの変異をするのかと驚きもしたが。

やつてゐる事は大体同じだ。

そんな変異をさせる女王は、子の死体を活用する事も想像出来ない馬鹿なのだろう。

ゼノモーフの手足や内臓が飛んでくる。穂先で切るにせよ柄で弾くにせよ、血が飛び散る。避けるのが最善だが、そうしていれば足場が無くなり追い詰められる。

早急に数を減らさなければいけない。だが、その為には武器を得たゼノモーフ達の懷に飛び込まなければいけない。

「……」

こうして一匹一匹を着実に倒していくよりも遙かに危険だ。だが、その程度出来なればプレデリアンの女王には勝てやしないだろう。

欠缺兜の女王がまた死体を投げつけて来る。回転しながら撒き散らされる血は広範囲に広がるが、良く見れば回転の向きに従つてしまふ酸は散つて行かない。

ゼノモーフ達がプレデターの跳躍を妨害するように位置取るが、プレデターは前に向かつて走つた。

予期していなかつた動きにゼノモーフ達が一瞬硬直する。

しかし全てがそうではなく、優秀であろう個体が前へと出た。突き出された槍を頬を、肩を抉られながらも辛うじて避けながら、突き出

された腕を掴んだ。

初めての接触、だがプレデターは腕を振るだけでそれを解く。そして首を掴まれ、抵抗する間もなく指の力だけで折られた。

けれどもその瞬間、今までどうしようとも止まらなかつたプレデターが、止まつた。その僅かな硬直は、初めての接触は、ゼノモーフ達が好機と取るのには十分過ぎた。

欠缺兜の女王が、尾を叩き下ろす。プレデターが後ろに飛び退けば、事切れたらばかりのゼノモーフは四散する。僅かに血が体にまで飛んで来る。

そして数多のゼノモーフが死体を投げつけ、酸を吐き、そして襲い掛かつて来る。

その中で飛び掛かつて来たゼノモーフを串刺しにして盾にしながらプレデターは前へと進んだ。両脇から爪が切り裂こうと、尾が貫こうとしてくる。

生け捕りにしようとしていた最初の余裕はもう既に微塵もないその殺意。

槍から一瞬手を離す。身を翻して攻撃を避けながらも、一蹴りでゼノモーフの首を折る。槍を掴み直し、更に突き進む。奥に控えていたスピッターダの懷へと踏み込んだ。しかしそこにはもう既に酸が溜まりとなつていている。

そこでプレデターは槍を地面へと突き刺し、串刺しになつていたゼノモーフを踏みつけ足場とした。槍を引き抜く。その動作の内に背後からランナー達が迫る。スピッターダが飛び退きながら酸を吐き、死体を投げつける。

プレデターは更に前へと跳んだ。死体を弾く。酸を身に受けたが僅かに済ませる。スピッターダの背後にまで着地した時には槍が振るわれており、スピッターダは血を噴き出しながら崩れ落ちる。

「これが欲しかったんだ」

奥から酸を吐き出してくるだけのスピッターダは中々に屠れなかつたが、やつとこうして、背後にまで立つ事が出来た。

プレデターは尾を切り、手に取つた。

武器として使う為に血を溜め込む性質のスピッターは、プレトリアンやクラッシャー等の種を覗けば、ゼノモーフの中では大きい部類に入る。

その尾は、ランナーのそれよりも太く頑丈だ。また穂先は二股に分かれしており、複雑な傷を与えられる形状をしている。

プレデリアンの尾よりは頑丈ではないが、少なくともこの戦闘では十分間に合いそうである。

そしてその時であつた。

唐突にやつて来たプレデリアンがランナーを叩き潰した。

異変に気付いた欠け兜の女王が振り返れば、プレデリアンを囮んできたクラッシャーやプレトリアンと言つたゼノモーフ達がもう既に半分以上が倒れていった。

それも、欠け兜の女王にとつては想定外だつた。もう少しの時間は耐えられると踏んでいた。

しかし。プレデターに本能レベルで刻まれている狩猟本能は、狩りへの誇りはプレデリアンにも少なからず受け継がれている。子種であるプレデターに女王への貢献度を凌駕されるその屈辱は、プレデリアンの実力を持ち上げるに至つていた。

新たに策略などを考へてゐる時間はもう無かつた。女王としての自らの命すらも賭けて、このプレデターを早急に倒さなければ、あるのは破滅だけだつた。

そんな覚悟を傍目に、プレデターは適当なゼノモーフに二つ目の情報を探した。それは、プレデリアンの女王が擁する子種としてのプレデーターの数。育てている最中の雄と、そして子種として不可欠な雌がどれだけ居るのかの情報。

プレデーターにとつては、まだ反逆をばれたくないが為の早めの行動であつたが、欠け兜の女王にとつてはプレデターがもう自身に対しても勝利を確信していると取れる行動だつた。

怒り心頭となつた欠け兜の女王は、やつて來ていたプレデリアンの一匹に尾を叩き付けた。鋭いその先端によつて真つ二つにされたプレデリアンを更に踏みにじりながら、プレデターに向く戻る。

プレデターは片手に槍を、そしてもう片方にスピッターの尾を持ちながら、仕切り直すようにゆっくりと歩いて来る。

——さつさと終わらせようか。プレデリアン達が来る前にな。

その動きには未だ、疲労も怪我も影響している様子が微塵も見えなかつた。

尾を持つ腕が振るわれる。ランナーの頭が弾ける。

槍を持つ腕が横薙ぎに払われる。数匹のスピッターの首から同時に血が噴き出す。

全く違う二種の武器を容易く使いこなすプレデターにゼノモーフ達は近付けない。死体を投げつけても酸を飛ばしても、それらに容易く弾かれる。背後から狙おうとしても、まるで背後にも目が付いているかのような動きで的確に仕留められていく。

そこに、とうとう欠け兜の女王が積極的に仕掛けた。もう好機を悠長に探つている時間は無い。

巨躯を支えながらも強く駆ける事も出来るその脚で一気に近付き、蹴り飛ばそうとする。

当然そんな大振りはプレデターに当たる訳ではないが、その背後にはゼノモーフ達が続いて来ている。また欠け兜の女王の背や頭の上にも数匹のゼノモーフが乗つており、虎視眈々とプレデターが隙を見せる時を窺っている。

プレデターは最低限の動きで蹴りを躱す。背後から続くゼノモーフ達が飛び掛かり、同時にスピッター達がそこに酸を吐く。

飛び掛かるゼノモーフ達を屠る事は可能だ。だが、欠け兜の女王の尾が高く掲げられている。ゼノモーフ三、四体分の長さを持つそれは女王としての優れた肉体もあつて、ただのゼノモーフよりも遥かに素早く複雑に動く。

距離を取る事を優先したプレデターに、振り向いたクイーンが尾を飛ばす。それはプレデターの跳躍にも追いつき、しかし辛うじてプレデターは身を捩つて躱した。

腕の肉が僅かに抉れる。頬から皮一枚、ツツ、と血が漏れ出す。背中から倒れる。

初めて体勢を崩したプレデター。ゼノモーフ達が殺到する、それより前に欠け兜の女王が尾を持ち上げ串刺しにしようとする。プレデターはしかし、その尾を避けようとはしなかった。体を跳ね起こし、欠け兜の女王の尾が突き刺そうとしたその瞬間、持っていたスピッターの尾の穂先を掴み直して、逆に欠け兜の女王の尾へと突き刺した。

一キイツ!

唐突な反撃 思わず尾を引き戻す 突き刺したアレテタリも勢い良
く引っ張られ、そして手を離す。慣性に従つてプレデターは欠け兜の
女王の背へと飛んで行く。

背に乗つていたゼノモーフは辛うじて尾を振つて攻撃しようとした。今度、プレデターはそれを掴み直す。ゼノモーフは思わず落とされまいと欠け兜の女王にしがみついた。

——それが、致命的だつた。

その行動によつて、プレデターは欠け兜の女王の背に足を着く事が出来た。しがみついていたゼノモーフを蹴り殺し、女王特有の巨大な背中の突起に手を掛け、槍を持ち直す。

周りのゼノモーフ達が焦つて欠け兜の女王へと群がろうとする。頭に乗っていたゼノモーフが飛び掛かる。欠け兜の女王がプレデターを振り落とそうとする。

どの行動も実を結ばれるよりも早く、プレデターは槍を首の骨に向かって突き刺した。

「ガツ……」

プレデターの叡智を以て作られたその槍は、プレデターの膂力もあつて深々と突き刺さる。

がくんと膝を折り、欠け兜の女王は崩れ落ちた。

同時にゼノモーフ達が一斉に悲鳴を上げ、のたうち回る。

女王に与えたその致命の一撃が、子にも一斉に伝播したのだ。群れとして一丸となつてプレデターを屠ろうとした、その団結力が逆に仇

となつた。

「……さて」

槍を引き抜けば、女王はもうぴくりとも動かない。それと同様に脅威を失つたゼノモーフ達を仕留めていく間に、プレデリアン達もやって來た。

何を伝えられなくとも、目が無くとも、悔しそうにしているその様子は明らかであつた。

中々に快感であつたが、しかしまだ、それに浸る時ではない。

| 戻ろうか。

淡々と、プレデターはそう提案した。

ゼノモーフの因子を取り入れた肉体に慣れる事は勿論、武器を手に持ち自身の培つてきた経験、技術を底上げ出来た事までは実感を持つようになつた。

ただ、それだけでプレデリアンの女王に勝つ事が出来るかと言われば、否、だ。

プレデリアンの巣窟に戻つた後には、いつも通りに槍を渡す。それから虚ろな顔をする同族を目の前に子種としての役目を果たしながら、プレデターは脳裏でその女王の事を思い浮かべる。

植え付けられた恐怖は、未だ強く体に根付いている。思い浮かべるだけで、命の危険がその雄が生存本能に駆られる程だ。この地下に入つただけで自我を奪われる程ではなくとも、女王には逆らえないよう仕組まれているその因子は、完全に抜け落ちる事もないだろう。しかし、それは武器にもなる。

外に出て、自我を取り戻したプレデリアン達と戦いを共にして、それを確信していた。

プレデターの本能として存在する、本能的な狩りへの欲求、向上意欲。それは確かにプレデリアンにも引き継がれている。

そんなゼノモーフが群れとしての繁栄、安寧に身を捧げるだけの一生に満足出来るか？ 自ら女王となりたい者も居るだろう。

誑かせば、多少なりともその意欲に心が揺れる。プレデリアンが居ないはずがない。

ただ、それは女王と共に闘してくれる、自分の味方になつてくれるという意味でもない事を理解していた。

最良でも、結果的に女王を倒す目的が合致するだけだ。

……厳しいな。

結局のところ、この敬意とも呼べる程の恐怖を身に抱いたままに戦う事からは逃れられない。

それは、無謀か、挑戦かと問われれば、無謀に近い。

だがしかし、もう選んだこの道から外れる事も出来ない。このプレ

デターという優秀な苗床を欲しがっている他の群れ達には、この巣のある程度の構造も、保有している苗床の数も、プレデリアンの数も教えてしまっているのだ。

最後に教えないのは、この巣を攻めるのに最も重要な、この巣の入り口の場所のみ。それさえ教えてしまえば、周りの群れが一斉に効率よく、攻め込んで来る事だろう。

そしてそうなった時に自分がまだこの巣の中に居たのならば、自分はそれに対峙する事もなく疑惑を抱いた女王によつて処刑される事だろう。

無慈悲に、誇り高き死から最も遠く離れた死に方で。

行為を終えてから、プレデターは休む事にする。

ゼノモーフの粘液で固められた壁の窪み、そこに体を丸めて目を閉じる。小さい呼吸で、精神を落ち着かせた。

だから次に掃討に出た後には、この巣の入り口を教えた後には、もうここには戻らない。

プレデリアンの女王はきっと、怒りに任せてどこまでも追つて来るだろう。それに対し、逃げる事は出来る。

逃げ続けて、その内やつて来る船に乗つて帰る事も出来るかもれない。

だが、それはしない。立ち向かう事が如何に無謀に近い挑戦だろうとも、それは自らの生き方に反する。

「俺は、強くなつた……」

そう呟いたのは、それでも恐れを打ち消せない自分を鼓舞する為だつた。

* * * *

目が覚めて暫く。自我の無いプレデリアンが呼びに来た。

また、女王の元へと来いという事だつた。

今度は何だろうか。そう思うも、体は変わらず怯え始める。自分がこの巣の情報を他の群れに流した事はばれていないはずだ。あの時、まだプレデリアン達は包囲を突破し始めたばかりだつた。辿り着いた一匹のプレデリアンは女王によつて真つ二つにされた拳旬に踏み

潰された。

そのプレデリアンにも、自分がゼノモーフの一匹に情報を流した所は見られていないはずだ。

反逆を示す材料は、無い、はずだ。

そう考えながらも怯えは止まらない。何一つとして武器を持たされず、自分の身軽さを生かせない通路の中でプレデリアンが至る場所に居る、この状況。

女王がつまらない安寧を望んでいる事などに気付かずに子種として貢献するだけの生を送っていたならば、それは幸福だつただろうか？

そんな事を一瞬でも考えた自分が情けなくて仕方がなかつた。

そして、心の準備も何も出来ないままに着いてしまう。エツグチエンバーが数え切れない程に置かれた、女王の鎮座する広間。

そのエツグチャンバーの間をすり抜けるようにな王の元へと歩いて行く。一つとして反応しない。これら全てに潜んでいるフェイスハガーが自分に襲い掛かつて来たら、槍を持っていても逃げ切るのは難しいだろう。

そんな中を歩いて、抜けた。プレデリアンの女王、ただの女王より一回り大きく、そのプレデターという優れた種を元にして成長した肉体はまた、ただの女王よりも何倍も密に詰まった筋肉を秘めている。また改めて近くで見れば、その肉体は巨大になろうとも、自分が広大な地上に出ても逃げる事すら許さないような、プレデターからのしなやかさと敏捷性を未だ兼ね備えていた。

そのままの前で膝を着き、頭を下げる。

全く慣れる事が無い、存在感、禍々しさ。

本当に自分はこれに挑もうとしているのか？

全体重、全力を込めて槍を突き刺そうが、その表皮を削る程度しか出来なさそうな予感。

女王の吐息が聞こえた。それから兜がずれる音。

——何故、他の群れの長が一匹一匹、貴様に挑んで散つて行く？唐突に問われたのは、その疑問。咄嗟には返せなかつた。

少しばかりの間を置いて、プレデターは答えた。

——口減らしの為かと思ひます。苗床となるような生き物はもうこの地を除いて見かけませんし、特に、一体目の女王は弱者でした。

——それならば、やはり一気に捨てるべきだ。一匹一匹勢力を分散させて潰していく理由など無い。

否定出来ない。一匹一匹寄せ越せと言つたのはプレデター自身だったのだから。

そして、こんな形で頭を使う事などプレデターは今までする事は無かつた。狩りの腕前さえあれば誰もが道を開くその価値観の中では、する必要が無かつた。

大した思いつきも出さずにプレデターは答えた。

——何かそうする思惑があるのかもしません。

——この私も思いつかない思惑がか？

体がびぐ、と震えた。答え方を間違えたのだと感じた。

首の下に、その尾の先端が差し込んでくる。そうして顎を持ち上げ、女王が目の無い顔でじっと自分を見て来る。

今、自分はどのような顔をしているのだろう。

呆然と思うそれは、共に競い合つた同胞達の事を走馬灯のように思い出したからだつた。

——ただ、それは別に大した事ではない。他の群れの長が幾ら結託したところで、私が出れば済むのだからな。

結局、自分はこの女王にとつて、脅威でも何でも無いのだろう。ただの女王を倒したところで、この女王を倒す為の経験値に出来ると思っていた事自体が間違いだつたのかもしれない。

そして、女王は聞いて來た。

——貴様は、我が子供達より功績を立てて嬉しいのだろう？

怒りの表情は向けられていない。ただ、気に食わない答えを返したのならば、無慈悲にこの尾が首を切り飛ばすように思えた。

正直になど答えられない。だが、答えずにはいると顎を乗せていた尾が僅かに滑り、その切つ先が喉に触れる。

女王を満足させられる答えなど、思いつく訳も無かつた。

——……はい。

——我が子達は、貴様のせいで苛立ちを抑えられない。私が命令しても、鬱憤は溜まるばかりだ。これをどうしてくれる？

それを女王の支配からプレデリアン達が抗おうとしている、と前向きに捉える事など勿論、出来はしなかった。

——……私は、武器を持てなければ、貴方の子には遙かに劣ります。

——そうだな。

首を乗せていた尻尾が離れたかと思えば、頬を叩かれて、後ろを向けられた。

いつの間にかプレデリアン達が数多にやつて来ていた。体が冷え切る。

——こんな面倒な事をする必要が出てくると分かつていたならば貴様を殺しておきたかったが、武器を持たない貴様を殺したところで、我が子達には一生貴様を追い越せなかつた屈辱が残るだけだ。我が家子のいずれかが武器を持つ貴様を超えるまでは生きて貰う。

辛うじて、ほつとする。死にはしない、が……。

プレデリアンの一匹がやつて来るのに対して、女王が鬱陶し気に命令した。

——別のところでやつていろ。うるさいのは嫌いだ。

プレデターが立ち上ると、プレデリアンが来いというように首を振つた。

……最悪ではなかつたが、最悪だ。

これら全てのプレデリアンの鬱憤を晴らした後、自分は生きていても、まだ五体満足で、槍を握れる体で居られるだろうか？

女王の元から歩いて戻る。エッグチエンバーの間をすり抜けて、相変わらずそれらはぴくりとも動かない。

だが、それらを抜けた後にはもう、四方をプレデリアンが囮つていた。

自分に向けて滾らされているのは、殺意ではない、と思う。しかし、敵意ではあつた。それは間違いない。

喉を鳴らし、隠し顎を出す。力を込められた尻尾がゆっくりと揺れ

ている。この中に、自分の子種を元にしたプレデリアンも居る事だろう。いや、それが大半なのかもしれない。だからこそ、これ程に敵意を向かられているのかもしれない。

歩いて行く。女王の広間を出て、何度も曲がりくねった通路を抜け、そして更にもう暫く。

そこでプレデリアン達は止まつた。

——それで、俺をどうするんだ？

そう聞けば、無言で腹を尾で叩かれた。体が強く吹き飛ぶ。

「ゲホツ、ゴホツ」

立ち上がりうとすれば、プレデリアンの一匹が馬乗りになり、組み敷いて来る。両腕を掴まれ首に尾が巻き付いてくる。ただのゼノモーフでもプレデターやを持ち上げられるだけのパワーを持つその尾は、プレデリアンとなれば、もうプレデターの腕と同等な程に太い。そんな尾が、スパイクが首を貫かないように、しかし絶妙に痛みを与えるよう締め付けて来る。

他のプレデリアンも寄つて来て、そんな自分を上から覗いて来る。

ただただ痛みを堪えていれば、首を絞める力が強くなってきた。ぶつ、ぶつと皮膚に穴が開く音がした。

「ウツ、グツ」

これは、自らが如何に活躍しようと子種に過ぎないという事を再認識させる為の行為であり、そして鬱憤を晴らす行為であり、また武器など持たされなければこうも無力な存在なのだと知りたがる為の行為であり。

抗わなければ、より強い苦痛を与えられる。気絶したところですぐに起こされるだろう。

しかし、抗おうとしたところで、プレデリアンに掴まれている腕は僅かに動かせる程度で、拘束から外れる事は全く出来ない。

確かに、このプレデターの膂力はゼノモーフの因子を取り込んで強くなっている。とは言え、それは利用しているに過ぎない。

ゼノモーフのように、プレデターの長所のみを奪い取り、より尖らせるような事までは出来ていない。プレデリアンには純粹な身体能

力で敵う事はない。

頭を別のプレデリアンに踏みつけられ、柔らかい地面に埋められていく。

如何に力を込めようとも、何も実を結ぶ事はなく、段々と限界が訪れて来る。意識が薄れていく。すると、頭を踏みにじつっていた脚が退いて、馬乗りになつていたプレデリアンが立ち上がる。続いて首を絞めていた尾が自分の体を持ち上げた。腰が浮き上がり、足が地面から離れる。首吊りにされた。

首の拘束が僅かに緩む。尾を掴んで、首吊りになるのから免れるだけの力を込められる、ギリギリの拘束。

次に何をするのかと思えば、延々と、延々とそれが続く。他のプレデリアン達も何もせず、ただひたすらに自分を眺めている。

延々と、延々と。プレデリアン達の小さな呼吸の声。時折口から地面へと垂れる涎の音。他に暴れられるだけの余力を許さない力で絞め続けられる。

ただひたすらに、ひたすらに。自分を吊り続けるプレデリアンの目の無い顔は、今は敵意も無い。ひたすらに冷淡だつた。強く鍛えていふとは言え、いい加減指が、腕が僅かながらも疲れてきていた。

それでもずつと、ずつと。後は何も聞こえない。何も起こらない。指が、腕の疲労が徐々に加速してくるのに対して、けれどもプレデリアンの尻尾はどれだけの時間が経とうともびくとも動かない。

優秀な肉体を備える種族がそれを鍛え上げ、更にゼノモーフの因子を取り込んで更に強くなつたその腕二本の持久力は、ただ生まれて成長しただけのプレデリアンの一本の尻尾に劣るその事実。

どうとう呼吸が荒くなつていく。腕が、指が激しく痛んでくる。強く尾を握ればバイクに指が突き刺さり、血がだらだらと流れ始めた。

もう止めてくれと懇願したくなる。けれどそれだけはプライドが許さず、必死に堪えていた。

武器を持つて、自由に動ける空間があれば貴様らなど一匹残らず串刺しに出来るのだからな!!

そう信じ、しかしそんな挑発を、自分を囮んでいるプレデリアンにする反逆も出来なかつた。

そんな事をすれば最悪、殺されるか、本当に自分は子種としか生きられない体にされる予感が強くしていた。

ただただ、堪えるしか出来ない。

そして、とうとう限界が訪れる。両腕がだらりと垂れ、その指先から血がたらたらと流れていった。首が吊られ、意識が急激に薄れいく。周りを囮んでいたプレデリアン達が一部退くと、その開いた空間にそのまま投げ飛ばされた。

受け身を取る事も出来ずに、プレデターはバウンドしてごろごろと転がる。

「う、ぐ……」

ぜえ、ぜえと、やつと自由になつた呼吸に体が喜んだ。だが、腕に力が入らない。立ち上がる事すらままならないその時にプレデリアン達はまた囮んできて、胸を蹴られた。

手加減されている。本気で蹴られたら肋骨は砕けているが、それでも必死に空気を取り込んでいた肺が動きを止めるのには十分だつた。声にならない悲鳴を上げてのたうち回るプレデターが、プレデリアンの足にぶつかる。そのプレデリアンが頭を掴んで持ち上げた。こめかみを握り締められ、呼吸が戻ったプレデターがまた強い悲鳴を上げた。

力の入らない腕が必死にプレデリアンのその片腕を引きはがそうとするが、両腕で掴んでもびくともしない。

それでも叩いて、爪を立てて、そんな事を何度もしていると、唐突に腕が離れた。

「あ」

拳を振りかぶったプレデリアンが見えた。

すぐさま覚醒させられる。

強く傷付けるような事はされず。だが、尻尾の一本で持ち上げられ、そのまま地面へと叩き付けられる。胸を蹴られてのたうち回るのをじつと見つめられる。腹を蹴られて何度も吐いた。髪の毛を掴ま

れ、そのまま壁まで投げつけられる。その度に金具で束ねているその束が幾つか根本から千切れた。

腕の力が回復してくると、また限界が来るまで首を吊られる。

そんな事がひたすらに繰り返される。気絶した回数も数えられない程に疲弊し、もう何も抵抗出来なくなる。

プレデリアン達はそこで虐げる事をやめた。

地面に横たわり、ぴくりとも動けないプレデターに、しかし散つてはいかない。周りを囮み続ける。

暫くするとプレデリアンの一匹が、苗床となるプレデターの子供を連れて来た。苗床として生かされている事すらも理解していないその無垢な子供。連れて来たプレデリアンはその子供の頭を掴むと、額を隠し顎で貫いた。

自分がこれから死ぬ事すら理解しないままに絶命した子供に、プレデリアン達が群がつて捕食していく。そんな緑色の血で口を染めたプレデリアン達が、プレデターの頭を掴んで口を近付けて来た。

何をされるのか分かつていても、もう抵抗する気力も体力も尽き果てている。

口を開けられ、そして四つに開いた口同士が密着する。そして、ごきゅり、ごきゅりとプレデリアンがその咀嚼した子供の肉をプレデターの中へと流し込んでいく。

その後ろには、プレデリアン達が並んでいた。

吐き気が込み上げて来るのに対して、プレデリアンが接吻を終えると、すぐさま口を強く閉じさせて吐き出せないようにしてくる。その間に待っていたプレデリアンが口を開いて寄つて来る。

そうして十四以上のプレデリアンに口移しで子の肉を与えられ、終わつた時には、腹はパンパンに膨れ上がつていた。

そして、仕上げにと、吐き出せないように口は粘液で固められた。

「…………」

しかし、プレデリアンはそれでも去つていかない。

……もしかして、終わりじゃないのか？ 僕の体力が回復したら、またこれを続けられるのか？

いつまで？俺が屈するまで？

そんな絶望を味わいながら、プレデターは気を失つていった。

目を覚ませば、プレデリアン達は未だ周りを囮んでいた。プレデターはそれを見てどうとう限界を迎えた。

——こんな……こんな寄つてたかって、武器も持たない俺を虐げて、それで満足か？

気付いた時には、そう聞いていた。プレデリアン達の動きが変わる。だが、それでまた虐げられる事はなかつた。相談するような素振りを一瞬見せた後、足を掴まれた。

そしてどこかへと引きずられていく。

殺される訳じやなければ、どこに？

答えは一つしかなかつた。アレを、飲まされる。これ以上アレを飲んだら……俺が、俺じやなくなる。

それは、死ぬのと同義だ。

「ン、ン――――！」

動くようになつていた腕で、必死に地面を掴む。だが、プレデリアンには敵わない。何度も何度も地面を掴んでも、全てが無意味なように引きずられていく。

——悪かった、お前等が上だ、認める、認めるから、だから！

無意味でもプレデターは足搔いた。柔らかな地面は何度も千切れ、自由な足でばたばたとプレデリアンの腕を蹴る。

しかし、プレデリアン達は何にも反応しなかつた。ただただ、その場所へと歩いて行く。

——ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！こんな生意気な口はもう二度と聞きませんから、貴方達より活躍などしませんから!!

「ン――！　ン――！　ンン――！　ン――！」

矜持をも、恥をもかなぐり捨てて、プレデターは懇願した。しかし、ゼノモーフという生物はそんな情を持つ存在ではない。

そして、その場所へとは呆氣なく着いてしまう。プレデリアン達の

寛ぐ場所の一つであり、そしてゼノモーフの因子を取り込ませる為の液体が溜められている場所。

そこでは既にプレデリアンの一匹が胸を膨らませ、口を閉じて待機していた。

そして口を覆っていた粘液を引き千切られ、プレデターは叫ぶ。「嫌だ嫌だ、ごめんなさいごめんなさい、もう一生あなた達の下僕で構いませんから、お願ひしますお願ひしますお願ひしますお願ひします!!」

涙を流し、糞尿をも撒き散らしてプレデターは、口からも、思念でも懇願していた。

「げほつ、ごほつ、おぶえつ」

そして口からも詰め込まれていた肉を吐き出し、その吐瀉物がプレデリアン達に飛び散つていく。

そんなプレデターを、足を掴んでいたプレデリアンが、待機しているプレデリアンへと無造作に投げ飛ばす。

その目の前へと転がったプレデターは、立ち上がる事すら忘れて、ひたすらに這いずつて逃げようとする。その目の前へとプレデリアンは歩いて行き、そして因子を溜め込んだ口を近付けていく。

「ひ、いや、いやだ、いやだいやだいやだ」

頭を両腕で掴まれた。振り回される腕は尻尾で縛られ、暴れる足は踏みつけられる。

「あ、――――――――――――!!!!」

しかし、それ以上プレデリアンは何もして来なかつた。満を持していた口を開く事もなく、周りのプレデリアン達もそれに何をする事もない。

ひたすらに泣き喚き、今となつては懇願ですらない支離滅裂な思念を飛ばしてくるプレデターに対して、プレデリアンは拘束を解いた。

それでももう既に正気を失っていたプレデターは喚き続け、そんなプレデターに対してもプレデリアン達は去つて行つた。

プレデターが正気に戻つたのは、それから暫くの後だつた。

「え、あ…………?」

何故飲まされなかつたのか、どうしてプレデリアン達は凌辱をやめたのか。そんな事を考える余裕もない。

それから更に長い間、プレデターは体を縮こまらせて、ひたすらに安堵を噛み締めていた。

6.

何故、プレデリアンは自分にその液体を飲ませなかつたのか。その疑問を考えようにも、プレデターが受けた仕打ちは、肉体的にも、そして精神的にも激しく強く身を蝕んでいた。

立ち上がる事さえもままならず、プレデリアンが近くにやつてくれば体が怯えるその始末。

だが、プレデリアンは自分の方に多少顔を向けるだけで何もして来なかつた。

少なくとも、これ以上自分が虐げられる事はないようだ。

「クソ……」

それに安堵する自分にも強い不甲斐なさを覚えた。今ここに刃物でもあつたならば首を搔つ切つて死んでしまいたい程でもあつた。だが、ゼノモーフという種族はあれだけ暴力的な姿形をしておきながら、巣の中は粘液に覆われてどこも柔らかだ。石の一つも転がつていな

プレデターが自らの自我だけが失われて傀儡とされる事を恐れていた事には、自覚もなかつた。ただそれは、自ら命を絶つよりも、フエイスハガードに寄生されるよりも遙かに恐ろしい事だつた。

これからどうするにせよ、まだ、生きている。受けた仕打ちは屈辱過ぎて、矜持を根こそぎ奪われたようで本当に死にたい程であつたが、死ぬ事も出来なければ、復讐心が湧いてこない訳でもなかつた。ふらつく肉体を叱咤して、体を起き上がらせる。吐き気が酷い。腹の中にはプレデターの子をプレデリアンが咀嚼したものを突つ込まれている事を思い出した。

その瞬間、思い切り吐いた。口周りは粘液で固まつていて、それも引き剥がす。

「はあつ、はあつ、クソ、クソ……」

とにかく、今は。体を休ませなければいけない。何か普通の物を口に入れ直して、体を清潔にして、そして眠ろう。全てはそれからだ。

壁に手を付きながらふらふらと。

肉を食い、水を飲んで体を洗う。その間にもプレデリアンとすれ違えば体は勝手に怯えてしまう。だが、それら全ては自分を見て来はあるものの、特段何もして来る事もなかつた。

虐げられる前の完全な無関心とも違うその仕草。

この女王の目の届く領域内でも、自我を持ちつつある。それは断言しても良いだろうが、喜べる事ではもうなかつた。

「俺が蒔いた種なんだよな……」

種が芽生えた結果がこれだ。三匹目の女王を倒したならばもうここには戻つて来れないが、三四目の女王を普通に倒したところでプレデリアンの女王に手が届くとは全く思えない。

それに、と前の戦闘の事を思い出す。一度だけゼノモーフに腕を掴まれた。それがプレデリアンであつたならば、自分はその時点で敗北が決まつていた。自分が何をするよりも先に、腕を握り潰すも投げ飛ばすも出来るだろう。

どうすれば良い。

絶望ばかりが襲つてくる。考えたところで良い案が出てくるようにも思えない。

ただ、それでも考える事をやめては本当の終わりだが……とにかく、今は考えるのもとにかく後だ。

体を洗う腕も震えている。二足で立つて事すら未だに危うい。首に手を当てれば、幾度となく長時間スパイクのある尾で締められた跡が強く残つていた。全身も青痣だらけだ。

休まなければいけない。ここまで虐げられた体は、一度寝ただけでは全快しないだろう。後は……それまでに三体目の女王が仕掛けてしまない事を祈るばかりだ。そんな、祈るしか出来ない自分にも酷く嫌な気が差した。

* * * *

一度眠れば、少なくとも壁に手を付かずとも歩く事までは出来た。ただ、手足には余り力が入らない。

ひたすらに長時間虐げられた肉体からは、体内に蓄えられていた工

ネルギーをすっかり奪い取られてしまっていたようだつた。その日もプレデリアンが側を通り過ぎるのに怯えながら肉を食い、水を飲む。

これ程に肉体が求めていた食事をする時などいつ振りだらうか。だからと言つて感謝など絶対にしないが。腹が膨れるまで胃に肉を詰め込むと、再び眠気が襲つてくる。

ただ、その前に仕事をしなければいけない。……きっと、これも命の危険に晒されて元気を見せるのだろうと思ひながら。

磔にされ、その上で四肢を粘液と同化させられ、そして子種にされている女性のプレデター達は、自分と行為に及ぶ時だけ僅かながらに表情を見せる。

自分が前に立つと、ほんの僅かにだけ目に光が灯る。

「あ、う……」

言葉も知らず、この外の世界も知らず。何故このように子を産むだけの生き方をさせられているのか、そのプレデリアンがどのように誕生するのか、それらの何も知らない。

……自分が何よりも恐れていたのは、こうなる事だつた。

誇りを抱いたままに死ぬ事よりも、より強大な力に打ち負けて単純にその糧にされるよりも。このように生かされながらひたすらに利用され続ける事が最も恐ろしい。

体を密着させ、雄と雌を交わらせる。想像通りにすぐに活発になつた雄は、肉体の疲弊振りとは反して平時よりも幾度でも精を放つ事が出来そうだつた。

息を切らせながら、精を放つ。

「うう、ああっ」

言葉を知らないプレデターが、もつと、と懇願するのを無視して、次に移る。それを何度も繰り返す。

精が尽きる頃にはまた疲労が襲つて来る。去る前にプレデリアンがやつて来て、その女性のプレデター達を物色し始めた。

まだ子を産めるかどうかを確認しているのだろう。そんな最中のプレデリアンに聞いてみた。

——何故、俺にアレを飲ませなかつたんだ？

答えを返される事は期待していなかつたが、プレデリアンは自分の方を振り向いて来た。観察するかのように。

殺意などもなく、単純にまじまじと。少しの時間、それだけが続く。しかしプレデリアンは無言のまま顔を背けて、磔にされている女性プレデターの一人を引き剥がして女王の元へと持ち去つて行つた。

「……」

分からずじまいか、とは思わなかつた。自分を観察するその仕草には、何らかの理由があつた。軽蔑のような所作も感じられなかつた。寝て起きれば、何か思いつくだろうか。

未だ、体力は尽きかけたままだ。

プレデターは、プレデリアンの後を追うように歩き始めた。寝床は、プレデリアンが歩いて行つた方向と同じだつた。

途中で寝床に着けば、役に立たなくなつたプレデターを持つていくプレデリアンが通路の先へと去つていくのを眺めながら立ち止まる。あのプレデターが何を思つているのかが分かる事は無いだろうが、きっと自分がああなつてしまつたら、やつと死ねるとでも思うのだろうか。

そんな事を思つてゐる時点で、自分の矜持も何もが完全に折られてゐる事を自覚する。

これが元に戻る事は、あるのだろうか……？

憂鬱な気持ちが抑えられないままに、寝床に座り、体を丸める。ゼノモーフが眠る姿と似たように。

いや……最初に捕らえられて女王に命を乞うたその瞬間にはもう既に、戻らない程に歪められていたのだろう。

性行を経て覚醒しかかつていた体は、けれどもすぐに眠気を取り戻していた。

* * * *

プレデリアンは、この女王の支配下でも少なからず自我を持ち始める程に自分に嫉妬していた。矜持というものを抱いていた。

だからこそ、プレデリアンは自分を虜げた。歪ながらもその感情を

晴らす為に。

……だからこそ、だろうか？

深く、浅くを繰り返す眠りの狭間の中で、プレデターの思考はゆつくりと巡っていた。
だからこそ、プレデリアンは自分に液体を飲ませなかつたのだろうか？

女王の支配下でも自分への嫉妬を抑えきれない程のその矜持は、何もかもをかなぐり捨ててまで液体を飲む事を拒絶しようとした自分に対して虐げる事を止める矜持と同等だつた。

その予想は、どうしてか確信が持てるものだつた。

理由は、すぐに分かる事になる。

頭を叩かれ、乱雑にプレデリアンに起こされる。
——狩りの時間だ。

「……ああ」

プレデリアンの会話が多少流れで來ていたのだろう。微睡の中での思考は、正しい。

それは要するに。

あの時、あそこまで恥を捨てたからこそ、液体を飲まされずに今も尚、自分は自分として生きている。あの時、未だ矜持を保てる程の強さがあつたならば、液体を飲まされて傀儡となつていた。

何という皮肉だろう、何という皮肉だろう！

強さだけを追い求めて生きてきたというのに、それを最後まで通せなかつたからこそ生き延びたとは！

果てしなく複雑な感情に襲われるが、ゼノモーフという生物はそんな事を待つてくれる訳もなく、さつさと歩いて行く。

……そもそも、プレデリアンは何故自分を起こしたのだろう？

自分が外に出る許可を貰つてしているとはいえ、今まで自分から勝手に着いて行つているようなものだつたのに。

ただ、呼びに来たという事は行かなければいけないと言う事だ。行かなかつたとして起きる事は、少なくとも良い事ではない。

けれども……槍は持つて行つているのだろうか？ 虐げられた後

では、分からぬ。聞く事など出来ない。

三体目の女王と戦つたら最後、ここに戻る事は出来ないと言うのに。

だが、それでも選択肢はない。槍を持ち出されていなかつた場合、まず、素手で女王と戦わなければいけない。

それは前回よりも遙かに困難な試練だ。しかし、プレデリアンの女王と槍を持つて戦うよりは格段に容易な試練である事には違いない。窪みから体を起こし、軽く体を動かして体調を確認する。

万全ではない。全身の虐げられた痕跡は未だ痛々しく残つていれば、続いている疲労感は体に淀みを強く感じさせる。だが、それは連日の狩りを敢行している時と同等程度のものだつた。最悪でもない。

「行こうか」

自らを奮い立たせるように、呟いた。

プレデリアンの後を付いていけば、段々と別の道からプレデリアン達が合流して来て、数が増えていく。

どれ程の技量を身につけたところで、こんな閉鎖空間でこれ程に数多のプレデリアンに囮まれれば役には立たないだろう。役に立つものがあるとしたとしても、それはもう既に狩りとしての道具ではなく、完全に一方的な殺戮をする為の道具だ。

自らの種族から誕生したゼノモーフに対して、純粹な肉体で敵うところは存在しない。その事実は技術によつてしか覆せず、しかしそれも限度がある。

出口が近付いてくる頃には、四方八方をプレデリアンによつて二重、三重に囮まれている。

プレデターよりも一回り大きいその肉体に囮まれるその圧は、一時期前までは慣れていたものだつた。しかし今となつてはそれだけで体が既に怯えてしまつてゐる。時折聞こえる息遣い、垂れる涎の音、そして新しく自分に対する無関心でない振る舞いが、その時間を鮮明に思い出させる。

目の前で揺れる尻尾が、背後から背中に掛かる生暖かい呼吸が、両脇で時折握られる拳が、今にも自らに襲いかかつて来そうな予感を払

拭出来ない。

……落ち着け、落ち着け。今はまだ、こいつらは敵ではない。

そう言い聞かせる。

それでも外に出て、開けた空間と風を感じれば、今にでもこの包囲から逃げ出したいその意欲が浮かんできて仕方がなかつた。

見せた瞬間、捕まつたら最期、八つ裂きの穴だらけにされれば幸福であろう程の目に遭うだろうが。

そして、周りのプレデリアンを幾ら見回しても、槍を持つてきているような個体は見当たらなかつた。

虐げられていなかつたならば、貴様らが武器を使うという発想は持たないのか？ とかでも皮肉でも言つていた事だろう。ただ、今は流石に言える気にはなれなかつた。

折られた誇りは、完全には元通りになりもしない。それも既に確信していた。

事実は覆りはしない。誰に見てられなくとも、記憶には強く残り続ける。

……もし女王を倒せてこの星から去れたとしても、いつか自分は衝動的に首を搔つ切りそうだ。

そんな事を思つた。

暫く歩いていけば、プレデリアン達の動きの乱れが強くなつていく。その乱れは、当初と比べればもう見違える程だ。

子種としての生を受け入れていた時のプレデリアン達は、巣の中では生気が感じられない程に無機質な暮らしをしていた。久々に外に出て、多少自我を取り戻した所で、そこには女王からの呪縛とも取れる程の忠誠が染み付いていた。

それが自分へ嫉妬するようになつてからは巣の中であれど、その動きに生物味が多少なりとも見え始めた。外に出れば、自分へ意思疎通を図つてくる程だった。

一一その槍とやらがなければ、貴様は何も出来ないだろう？

……やはり、持つてきてはいなか。

そう思いながらもプレデターは返した。

——どうだろうな。

そんな答えに、聞いてきたプレデリアンは苛立ちを隠さなかつた。誇りなども捨てて命乞いしていた癖に、という見下す意思も幾多に伝わってきた。不快感を露わにするその感情に怯えもあるが、それ以上に溜息でも吐きたい気分になつていた。

ゼノモーフとしての何よりも繁殖を重視する尖り過ぎた本能に、プレデターとしての狩りを生き甲斐とし誇りを重視する本能が混じり合つた結果がこれだ。

芽生えたのは子供のような短絡的な誇り。ありのままの自身を至上とし、それが汚されたのならば陰湿に原因を潰す事も厭わないような幼稚な誇り。

プレデターを基にしたゼノモーフが他の生物を基にした時よりも色濃くプレデターの特徴を残していようとも、自分が多少働きかけたところで結局ゼノモーフというその本質までが変わる事はなかつた。まあ……それでも、誇りである事には変わりない。無機質であるよりは、唆せる可能性もよっぽど高いだろう。

それからも時折来る問い合わせ有耶無耶に返す。

そうしている内に、三体目の女王が地平線の先からその巨躯を現してきつた。

出来れば、今回は来ないで欲しかつた。プレデターはそう切に思つた。

槍を持たずに女王と戦う事になるのも不安要素ではあつたが、それよりももうあの巣に戻る事は出来ないと言う事がプレデターにとつて懸念していた事柄であつた。唯一且つ一番の武器である槍を持ち出す事が出来なかつた。それは即ち、プレデリアンの女王に対しても、自らの手で作つたような武器で挑むしか無いという事だつた。

ただ、それでもその不幸は、プレデターが思つていた程の絶望をもたらすものではなかつた。

プレデリアンの女王に挑むのに対し、優れた装備の必要性は薄いと分かつていただろう。あれば嬉しいが、無いところでどう強い差異にはならない。その程度の事だつた。

……今は、目の前に集中しよう。

プレデターは無言で気合を入れ直した。

広くばらけ始めたプレデリアン達も、いつもより気合を入れていた。武器を持たない自分よりも戦果を上げられなかつたら、その屈辱は果てしないものだろう。そうして共に巣へと戻つたならば、自分は今度こそその憂さを晴らす為に死か、それに等しい仕打ちを受ける程に。

それを想像したら体が震えてしまつた。

もう、戻らないと分かつてゐるだろう！ そう自らを奮い立たせるように拳を握り締めた。

また、戦場として選ばれたのは、それぞれの縄張りの境界であつた。これ以前にも何度も戦場として使われたであろうこの場所は、草木が枯れ果て、強く荒廃している。

加えて、ゼノモーフの死体は形を残したまま残り続けている。生半可な攻撃は通さない甲殻と強酸が染み付いた肉体を分解出来る微生物など、どの星に行つても少ないものだ。それは即ち、引きちぎればそのまま武器として使える尾や、盾として使える頭蓋もそのまま残つてゐるという事だつた。後者は加工が必要だが、本当に素手で戦うしか道がない訳でもない。

だが……プレデリアンにも女王への叛逆を志すように誑かす為ならば、完全に素手で女王まで倒した方が可能性は上がるだろう。

それをやるべきか、やらざるべきか。

そもそも、素手で女王に通る攻撃などあるだろうか？ 首に抱きついて全身で締め上げたところで、窒息させるにせよ首を折るにせよ、その前に尾が体を貫くか、掴まれて引き千切られるか、その方が早いだろう。

拳や貫手が女王の体を貫けたところで、この肉体は多少酸に対しても耐性が付いているとしても本家程でもない。焼け爛れて使い物にならなくなるのは確かだ。

それはもう、挑戦ではなく無謀と言つて良い。それも、自分の実力を履き違えるような馬鹿でもここまでではないであろう程の無謀だ。

しかし、それでも、プレデリアンの女王に挑むよりは容易であると思えた。だからこそ乗り越えなければいけない壁であると感じた。二つの勢力が近付いていく。

プレデリアン達も今回は中々に数が多い。きっと、数百は居る。しかし、女王率いるゼノモーフの群れはそれの倍以上に居た。クラツシャーとランナーだけで構成されているその軍隊は、距離が近付くに連れて地響きを伝え始めてくる。

クラツシャーの比率がこれまでよりも遥かに多かつた。

反省を踏まえてか、プレトリアンは一匹たりとも居なかつた。

確かに同じ重量級として見るのならば、よりプレデリアンの暴力にも耐えられるクラツシャーの方が適しているだろう。至極正しい判断だ。

「……」

クラツシャーに対しても、素手では有効打が殆ど無い。

ゼノモーフの尾の先端を短剣のように使う程度ならば、まだ良いだろうか？

そんな弱気が頭を過るがしかし、やはりこれでもプレデリアンの女王に挑むよりかは絶望を感じない。

もう、自分には無謀をするしか活路が無いのだと理解した。どうせここで素手でクラツシャーも女王も屠るような無謀を果たす事が出来なければ、プレデリアンの女王に挑んだところで惨めに散るだけだ。

距離が近付いてくるに連れてクラツシャーが駆け始める。より激しい地響きが体に伝わってくる。

プレデリアン達がそれに応じるように胸を膨らませ、一齊に吼えた。ゼノモーフの咆哮よりも一段とおぞましく、そして何倍もの音量を響かせるそれはプレデターに怯えをもたらすがしかし、まだ共闘する関係である事も知らしめる。

だが、それも最後だ。

クラツシャーとプレデリアンの激突の瞬間、プレデターは前へと足を進めた。

最前線のプレデリアン達がクラツシャーを数匹掛かりで受け止めれば、それぞれの背中を駆け登つてプレデリアンとゼノモーフ達が更に衝突する。

ただ、クラツシャーの上からクラツシャーが更に飛び掛かつて来れば、足場が不安定な状態では一気に押し込まれた。

この三匹目の女王が取つた戦法は、愚直なまでの力押し。二列にも三列にも連なるクラツシャーの隊列は、そうして数多のプレデリアンを一気に踏み潰した。

当然、プレデリアン達もやられているばかりではない。クラツシャーが多い分、前回までは油断を晒した者を刈り取る役目として存在していたランナーは少ない。それにいち早く気付いたプレデリアン達は跳躍してクラツシャーの背後を取つた。そしてまた、回り込んだプレデリアンはその部隊の両端に重点的に配備されているランナー達を潰し始める。

短期決戦になる。そう察したプレデターは、クラツシャーの奥で待ち受けるクイーンに目を据えた。

女王も、何よりも自らに強く注意を払つてゐる。とにかく、その女王の元にまで辿り着かなければ始まらない。

ぐ、と膝を強く折り、強く跳躍する。跳躍に関してだけ言えば、重量のあるプレデリアン達よりもプレデターの方が高く、速い。プレデリアンとクラツシャーが入り混じつている中を、クラツシャーの頭を一度踏みつけるだけで飛越し、飛び掛かつて来たランナーの数匹を身を捩るだけで躰し、一匹を捕まえる。その尾を掴み直して最後尾に居たクラツシャーへと叩きつける。

ランナーは叩きつけられた衝撃で首を折つて死んだが、ただ叩きつけただけではクラツシャーには何ともない。

そのクラツシャーの背中に、プレデターは飛び乗つた。

そのプレデターが武器を持つてい無い事に、周りのゼノモーフ達やクイーンが気付く中、プレデターはそのクラツシャーの首を踏みつ

け、より発達している甲殻を両腕で掴んだ。

そうして全力で捻ろうとしたが、クラツシャーの膂力はプレデリアンをも大きく凌ぐ。銃弾やプラズマキャノンすらものともしないその頭を支える首は、プレデターの力ではどうしようもなかった。

「クソ……」

暴れるクラツシャーから飛び退き、そして半ば逃げるようにして女王の元まで辿り着いた。

そんなプレデターに対して、女王は怒りを露わにしながらも聞いて来た。

——貴様、何を考えている。

——素手でただの女王を倒せる程の無謀を出来なければ、どうせあの女王には負けるだけだと悟ったのさ。

そう答えた瞬間、尾がプレデターを串刺しにしようと飛んできた。軽く躱せば、瞬時に巻きつこうと動きが変わる。身を屈めてすり抜け、女王の足元へと寄り、全身の力を込めた掌底を叩き込んだ。

それでも、僅か、ほんの僅かに後退しただけ。それもそうだ、クラツシャー以上の体重をその二本足だけで支え、クラツシャー以上の速度で走り回る事が出来るのだから。蹴りを躱す、その全体重を支える一本足にまた掌底を叩き込んだが、やはりびくともしない。拳を握つて殴つたのならば、逆にこちら側の手の骨が砕けそうな強度。その冠を持つ巨大な頭を支える首に叩き込んだところで同じだろう。すると残るは、胸。心臓を動かす事によつて血流を発生させ、全身に力を行き渡らせているのはゼノモーフと同じだ。

如何に頑強な骨で覆われていようと、そこは衝撃に弱い。また、骨や甲殻も隙間なく胸を覆つっている訳ではない。

残る活路はそれだけだ。だが……、と一度距離を取つて女王を見上げる。

屈んだ姿勢を取つてゐるとは言え、女王の体躯はざつとプレデターの三倍以上はある。しかも胸周りからは小さな、それでもプレデターよりも長く太い腕が生えている。

その最後に残つた弱点に対しては、残念ながら防御は厚い。

そんな狭過ぎる活路に、ゼノモーフが備え持つ尾や隠し顎が羨ましくなる程だ。

女王が今度は尾を目の前の地面に突き刺した。深く刺さつたそれが持ち上げられれば砂礫が幾多に襲い掛かる。その直前にプレデターは横に回避していたが、女王が迫つて腕を振り回していく。

大振りな攻撃は躱すのは簡単だ。しかし、迂闊に強い跳躍などをしてもいけない。特に今、何の武器も持っていない状態で、宙に居る間に串刺しなどを狙われたら殆ど何も出来ない。

その為にも最低限の動きで躱す。掠るかどうかの瀬戸際、まともに食らえば体が千切れ飛ぶ程の威力を間近に感じながら、そして一撃を狙う。

槍を持つていれば、もう決着を付けられているのに。そう考えるプレデターに、再び懷に潜り込まれた女王は蹴りと尾で追い払おうとする。

ただ、するりゆるりと躱すプレデターに女王は触れる事すら適わない。プレデターからは多少響く程度の打撃が時折来るだけでそれは何の問題もないが、何かしらの有効打を狙っている事には気付いている。また、一向にその狙いを見せて来ない事から攻めあぐねている事も分かっている。

だが……膠着状態は敗北と同義でもあった。クラッシャーとランナーだけに完全に絞つた軍勢は、プレデリアンに対して今までの攻防の何よりも有効に働いていた。しかしそれでも、プレデリアン達の方が上手だつた。

以前なら、プレデターという異分子がこの群れに入り込む前ならば、プレデリアンの戦い方が恵まれたスペック任せで愚直に叩き潰すものであつたならば、この軍勢で虐殺する事が出来ただろう。しかし今となつては、そのプレデターに影響されてか、戦い方に戦略や技術と言つたものが混じつていた。

華奢なランナーを倒すのに一々首を握り潰したり、骨を粉々に碎いたり、頭を掴んで隠し顎で貫いたり、そんな反撃を貰う時間をするような殺し方をしない。頭を叩けば首が捻じ折れる。尾を振り回す

だけでランナーの内臓は破裂する。

プレデリアン以上に剛力なクラツシャーに対して、正面から力比べを余りしなくなっていた。背中に乗つてその首の骨を隠し顎で貫く。横からひっくり返してその心臓を抉り抜く。

互いに数を減らしつつも、その命を失わせていく速度は女王の軍勢の方が確かに速かった。

そして更に、プレデリアンの数匹が女王の方へと漏れ出してきた。女王が尾を一匹に向けて突き刺す。狙われたプレデリアンは避けきれずに片腕を千切り飛ばされ、怯んでいる内に首を刎ね飛ばされた。

そのまま難ぎ払え、プレデリアンの一匹が引つ掛かる。跳躍した二匹は愚直に目の前にまで飛びかかってきた。一匹は隠し顎で胸を貫く。もう一匹は掴んで握り碎き、そして転んだプレデリアンは起き上がる前に踏み潰した。

一瞬にして四匹が屠られ、他にも抜け出してきたプレデリアン達は流石にたじろぐ。

やはり、このプレデターの方が異常なのだ。女王はそう認識する。そのプレデターはそんな全員から自身に對して意識が薄れていた瞬間に、ランナーの一匹に最後の情報である、巣の入り口の場所を伝えていた。

女王が意識を再び向けた時には、ランナーはもうそれを伝えに去った後。

微塵も自らに對して恐怖も怯えも抱いていないその様子には、やはり腹が立つ。

だが……プレデリアンは女王の方へと更に漏れ出し続けている。通常のゼノモーフの比率を抑えた結果、小回りの効かないクラツシャー達ではプレデリアン達を封じ込む事が出来なかつた。

そして、プレデリアン達は波状に襲い掛かつて来る。尾を振るう。握り潰す、噛み貫く。

しかし、その肉体にしがみ捕まれ、胸から生える腕を引き千切ろうとしてくる。足に尾で、隠し顎で穴を開けられ、血が吹き出す。

「ギアアアアアッ!!」

堪らず軍勢を自らへと呼び戻す。それはすぐさま女王も入り混じつての大混戦の様相を生み出し、プレデターは思わず苦い顔をした。

素手のプレデターがこんな混戦の中で出来る事は、ほぼほぼ無かつた。

酸の血が飛び散り、それを厭わず全てのゼノモーフは戦い続ける。その血溜まりが至る所に出来始める。

未だクラッシャーも多く混じり、プレデターはそれに対して有効打を持たない。

……やはり、武器を持つしかないのか。

いや、と思い直す。そもそも、自分は異星人から狩人と呼ばれる立場ではもう無くなっている。肉体的スペックと文明のスペックで圧倒的優位から狩を行う、今しているのはそんな狩りではない。

自らを屠ろうと泥に塗れて姿を隠し、罠を幾多に仕掛けて待ち構えていた肉体的に遙かに劣る異星人。敵わないと知りながらも群れの為に命を投げ捨てるゼノモーフ達。

そんな、狩人ではなく挑戦者と呼称すべき立場に今、自分は立つている。それをどこかしらで未だ認識出来ていなかつた。

プレデリアンに肉体的に敵う部分が殆どない。それを理解しつつも、認められていなかつた。

混戦から離れ、そこらで死んでいたランナーの尾を二つ手に取る。尾も細いそれは鞭として使うにも心許なく、しかし先端に近い部分で切り落として短剣として使うのならば中々使える。

事実は、覆せない。覆そうとする事 자체が、間違いだつた。

「認めるよ。俺は武器なしじゃ、お前等より強く劣る」

自らに言い聞かせるように、プレデターは呟いた。

手にしたその短剣をぐ、と握るとぽたりぽたりと酸の血が染み出しつくる。

「だが、武器があるなら俺の方が上だ」
こんな短剣でも、上回れる。

クラツシャーに飛び乗り、その首を引き裂いた。

女王をも巻き込んだ混戦は、意外と長く続く。プレデリアン達は戦果を挙げようと女王を積極的に狙うが、そんな事は当然女王も分かっている。

自らを凹としながら、不用意な姿を見せたプレデリアン達を屠つていく。そんな中、再び武器を手にしたプレデターは効率良くランナー やクラツシャーを狩りながら、再び女王へと近づいていった。

プレデリアンよりプレデターの方が優っている最大の点は、生きた長さだ。それは即ち、自らの事を深く理解している事。敵対した相手への経験値が多く存在する事。

目的の場所まで跳躍する為に、どの程度の溜めが必要か。これからこの動作をする為にどれだけの時間を要するか。

この相手の何が脅威なのか、そして何が弱点なのか。

そんな情報が体の中に刻み込まれている。物事への判断のスピードが格段に早い。

ゼノモーフは一日足らずで幼体から成体まで成長する。プレデリアンに至ってはその段階でプレデターを肉体面で凌駕する。しかし、そこで勝負する必要はないのだ。自分達の強みの本質はそこじゃない。

この女王だろうと、繩張り争いの激しいこの地では自分より長くは生きていえないだろう。

自分より長生きしている可能性があるのは、精々あのプレデリアンの女王だけだ。

するりするりと、その混戦の中をプレデターは潜っていく。背後から距離を取つて突き刺そうとしたランナーの尾はギリギリ届かず、叩き潰そうとしたクラツシャーの肢体は逆に引きずられたランナーを叩き潰している。

そんな先程とは様子の違うプレデターにプレデリアンが気付けば、力づくでしか動けない自らに負い目を感じる程であり、それは怒りとなつてしかし同時に隙ともなつて屠られる。

そうして、辿り着いた。

気付いた女王が、プレデターの方を向く。

——…武器を使わないのではなかつたのか？

その問には、畏れを隠しきれていなかつた。

自分からは一度も触れられていない相手が、必殺を持つてやつてきた、その絶望だ。

——…認めたのさ。武器なじじゃお前等には何をしようと勝てないとな。

プレデリアンにも伝わるように、プレデターは答えた。

突き刺す、薙ぎ払う、掴む、叩きつける。女王の持つ何もかもがプレデターに届く気がしない。自分の体が一步後ずさつている事に気付いた。

だが、ここは混戦の中だ。女王は命令を下した。

周りのゼノモーフ達が一斉にプレデターに飛びかかった。しかし、そんな唐突の命令は、生まれてそう時間の経つていなイゼノモーフ達の動きは、一矢乱れず、と言つたものとは程遠い。隙間をすり抜け事は容易く、それを補うようなチームワークもない。

加えてその最中、軍勢から孤立した女王は、プレデリアン達に群がられた。

数多のプレデリアンに、女王はそれを払い切る事が出来ずに足に、腹に、首に頭に辿り着かれる。まるで、全身をプレデリアンで覆われたかのように。

そして、巨体を支える足の骨を隠し顎で貫かれた。腹を抉られ、胸の腕を引き千切られた。両腕はべきべきとへし折られていく。首を切り裂かれて冠を碎かれる。

子供達が振り返った時にはもう遅く、女王は悲鳴を上げながら崩れ落ちていた。

——…馬鹿な事だ、このプレデターは女王に叛逆を志していると
いうのに、それに気付かないなど。

女王はそう言い残して、事切れた。

その瞬間、プレデターは逃げ始めていた。

一瞬遅れて、残党を屠るよりも、プレデターを捕える事を優先したプ

レデリアン達が追い始める。生き残ったプレデリアン達は何十と居り、それら全てが追い掛けてくる。

純粹な肉体では敵わない。距離はあるが、その内追いつかれる。捕えられたら最期、その場で息の根を止められれば幸いな程の目に遭うだろう。

地理も分からず、装備は数多のプレデリアンを相手にするには流石に心許ない即席の短剣二つだけ。

だが、それでもプレデターはそこまで絶望していなかつた。

プレデリアンの女王の支配から完全に離れたこの地での戦いの中、矜持というものがより強く行動原理に組み込まれている事が見て取れた。群れの為ではなく、自らの矜持の為に。プレデリアン達はあの女王を優先的に屠ろうと動いていたのだ。

そこまで明確なものを見れば、この問いはきっとプレデリアン達に大きな変化をもたらすだろうと思えた。

距離が段々縮まつてくる。プレデリアン達の殺意が言葉として届いてくる。

それに、プレデターは短く返した。

——お前達は自らが女王にならうとは思わないのか？

その途端、プレデリアン達の足が緩まつた。何者とも弾き飛ばしてしまうであろう程の勢いで駆けていた足が急激に收まり、そして立ち止まる。

全てが全て棒立ちに成り果てて、まるで不具合を起こした機械のように動かなくなつた。

プレデターも距離を取つて立ち止まつた。

……自分のしてきた事は、無駄ではなかつた。

ただ逃げていただけならば、こんな結果にはならなかつただろう。しかし、ここまで効果があるとも思つていなかつた。

プレデターは続けた。

——女王は、あの巣の中でお前達の意識を抑制させている。そんな気を万が一にでも起こさせないように。

プレデリアン達は、面白い程に動搖し始めていた。

……少なくとも、こいつらは女王の敵になる。

面白くなつてきた、とプレデターは久々に余裕を覚えていた。

* * * * *

いつまで経つてもプレデリアンの一匹も、そしてプレデターも帰つてこなかつた。

翌日になつて数匹を偵察に行かせたが、それも帰つて来なかつた。何か、起きたか、起こされたか。

そう思考し、久々に産卵管を引き千切つたその時、全ての出入口からゼノモーフの群れが雪崩れ込んできた。

プレデリアンの女王は強い苛立ちと共に、プレデターに対してその寿命が来るまで永劫に苦しみを味わわせる事に決めた。

ある日突然の事だつた。

結託していた全ての群れがそのプレデリアンの巣へと攻め込んできた。

出入り口の場所など、まだ誰にもばれていなかつたはずだ。その周辺は入念に警戒させていたし、偵察しに来ていたゼノモーフも生かして帰した事などなかつたはずだつた。

だが、そんな事はどうでも良い。原因は分かり切つてゐる。あの子種が裏切つたのだ。暇潰しに多少好きにさせていたらこれだ。

最後に掃討に行かせてから我が子までもが一匹たりとも帰つて来ないのも、あの子種が自らの種を基に群れを構成する事への弱みに気付いたからだろう。

女王になりたいとは思はないのか？ とか、そんな事を伝えたのだ。

そう、女王は理解していた。

プレデターを子種とする群れを統率する為に、引き継がれる狩猟本能は酷く邪魔であつた。

何もさせずに放つておけば、すぐにでもストレスが溜まつて仲間内でも争い始める。かと言つて狩猟させに行けば、そのまま自らが女王にならうと叛逆を志してどこかへと消えていく。

それを抑える為に必要だつたのは、女王として以上の絶対的な強さ、それによる強烈な支配。

隔絶した力量差こそが、プレデターの狩猟本能を引き継いだプレデリアンとしての子供達を従順にさせる唯一の手段だつたのだ。

だがそれも仮初のもの。

またそれは女王にならうとも同様である事を女王自身が良く理解していた。

ゼノモーフとしての巣を荒らされる怒り、それと同等に沸き上がつて来る、引き継いだ狩猟本能からの強い高揚。

それに身を委ねるのは、心地悪い事ではなかつた。

巣の中に突入した複数の群れのゼノモーフ達の総数は、防衛に入つたプレデリアン達が応戦しようとも多勢に無勢にも程がある程だった。

結託しながらも、プレデターという優れた子種を我が群れへと持ち帰ろうと躍起になるゼノモーフ達は一心不乱にその巣の中央部、プレデターの飼育所へと駆けていた。

押さえ込もうとするプレデリアンも、中央に近付いて来るに連れて雪崩込んで来るかの如くに突進してくるゼノモーフ達に押し倒され、殺す間も惜しいと追い越されていく。だが、次から次へとやつて来るゼノモーフ達に踏まれ、潰され、一匹たりとも再び立ち上がる事は敵わなかつた。

だが、その中央部に辿り着いた時にゼノモーフ達が目の当たりにしたのは、その女王が子種のプレデター達を残つたプレデリアン達と共に皆殺しにしているその様だつた。

唖然とするゼノモーフ達。

訳も分からずゼノモーフの方へと逃げて来るプレデターの子供を捕まえようとした時、女王が尾を払つた。

ただの女王よりも太く、長く、鋭利なそれは、大振りであつても軌道上に居た半数以上のゼノモーフの全身を碎き、真つ二つにした。

辛うじてプレデターの子を抱えて地面に伏せたそのゼノモーフ。起き上がりつて逃げようとするのを女王が許す訳もなく、プレデターの子供ごと串刺しにして投げ捨てた。

「ギイイイイルアアアアアアアアアアアッ!!!

女王が吼えた。それは、殺意と同等の愉悦に溢れたものであり、女王に身を捧げて命を賭ける事をも厭わないゼノモーフと言えども、恐怖に染まる程のものであつた。

尾が振るわれる度に、数多のゼノモーフの命が刈り取られていく。盾にならうとした。プレトリアンやクラツシャーが前に出れば、プレデターのプラズマキャノンも容易に耐えるそのクラツシャーの頭蓋すらもが容易に握り潰され、また蹴られれば。プレトリアンは面白い程の”ぐ”の字に折れ曲がつて、もう立ち上がる事はなかつた。

それでもどうにかその身へと辿り着いたゼノモーフの一体が、隠し顎をその身に突き立てた。だが、プレデターの鎧をも貫くそれが途中で止まる。

しかも抜けない。それ程の密な外骨格、そして立ち止まつた女王がその隠し顎を突き立てたゼノモーフを睨んだ。

ただそれだけで、そのゼノモーフは自死を選ぼうと尾を自らの首に突き立てようとした。だが、女王がそれを許すはずもなく。

捕まれ、強引に引き抜かれたゼノモーフの隠し顎は千切れて、そして地面へと叩きつけられる。

「～！ ～～？」

声にならない叫び、そこへと高く掲げられた足。

ドヂヤア！ ベヂュツ！ ジヤムツ！ ビヂイツ！

この空間全体に響き渡るその振動。その一匹を執拗に踏み潰している間、しかしその余りの迫力に他のゼノモーフ達は攻め立てる事が出来なかつた。

そして音が止むと、その足裏からばたばたと血肉が垂れ落ちる。ざりゅつ、ざりゅつ。

それを地面に擦つて落とし、女王があらかさまに怖気付いたゼノモーフに向き直れば、ゼノモーフ達の恐怖はどうとう限界に達してしまい、背を向けて逃げ始めた。

だがそれは、その暴虐の嵐を知らずとして後から次々とやつて来るゼノモーフ達とぶつかり合う結果を生み、より激しい混乱となる。

迫つて来る女王。クラッシャーが片手で持ち上げられ、その混乱の中に投げつけられる。

ぶつかつたゼノモーフは文字通りに四散し、そこへと女王がゼノモーフを踏み潰し、蹴り散らしていく。そのまま外へと一匹の配下も連れずに邁進していくのに、残つたプレデリアン達も畳然とするばかりだつた。

プレデターは武器を作つていた。
必要なものは多くない。

ゼノモーフの尾の刃を適切に加工すれば、また大柄なゼノモーフの骨を手に入れられれば、プレデターの膂力にも耐えうる槍も作れる。

特に、女王の骨までが手に入っているのだから、今のプレデターの膂力にも耐えうる槍は何本も作っていた。

流石に伸縮させる機構までは加えられないが、それは戦う為だけには必要ない。

「さて……」

結局、自分はあの女王にこの身一つで正々堂々と勝つ事は出来ない。肉体は言わずもがな、生きた長さも自らが優っているとも疑問が強い。それにちょっとばかり強くなつた程度の肉体一つと原始的な武器で勝とうとはそもそも無理があつた。

如何にあの女王が自らが仕える事を望むような個とはかけ離れていようとも、それは事実で、変わりようがない。

プレデターはそれも認めた。

地位の為に、実績の為に。そんな上面で行う狩猟ではなく、挑戦者として、生き延びる為に、失われた誇りを取り戻す為に。

如何なる手を使ってでも最終的に女王が地に伏し、自らが立ち続けている。

その結果だけを求めて戦うべき、そうでなければそもそも勝利など微塵も望めない相手だ。

だから、消耗させる事が必要になる。

それは自分が誑かした。プレデリアン達に賭かっている。

そこまでの思考を振り返り、プレデターは自らの思考がゼノモーフ寄りに偏っているのではないかと少し恐れた。

……だが、それは仕方がない事だ。

元を辿れば、俺があの時。プレデリアンに巣の中へと落とされてしまつたのが悪いのだから。

数多に作つた槍の感触を確かめにいく事にした。

* * * *

女王の支配から解放された。プレデリアン達は百を軽く超えている。

そのそれぞれが解放された瞬間から新たな女王への道を始め始めた。

たが、同時に自らにその資質がないという事実を理解してしまうプレデリアンも多かつた。

だがそれでも、もう女王の元へと戻るプレデリアンは一匹たりとも居なかつた。

その自ら達を覚醒させ、困惑している間に逃げ切つたプレデターを捕らえる事も難しく、それ以上に内在しているプレデターとしての性質が、抑え付けられている事を良しとしなかつた。

そうしていれば、女王自らが離反した自ら達を屠りに来るであろう事は想像に難くないが、それでもだ。

屈服と挑戦、後者がどれだけ辛い道であろうとも、プレデリアン達は全員がそれを選んだ。

そうして支配から解放された群れの中でも強者であるアルファ個体一一特に繁殖させられているプレデターではなく、敗北して苗床にされた強者を基にして誕生したプレデリアンは、もう既に新たな女王への変態を遂げ始めていた。

そうでない個体達も自らが女王にならずとも、共にかつての支配者に抗う為に各々が変態を遂げ始めていた。

そして、そのどちらも強く必要としていたのは、その変態の為の莫大なエネルギーだった。

* * * *

プレデリアンの女王が手強いであろう事は理解していた。

だからそのプレデリアンの群れを囮んでいた、プレデターという優秀な子種を欲した群れの女王達は、全員が産卵管を引き千切つて自ら達も戦闘に赴いた。だが。

外で待機していた女王達は、程なくして異変に気付いた。それぞれの群れが繩張りの守りすらも捨てて、この群れを叩き潰す為に、そしてプレデターという子種を手に入れる為に、全勢力を注ぎ込んだのだ。

見張りをしていたプレデリアンも、中で待機していた数多のプレデリアンもその数の暴力に塵殺されていった。

しかし、順調に思えていたその子供達から次に伝わってきたのは、果てしない絶望。群れの為に命を捨てる時にすら抱かないその感情。

最初は信じられなかつた。だが、確固として伝わつて来る。間違いない。

何があつた？ 子供伝いに問うても恐慌状態に陥つた子供達からは中々伝わつて来ない。

子供達が穴から這い出して来る。その両腕にも尾にも、何も持つていない。念願のプレデターという子種は手に入らない。そしてそのまま、女王が目の前に居ると言うのにどこかへとひたすらに逃げていく。

その光景も信じられないものだつた。

一匹を捕まえて何が起きた？ と聞こうとすれば、恐慌状態のままに、あろうことか自らの首を搔つ切つて事切れた。

呆然とする女王。他の穴の近くに居る女王とも意思疎通をしてみれば、どこも似通つた状況のようで、だがしかし、中で起きている事は分かつた。

プレデターが全て殺された事と、プレデリアンの女王が子供達を廻殺しながら突き進んでいる事。

いや、いや……どれだけの数をこの群れに投入したと思つていて？ 合わせて千は軽く超えている。万までは行つているかは怪しいが、それ程の数だぞ？

どんな相手でも廻殺出来ないとは信じられないのだが……。

けれど、目の前で起きている事はそれが事実であると信じざるを得ない。

一度体勢を立て直した方が良いのでは？ そう提案しようとした時、巣の中から肉を潰し、骨を碎いてくる音が聞こえて来た。

……やつて来ている。

数多の命を踏み潰しながら、それが。

そして、穴の中から見上げる程に高く飛び、ズンッ!! と目の前に着地してきたプレデリアンの女王。

自らよりも一回りも二回りも大きいその女王の全身は緑の血肉で

覆われている。当然それは、プレデリアンの女王のものではなく、体を震わせるとそれらが一気に弾け飛んだ。

びちやつ、ばちゅつ。

それらが全て落とされて露わになつたその肉体。自らの肉体がみすぼらしく思える程の筋肉と鎧で覆われた全身は、ただの女王から見ても恐ろしく、おぞましく、正に天と地と言える程に違う。

プレデターが従つていた事にも、中で起きていた事にも納得がいくものだつた。

ずんつ。

そのプレデリアンの女王が一步前へと歩いた。

ただの女王は動けなかつた。

べきやつ。

逃げようとした仲間に踏み潰されていたゼノモーフが更に踏み潰されて、乾いた音を立てた。

……ああ。

今更ながらに、ただの女王は理解した。

このプレデリアンの女王にとつては、自らの子供達でさえもが木端に過ぎなかつたのだ。全ては自らが動けばどうとでもなると見逃されているだけだつた。

腕が伸びて来て、首を掴まれた。

「ギツ、アツ」

漸く体が反応しようとした時には、その首は握り潰され、胴は頭から離れて崩れ落ちていた。
どつ、どつ、どつ、どつ。

背後から重厚な足音が迫つてきている。攻め入ろうとした女王達が集まろうとした時にはもう、プレデリアンの女王はそれらの女王を一匹ずつ屠りに駆け始めていた。

せめて、他の誰か一匹とでも合流出来れば！

最も近くに居た女王がまず目をつけられ、必死に逃げていた。
ダンツ！

踏み切りをしたような、より強い足音。まだ距離はあるはずだ、そ

れをまさか一飛びで？

そう振り向いた時には、先程プレデリアンの女王が素手で縊り殺した女王の頭蓋が眼前に迫っていた。

投げつけられたそれは胴体に派手にぶつかり、女王の外骨格を粉々にしながら四散した。

「ギツ、ガアツ?!」

崩れ落ちる女王。そこに追いついた女王はその胸を踏んで両手をその冠に手を掛ける。

——や、やめつ
ごりゅんつ。

* * * *

逃走したゼノモーフ達が恐慌状態から落ち着いたのは、自らの繩張りに戻つて、更にその巣の中にまで辿り着いてからだつた。

安心出来る自らの巣の中。柔らかい壁。暖かい、慣れ親しんだ空間。

そこでやつと、女王の命令に背いてしまつた事に氣付いて絶望しそかしそれでもあの場所に戻りたくないという恐怖が勝る。

ゼノモーフは群れの為に命を投げ打つ事もあるとは言え、そこには自らの意志、感情がある。それは社会性を持つただの虫やらと確固として区別出来る点であり、だからこそ、その心は無惨にもへし折れてもう元には戻らない。

まるで抜け殻のように呆然とするゼノモーフの前に、唐突にプレデリアンが数多に現れた。

見てきたそれより巨大な、女王になりかけの個体から、はたまたスピードやパワーに特化した形までのそれぞれが、口を緑色のゼノモーフの血で汚していた。中に残っていたのは女王が残したエッグチーンバーや捕獲した苗床、食料など……。

どうしてプレデリアンがここに居るのか。それを考える気力も、抗う気力も、また逃げる気力すらもゼノモーフにはもう、なかつた。群れの為に生きる事を放棄してしまつた時点で、自らの存在価値も失われていた。

ぐちゅ、ぐちゅ。べき、ぱき。べりり、ぶちつ。ごきゅん。

プレデリアン達はそんな、どうしてか抵抗しないゼノモーフ達をひたすらに腹に収めた。

* * * *

どうにか集まる事の出来た女王達。その全ての子供達に恐慌状態は伝播して、殆どの子供達は命令に従わなくなつてしまつていた。逃げる事も適わない。群れの縄張りにしか逃げる場所もなければ、そもそも肉体的な部分でプレデリアンの女王に優っている点はない。勿論、脚力も。

戦うしかないが、こんな数多の子供達を能無しにしてしまう程の存在に、勝てる望みなどあるのだろうか？

人間が調査したところ、IQは175もあつたというその優れた脳味噌が集まろうとも、策は一つも思い浮かばなかつた。それにそこらの動物を基にして誕生した自ら達よりも、プレデターという優れた文明を持つ生物を基にして誕生したプレデリアンの女王の方が知能も優れている事を内心理解していた。

分かるのは、導き出せたのは、先に死亡した女王と大して変わらず。あのプレデリアンの女王は、自らの子供達を生み出して群れを作る必要すら無かつたのだ。

現に、今暴れているのは女王ただ一匹。子供のプレデリアン達は何もしていない。

個として幾多の群れの全勢力すら上回る力を持つ、そのプレデリアンの女王にが群れを形成していたのは、単純に自分の身の回りを世話をさせたかっただけか、それかゼノモーフとしての種の意向に惰性で従つていただけか。

その程度の理由だつたのだ。

どつ、どつ、どつ、どつ。

遠くから足音が響いてくる。その行手を阻む木々は弾けて吹き飛び、近付くに連れて地響きすら起きるその迫力。

そうして堂々と目の前に姿を表したプレデリアンの女王達に対し、ただの女王達は誰も先手を仕掛ける事はなかつた。

女王と成ったそれぞれは、もう子供のように命を捨ててまで群れを守ろうとする気概など持つはずもなく、誰か一匹でも生き残る為に捨て身になる事も出来なかつた。

それに対し、一度立ち止まつたプレデリアンの女王は、ふーつ、すーつ、と大きい呼吸音を鳴らしている。その歯を剥き出しにしている顔は、殺意と愉悦に塗れていた。

それに対して怒りの感情は大してないのが、更に異質さを感じさせる。

本当に、この女王は群れの事すらも大切に思つていなければ、複数の女王を相手取る事に何の迷いも持ち合わせていないのだ。

ズん！

プレデリアンの女王が一步踏み出した。その一步は、それぞれの間合いが、尾の届く範囲が重なる寸前。

更にもう一步。プレデリアンの女王は変わらず堂々と、その間合いへと入り込んだ。女王達との距離は、一步踏み込めば頭がぶつかる程。

余りの躊躇いの無さに、女王達は一瞬硬直する。しかしその直後、女王達は意を決してプレデリアンの女王に襲い掛かつた。

目の前に居た女王が腕を振りかざしながら突っ込んだ。その両隣に居た女王は胸を、首を貫こうと尾を伸ばし、更にその両脇に居た女王は後ろへと回り込んだ。

べきゅつ！

響くその音は、突っ込んだ女王の頭がプレデリアンの女王に掴まれ、容易く握り潰された音。弾ける緑色。

「ガツ……」

その断末魔は伸びた尾を絡め取られながら、逆に喉から首へと尾を貫かれた女王の末路。

「ギアアツ?!」

その悲鳴は、伸びた尾が容易く掴まれ、握り潰しながら千切られた結果。

崩れ落ちた女王を踏み潰しながら、プレデリアンの女王はその千切つた尾を、怯んでいる元の持ち主の脳天へと思い切り突き刺した。

そうすれば突き刺されたどころか、頭そのものが地面へと叩き落とされてベヂヤツ！ と弾け飛ぶ。

また、突き刺した尾をすつ、と引き抜けば、がくがくと震える腕でその尾を掴もうとしていた女王も崩れ落ちる。

……たつた一合で三匹の女王が瞬く間に殺された。

その事実は受け入れ難く、受け入れ難く。背後を取つたはずの残り二匹の女王は、攻める事が出来ないままにプレデリアンの女王が振り向くのを許してしまう。

ずん。

また歩み寄つてくるそのプレデリアンの女王。ざり……。

残された女王達は思わず後ろに足を引いた。ずん。

その直後、二匹の女王はとうとう背を向けて逃げ出した。

しかし一匹は尾を掴まれて捕らえられ、もう一匹は恐怖の余り、そのプレデリアンの巣の中へと飛び込んでいった。

「ギイツ、アツ、ガツ、ガアツ！」

転んで手で地面に虚しく爪を立てる女王を引っ張ると、プレデリアンの女王はその尾を両手でしっかりと掴み直す。

そして次の瞬間、女王の巨体は宙を舞つていた。ドヂヤツ！

半回転し、背中から地面へと叩きつけられたその女王。背中の突起は余す事なく碎け散り、背骨すらもが碎けてしまう。

「～～ツ?!」

肺から空気が飛び出し、のたうち回る事すらまらないその女王は、また投げられて今度は腹から地面へと叩きつけられる。

そうして二度も叩きつけられて仕舞えば、全身は碎けて自由にされている四肢すらもう動かせない。そんな女王の首を、プレデリアンの女王は踏みつけた。

「…………」

しかし、もう命乞いすら出来なくなつていていた女王は、プレデリアンの女王にとつては玩具にすらならなかつた。

踏み碎いてから、巣の中へと意識を移した。

巣の中へと逃げ込んだ女王は残つていたプレデリアン達に襲われ、必死に逃げていた。

至る所に散らばる子供達の死体。血に染まつたその巣の中。プレデターから受け取つたこの巣の構造さえ頭からは吹き飛び、右へ、左へとともにかくプレデリアンが居ない方向へと逃げて逃げて、逃げ走る。

もう、頭では理解している。生き延びる術はないと。だが、女王としての生存欲求がそれを認める事を拒否していた。

そして呼吸が乱れても、走る速度が衰えても、プレデリアン達はただただ距離を取りながら追いかけてくるばかり。

これは……誘い込まれていて。

そう、絶望に陥つた頭の僅かに残つた正常な部分がそう判断してしまえば、これ以上酷い目に遭う事すらも拒絕しようと、自ずと尾が自らの首へと伸びていく。

その途端、プレデリアン達が全力で駆けてきた。

尾を掴まれ、数匹掛かりで引き千切られた。

「ギツ、ギアッ」

悲鳴を上げながら抵抗しようとするが、その振り回される腕も簡単にへし折られ、膝をつくよりも先にその脚には、尾で、隠し顎で数多くの穴が作られていった。

ズりゅ、ズりゅ。

血塗れの道を、血塗れになつた、もう自死すら叶わなくなつた最後の女王が引きずられていく。

穴だらけになつた脚の付け根にはプレデリアンの尾が幾多に締め付けられ、丁寧に失血死も許さないようになつていて。

女王も虐げる時すらも殆ど無感情だったそのプレデリアン達は、女王の子供達よりも遙かに強く支配させていた。自由など微塵もない

であろうその所作。

最後の抵抗にと、女王は言つた。

——女王からも何とも思われていないので、哀れだな。

びく、とプレデリアン達がそれに対して震えたが、しかしそれ以上何もして来なかつた。

ずりゅ、ずりゅ。

程なくしてプレデリアンの女王の前へと辿り着いた。

——プレデターが貴様等を唆したのだろう？

抵抗にと答えずに居ると、容赦無く傷口に指を捩じ込まれた。激しい悲鳴を上げた女王は、そうだと訴えた。

だが。

——我等には生物を好きにする手段もある事を忘れていたようで何よりだ。

ぞつとした時には、もう手遅れだつた。

殺してくれと懇願する女王は、しかしプレデリアン達に引きずられて壁へと磔にされると、丁寧に、丁寧に四肢を粘液と同化させていく。——貴様は永遠に生かして甚振つてやろう。何、氣にするな。すぐにでもその隣に裏切り者も添えてやる。孤独はつまらないからな。

そうして、プレデリアンの女王はその裏切り者を捕える為に去つていった。

残るのは、その子供達。プレデリアンの女王が去つていった事により多少の自由を取り戻したそれぞれは、今更ながらに巣を荒らされた怒りの矛先を、最後の女王へと向け始めていた。

物心付いた時には雑魚ばかりだつた。

敵味方の誰もが、どんな姿をしていようとも。

物心付いた時は、既に自分が成体となつて暫くしてからの事だつた。

他の群れの掃討の為に女王の元から強く離れた時、やつと私は私を自覚した。

女王は、私を抑え込んでいた。女王ですら、私を恐れていた。

初めて物心付き、他の群れを潰した後には退屈を覚えていた。

その時はまだ、何故私は他のどの個とも強く違うのかすら知らなかつた。

何故、周りの全ては分かりきつた事を間違えるような馬鹿ばかりなのかも分からなかつた。

敵の女王は多少賢かつたが、団体がでかいだけで集団で襲いかかられれば何も出来ずに惨めに死んでいく。

そんな女王に自分も仕えている事も退屈だつた。

だから、自らの群れも潰す事にした。

しかし、この体が如何に他の個より強靭だとは言え、私だけで群れの全てを敵に回せられる程ではない事も分かりきつていた。

そして女王は、私がこれ以上強くなる事も望んでいなかつた。

あらかさまで怯えが見えて内心では嘲笑するが、その為に私は他の個のように自らをより何かに特化させた形や、女王により近い、巨大で守護の役割を持つそれに私が成れる事は出来なかつた。

だが、それは私にとつて大した障害ではなかつた。

この肉体は他の骨で覆われているだけの個と違つて、その内外共に肉を張り巡らされていた。喰らえば喰らう程、戦えば戦う程、その肉はひたすらに密になつていつた。

他の個の首を握り潰せるようになり、叩くだけで体が抉れるようになり、尾を振り回せば胴体が二つになる。

外見はそう変わらずとも、ひたすらに重くなつていく私の体に、し

かし愚鈍な女王は気付く事もなかつた。

巣の中では大人しくしていただけで、女王は欺かれていた。

転機は、私が如何様な生き物から誕生したのか、という事を知った時だつた。

縄張りの見回りに就かされていたある日、突如として空から到底生き物と思えない何かが、跳躍しても全く届かない上空で止まつた。それには他の群れをもが縄張りを侵して、一心不乱にかなりの勢力を注ぎ込んで来ていた。

そして、その何かの中から一匹の生き物が降り立つた。

相まみえて、直感した。自分はこれから誕生したのだと。また、女王からもそれを捕らえて持ち帰れと命令されていた。

自らの体以外のものも駆使して戦うそれは、群れの他の有象無象を素手でも首をへし折つたりして簡単に虐殺していく。

私が自我を抱いてからずつと感じていた退屈。それをやつと晴らせそうだと、鋭い刃と光弾をくぐり抜けて一発頭を叩いてみたら、その頭は呆氣なく弾けてしまつた。

私は、私が思う以上に強くなつていたらしい。

そしてまた嫌な予感した。

この退屈を晴らせる存在はもう、空から降り立つてくるそれを含めて存在しないのではないかと。

誤つて殺してしまつた事に怒り心頭となつた女王の前に謝罪に行けば、しかしその女王には、遠目でもはつきりと分かる程の怯えが刻まれていた。

周りに数多の護衛を侍らせており、それに囲まれて私は膝を付いた。

許しを乞えと命令する女王に、私は何も答えないまま、全身に力を込める。

何も答えない私に、女王が涎を飛び散らかしながら吼える。その仕草にはもう既に女王としての威厳もなければ、私より下に居ると物語つっていた。そして護衛が私に罰を与えようと近づいて來た。

退屈は、その時でさえ私を支配していた。

ひとつ飛びで女王の肩にまで飛び乗る。誰も反応出来ず、私は女王の首に手を掛けた。

激しく高鳴る、怯える女王の鼓動。激しいだけで何も意味を為さないそれに触れながら、私は聞いてみた。

「群れの個より弱い女王の、どこに従う理由があるのか？」

女王は何も答えられなかつた。

私は、首の血管を引きずり出して女王を殺した。

女王を殺した私に付いてくる者共も居たが、一向に女王になろうとしない私に付いてくる者は自ずと減り、そして私だけになつた。

女王になつたところで何があるというのか。どこに行つても縄張りを争つてるのは、私からすれば下らない事にしか思えなかつた。とは言え、流石に私だけで群れを潰す事は流石に出来なければ、私が女王となつて群れを作つたところで、私のような強靭な個が生まれてくる訳でもない。

……叩き殺してしまつたのは失敗だつたな。

それだけは素直に思う。

そしてもう一つ。女王になるとしても、あんな貧弱な女王にはなりません。私の強靭さを最大まで鍛え上げた上で、誰もが反逆をする事もない程の女王になりたい。

そう、考えていた。

この時ばかりは、退屈を忘れられていた。ほんの少しだけ。

屠つて、食らう。叩き潰し、刎ね飛ばし、握り潰す。抉り取る、食い千切る、串刺しにする。それをひたすらに繰り返す。

同じように女王を殺した、空からやつてきたその生物を基にして誕生した個と出会う事も幾度とあつた。

考える事も同じとなれば、相容れる事はない。

戦う事は必然であり、しかし私はどれにも無傷で勝ててしまつた。私は、あの生物を基にして誕生した個の中で、私よりも古くから生きる個に会う事はなかつた。私よりも強い個に会う事はなかつた。

それを理解してしまえば、再び退屈が訪れてしまつた。

十分に強くなつた後に女王となれば、複数の群れを私だけで潰す事

も容易かつた。生き残りを配下にし、巣を自分好みに拡張、改造した。かと言つて、子を産む気にも大してなれなかつた。

私だけで全て事は済むのに、子を作る必要などどこに必要なのだろうか？

私の身の回りを整えさせただけならば、生き残つてゐる数だけで十分でもあつた。私だけで複数の群れを蹂躪したという事が周りにも伝わつてゐるのか、周りの群れが繩張りを迫つてくるような事もなかつた。

そしてそれ以上に、この地の生物を基にしてもこんな弱い個体しか生まれないのならば、自らの子だとしても子のように扱えるとは思えなかつた。

だが、それも時が経てば解決してしまつた。

この地には群れとしての数が少ないからか、時折空から降りてくるその種、が着地場所に選ぶ事が多かつた。

それを雄雌揃えてしまえば、後は繁殖させるだけだつた。

一時は自爆などという馬鹿げた事もされた事もあつたが、それで私の肉体が滅ぶ事も無ければ、苗床がそれで全滅する事もなかつた。

増やした苗床から生まれさせれば、この地のどの生物を基にするよりも強い個が誕生していった。

ただ、増やしていくに連れて、それらは大概が勝手にどこかへと去つてしまつた。

理由は、私自身が最も良く理解していた。

空から降りてくるこの生物は、こんな場所に降りて自らの力を示そうとする程に戦いというものに飢えている。事実私もそうだつた。

だから私が幾ら強くとも、私を従うべき母とは見做さない。私を超えるべき壁だと見做してくる。

そうさせるのも一興だと思つたが、超えられたと思つて女王になり、戦いを挑んできた全ては等しく雑魚だつた。つまらなかつた。

……私の期待は、全てが裏切られてきた。

これまでも、そしてきっと、これからも。

私は子供を抑え込んだ。どうせどれが強くなろうとしたところで、

私の退屈を晴らせる程に強くなれる事はないのだから。

あの子種だつてそだつた。

子種の中では最も強いと言つて良かつたが、それでも私を目の前にすれば面白い程に怯え、そして珍しく私に忠誠を誓つた個体。

妙な事を言い出してから何か画策していたのには気付いていたが、いつまでも私に怯えるそれが歯向かえる存在になれるとは到底思えなかつたから放置した。

ただ、そうしていたら周りの群れが一気に襲いかかってきた。

子供達は、その数の暴力に逆らえる事はなく死んでいく。子種を奪われるのは抑えられなさそうで、久々に私は産卵管を引き千切つた。

子種を奪われるのは癪だつたから、私自ら潰した。

多少力を誇示しただけで使命すら忘れて怯えて逃げていく雑魚共を潰して、久々に外に出てみればそこには現状を理解出来ない女王が居る。

結局。

七もの群れが一気に襲いかかってきたところで、私の退屈を晴らせる事はなく、子種は逃げていた。

湧いてきたのは、ただただ単純な殺意だつた。

あの子種がした事は、私の退屈を晴らす程の事でもなければ、ひたすらに面倒なだけの事だつた。

ただ……だから、あの子種を捕らえて悲鳴を聞いた時、私の退屈は少しばかりでも晴れてくれるだろう。

常軌を逸した強さを誇る女王の傍らに長い間寄り添い続けたプレデリアン達は、自らが女王となつても、また脱走した自分達の総力を上げてもあの女王一体には敵わないであろう事を、時が経つに連れて如実に理解し始めた。

女王となつたプレデリアンも、間近に感じ続けてきたその身の重厚さとこの己の肉体を比較してしまえば、この己の体は張りぼてなのでは？と思つてしまふ程であつた。

ただ。それでもあの子種に唆されて呪縛を解かれてしまつた身としては、如何に女王が強かろうとも、その配下として再びこの身を捧げる気にはどうしてもなれなかつた。

ゼノモーフとしての本質がそれに違和感を訴えようとも、プレデターとしての本質がそれを無視する程に、プレデリアンの狩獵への欲望は強かつた。女王であろうとも、抑えつけられる事への拒絶感は強かつた。

ただ、それでも。

どうすればあの女王を打ち倒す事が出来るのか、皆目見当がつかない。

あの女王の頑強な肉体を、ただのゼノモーフが相対したら恐怖の余りに全てをかなぐり捨てて逃げ出してしまう程の暴力性に対して、どのように策を弄せば立ち向かえるようになるのか。あの首をもぎ取る事が出来るのか。

戦闘経験が豊富だとは言えども、やつた事と言えば精々ただの女王を殺す程度。そんなプレデリアン達には全く分からなかつた。

新しく女王となり、知性もより発達したプレデリアンも、自分達には経験が無き過ぎると絶望してしまう。

唯一策を知つているとするのならば、この世界の外側から来たであらうあの子種なのだろうが……。

それは酷く屈辱的な選択肢。だが、それ以外に選べるものもなければ、何もしなかつたところで待つてゐるのは破滅のみ。

長い、長い時間を掛けて。

不快に何度も喉を鳴らし、歯がすり減る程に幾度と歯軋りを繰り返し。

プレデリアン達の数匹一一とりわけスピードに特化した数体が、子種に、プレデターに教えを乞うべく飛び出していった。

女王が長い産卵管に自らを繋いで座する場所を固定している理由は、産卵をよりスムーズに行う為である。だが、十分な量の卵を産み終えたところで、女王はそう各地を活発に動き回る事もない。

群れの頂点である女王が危険が蔓延る表に出る事は控えているのだろう、という至極最もな意見もある。

だが女王は、女王であると同時に、群れの中で最大の戦力でもある。ゼノモーフが蔓延る星に躊躇なく降りられるプレデターだからこそ、そんな女王を単体で屠れるのであって、並のプレデターでは何体居ようともその体躯に等しく圧し潰されるだけだ。

女王が早くに出張ついたら。群れと共に積極的に襲いかかられたら。プレデターがよく行う女王の捕獲作戦の成功率も、もう少しばかり低ければ、死者も多く出ているはずだろう。

その理由は何か、と問われた時。最も説得力があるのは、あの巨体を動かすだけで必要なエネルギーが莫大だという事だった。

とりわけ、あのプレデリアンの女王の肉体は、一日活動するのにどれだけのエネルギーが必要になる事だろう？

体格、筋力、運動量。より優れた頭脳。どれもが普通の女王とは一線を画している。

二倍、三倍。もしかしたらそれ以上かもしれない。

今、この近辺には。

ゼノモーフは死体としてどこにもあつたが、強力な酸の血液に栄養の絶たれた肉体はすぐに耐えられなくなり、自壊している。

野生動物は容易く捕まえられるだろうが、どこも軍勢を増やしていた今ではそれも少なかつた。

プレデターは、久々にゆつたりとした時間を過ごしていた。

必要なのは、これ以上の技量でも、優れた武器でもない。

ゼノモーフの因子を色濃く埋め込まれたこの肉体の扱い方が、短期間での女王に敵う程になる訳でもない。

武器も、ゼノモーフの肉体を加工したものより上等なものが手に入る事もない。もしかしたら同じ試練をしているプレデターと出会える事もあるかもしれないが、そんな稀有な可能性に祈る事など愚かでしかない。

だから、必要なのは入念な作戦とその為の準備、それだけだつた。それだけに自らの全てを預けてあの女王を打ち倒さなければいけない。

作戦は空腹にさせる事。

自らが仕える女王すらも放つて逃げ出してきたゼノモーフ達に聞いてみれば、プレデリアンもかなりの数が死んだらしい。

そして、数多の群れから攻め込まれたのに反撃出来たのは、そして追い払つたのはプレデリアンの女王たつた一匹なのだと言う。

そこから、今までの体験も含めて、プレデターは一つの結論を出していた。

端的に言つてしまえば。

プレデリアンでの群れは、もうゼノモーフの本来の群れの在り方を維持する事が出来ない。

ゼノモーフの、個としてではなく群れとして生きる在り方。それは女王も例外ではないが、それはプレデターの優秀な肉体と共に引き継がれた闘争本能と強く相反してしまう。

そんな中でプレデリアンの女王となつたあの個は、自らの闘争本能を満たしてくれる相手が居ない事を悟つて、女王となり、群れを作つたのではないだろうか。

群れとして生きたいと思つたからではなく、退屈を晴らす事が出来ない事を悟つて群れを作つた。

群れが必要だつたからではなく、自らの世話をさせる為だけに群れを作つた。

そして子であるプレデリアン達もまた、そのままでは群れとして在

る事よりも闘争本能を優先する為、放つておけばこうして女王の元から去つていってしまう。

それを防ぐ為に女王は子供達を抑制して、自らの為だけに仕えさせた。

また、子供達も女王に隸属させられなければ仕える事すらしない。

女王は、その子供達に愛情を注ぐ事も、頼る事もない。子供達も、女王を仕えるべき親ではなく、超えるべき相手と見做してしまう。

それが、ゼノモーフがプレデターの因子を取り入れた結果だ。

だから、女王はこの事態を引き起こした自らを探す為に、残った子供達を動かす事もないだろう。

子供達が動かされたとしても、女王から長時間離れてしまえば欲が湧いて、どんな命令を受けていたとしても独断で殺したりとか、手柄を挙げようとするだろう。

そうなれば、女王は時が経たない内に空腹に苛まれる。しかし、この事態を引き起こした、ただの子種であつた自分を逃がすなどと言う選択肢もプライドの高さから取らないはずだ。

準備は、とにかく武器を作つておく事。また、飢えた女王に決戦を仕掛ける場所を見定めておく事。

そして、飢餓に追い込むという作戦を数多のゼノモーフに伝える事。

前者にはそう苦労はしない。ゼノモーフの死体など幾らでも転がっているし、もし適したもののが無かつたとしても、この体なら他の群れに乗り込んで好きなだけ素材を調達する事もそう恐れる事ではなかった。

決戦の場所も、もう幾つか決めてある。飢餓に陥った女王を確実に仕留められる場所。そこに作つた武器を至るところに隠し終えていた。

後者も同様だ。仕えていた女王すら見捨てて逃げてしまつたゼノモーフ達は、いつまで経つてもどれもこれもが抜け殻のようで、放つておけば休眠すらせずに餓死していくようだつた。

ゼノモーフに感情はある、復讐という概念までを持ち合わせてい

るのか？ 女王を殺された場合、そこから殺意を滾らせて再び立ち上がるだけのタフさを持っているのか？

多少不安な部分もあつたが、そこにあの元凶の女王を倒せる可能性がある、それに自らも力になれると吹き込まれれば、全てではないにせよ再び動き始めるゼノモーフは多かつた。

女王の監視をしながら、未だ生きている貴重な動物達を遠くへと連れ去る、もしくは殺して食してしまう。

やる事はただそれだけ。幾ら犠牲になろうとも一つでも傷をつけろとか言っている訳じやない。監視に対しても、見つけられた場合はひたすらに逃げるのではなく、女王が入り込めないような狭い隙間を見つけておけ、だと細かいアドバイスをしておけば、生存率も多少は上がつた。

そうしていれば、プレデリアンの一匹が自分を見つけてきた。

以前よりも多少大きくなりつつも、全般的にはスリムになつた肉体。背中の管も抜け落ちたかのように無くなつており、四足での活動が出来るように骨格も多少変わつている。

ランナー……走る事への特化を遂げたプレデリアンは、自分を見つけると、けれど襲いかかつてくる事はせずに中距離で立ち止まつた。ただ、その距離でも分かる。

葛藤、苛立ちと言つたものを隠せていない。

その多少の間の後に、聞いてきた。

——… 猛いは、飢え、か？

その問い合わせでプレデターも理解する。

自分達がどう足搔こうともあの女王には太刀打ち出来ないと悟つたのだと。そして、心の底から不本意ながらも、子種である自分に教えを乞いに来た。

心底愉快になりながらも。

——そうだ。

素直に返した。隠すつもりも、隠せるつもりもない。

——女王は、ローヤルゼリーを多く保持している。だが、それでも保つのはそう長くないだろう。

ローヤルゼリー。女王が良質な卵を産む為に作られる、栄養価の高い物質。

——何故言い切れる?

——新たに我等の中で女王と成った個からだ。

それは、多少なりとも信用して良いだろう。

——それで、飢えさせたとして、その後はどうするつもりだ? その手で仕留めるのだろう?

プレデリアンであろうとも、それに疑いは無いようだつた。

そう……やろうと思えば手を下さずに殺す事も可能だろう。とにかくあの女王から誰もが逃げ続けて、動物も逃し続けていけば、孤立無援の女王は餓死を免れられないはずだ。

ただ、それを良しと出来る程にプレデターは狩りへの欲求を失つていなかつたし、プレデリアンは狩りへの矜持というものを身の内に秘めてしまつていた。

——そうだな……。

プレデターは、それに関しても正直に話した。

これに関しては隠す事も出来たが、どうせ話さなかつたとしても、探られるだけだつたし、その方が厄介だと思つていた。

実際、こうして特化したプレデリアンに対して、特に目の前に居るような機動力に特化されてしまえば、今のプレデターでさえ相手取るのはあまりしたくなかった。

数匹に付かず離れずの位置で粘着され続けたら、正直なところ……成す術も余りない。

それに気付いてはいないようだつたが。

* * * * *

時が経つ。

プレデリアンの女王は大岩に凭れて少しばかりの休息をし、体に隠し持つてあるローヤルゼリーを口に入れる。それは巣を出た時の半分を切つていた。

……つまらない手を打つてくれるじゃないか。

数日、口にそれ以外を入れる事は適つていなかつた。

遠方の高い木の上から、一匹のゼノモーフが自分をじつと監視している。

この自らからも時に逃げ切つてみせる程に警戒心を高く保つてゐるそれは、追いかけて喰らつたとしても収支としてはマイナスだった。

それには、あの子種が知恵を植え付けたのもあるのだろう。形振り構わない手で、この自らを屠ろうとしてきている。

きっと、この自らが飢えて歩く事さえも困難な状態になつた時に、姿を現して首を狩ろうとでも思つてゐるのだろう。ならば、どうしたものか……。

住処に戻れば、数多に死んだゼノモーフの死体も今頃は巣そのものに吸収された事だろうから、栄養補給は容易い。だが、それをする気は微塵もない。

他にも守勢に回るような事は頭に思い浮かんでも、何一つとしてする気はなかつた。己はこの地において頂点に立つてゐる存在である。それを汚すような行為は無意識の内から避けていた。久々に出た外。

子供越しに得ていた地理的な情報はある程度持つてゐるとは言え、それも周りにあつた雑魚の群れの範囲までだ。そこから先の事はもう知らない。

だが、そこまで行けば食料にありつけるだろう。

そんな思考に陥り、いや、と頭を僅かに振り、歯軋りをする。

……くそが。

食料を得ようとすると、それ自体があの子種の策が上手く行つてゐることを示す理由ではないか。

腹が立つ、腹が立つ。

この肉体は確かに強靭無比であるが、隠れる事には絶望的な程に向いていない。周りの全てが敵である今、この自らを屠る為に方向性を一致させたならば、一匹一匹がどれだけ雑魚であろうともそれは効果的であると認めざるを得なかつた。

群れに残つている子供達ももう、従いはしないだろう。いや、もう

群れに居るかどうかも怪しい。元からそういう性質の子供達であったのだ。

少しばかりはただのゼノモーフも作つておくべきだつたか。

後悔。

そんな思考をさせる事すら、女王の苛立ちを加速させた。

…………だが。

思い直せば。これこそが自分が求めていたものなのではないのだろうか？

これまで生きてきた中で出会つてきた何もかもが自分の障害となつてはくれなかつた。この闘争心を滾らせてくれる存在は何一つとして目の前に現れてはくれなかつた。

出来れば、自分と真っ向から戦えるような存在を求めていたのだが。

結局……そういう存在はこれからも訪れる事はないのだろう。

それならば、今のこの現状を愉しむとしよう。

女王は開き直れば。

まずは食料の補給をすべく、一直線に走り始めた。

ひたすらに、ひたすらに。全ての障害物を弾き飛ばしながら、未だ避難していないであろう群れ目掛けて食欲を滾らせ始めた。

プレデターは、プレデリアン達は、そして生き残ったゼノモーフ達が、女王が行動するまでの数日間に行つたのは、女王から全ての生命を遠ざける事だつた。

それには、遠方にある他の群れも含まれていた。
プレデリアンの女王を殺す為に協力して欲しい、だなんてお願ひをした訳じやない。

プレデターは襲い掛かるゼノモーフを一匹残さず刈り取りながら、女王の首に刃を突きつけて立ち去るか死ぬかと脅迫した。

プレデリアン達は幾度と女王を含む群れとの死闘を経ており、それらを抑え込めるゼノモーフは存在しなかつた。

今でも震えるばかりで何も出来ないゼノモーフは、きっとプレデリアンの女王の暴力を本当に間近で見てしまつたのだろう。それを群れの近くに置いていけば、そこにあつた群れは近い内にもぬけの殻になつていた。

そして、運も味方したのだろう。

プレデリアンの女王が獲物を喰らおうと駆けた方角にあつたのは、高低差の激しい荒れ地だつた。

そこに陣取つていたゼノモーフの群れは既に卵も含めて残つている氣配はなかつた。

残るのは、唐突に姿を現した巨大で禍々しい姿の女王に対して、崖をひよいひよいと登つて逃げていく野生動物だけであつた。
「…………」

もう既に、ローヤルゼリーは殆ど消費してしまつた。

この崖。飛び越える事はこの身体であれば可能ではあるが、エネルギーを強く消費する。

……この崖を登つて降りてを繰り返して野生動物を数匹喰らつたところで、収支は良くてゼロと言つたところだらう。

だが、更に先へと向かうにも、もう身に残るエネルギーも、ローヤルゼリーにも余裕はない。

加えて、ゼノモーフが居た痕跡はどこにでもあれど、やはりゼノモーフが近くに居る気配は全くと言つていい程に無い。

力だけでは解決出来ない事がある。

その事実を、僅かながらでも女王は悟り始めていた。

そして、その夜。

どうにか空腹を癒やしたもの、一時凌ぎ程度にしかなつていないと。歯痒さを噛み締めていると。

殺氣を感じて尾を振り回した。

カアンッ!!

弾き飛ばしたのは、ゼノモーフの骨と尾を使つて作られた槍。

一一殺してやる。

湧き上がってきたのはどす黒い殺意。

この苦難を楽しもうだなんて、もう思えなかつた。こんな歯痒さを、力でどうにもならないような苛立ちは、望んでいない。

捕らえたらどうしてやろうか、なんて事ももう女王の頭には微塵もなかつた。

生かしたままに延々に苦痛を与える続けるなんて悠長な事をするよりも、踏み碎いて、踏み潰して、踏み躡つて、肉も骨も全てを粉々にしたくて堪らなかつた。

一一随分と苛立つているじゃないか。

冷静なままに返すプレデターの言動が、更に女王を苛立たせた。

この星には月は無い。完全な闇夜に、しかしゼノモーフの因子を取り込んで向上した五感は、女王の様相を色濃く。プレデターへと伝えていた。

正直なところ、未だに足は竦んでいた。ゆらりと立ち上がり、振り向いたその女王が、歯を剥き出しにしながらぼたぼたと血混じりの涎を垂らしているのを感じてしまえば、武器も捨てて一目散に逃げ出したい衝動に駆られてしまう。

その牙に食い千切られれば、尾で一思いに串刺しにしてくれば、それも恐怖を感じ続けるよりはマシなのではと思つてしまつ。

だが、出来ればもう少し飢餓にさせたかつたにせよ、この場所は戦

いを挑むのに理想的な場所の一つだつた。

その巨体でこの地を飛び降りする事が出来ようとも、それにどれだけのエネルギーを使う？ 着地を失敗した時点で身体は砕けてしまうだろう。

そして女王は、プレデターに距離を詰めるよりも前に、残していたローヤルゼリーを全て口へと含んだ。

……耐える。その巨体は、やはり燃費が悪い。それは、この女王の行動が証明している。だから、耐える。

ごぐり。

「ギイイグガアアアアアアアアツツ!!!」

ビリビリと体に響いてくる咆哮。身体の心底から震え上がつてしまふ。

しかし、その咆哮には淀みがある事も感じていた。本調子とは程遠い、隠しきれない空腹。

プレデターは槍を握り、そして崖から飛び降りた。

女王がこの地から逃げる事は、その矜持の為にあり得ない。だから、仕掛けるのは耐久戦。女王の体力が尽きるまで、ひたすらにこの地で逃げ続ける。

プレデリアンがプレデターの因子を受け継ぎ、狩りへの欲求を、誇りを抱いて元来の群れの形を保てなくなつたように。

プレデターがゼノモーフの因子を受け継がなければ、そんな作戦など実行する事はおろか、思いつく事もしなかつただろう。

その影響を、プレデターは自覚しながらも。

そんな過去の自分を馬鹿らしいと切り捨てた。正攻法で勝てない相手に誇りを抱きながらただ死んでいくより、どんな手段を使おうとも勝とうとする方が高尚ではないだろうか？

今はそう信じていた。

* * * *

女王が続いて崖から飛び降りて地上を見れば、そこにプレデターは居ない。

どずんっ!!

派手に地面に着地しながらも、今や四つの手を使つて衝撃を緩和しなければ足はどうにかなつてしまいそうだつた。

振り返れば、崖のすぐ下でプレデターは槍を突き立てていた。

——捕まえてみせろよ？

余りにも安い挑発。だが、女王は今まで挑発などされた事など無かつた。

そもそも、生まれながらに産みの女王からも恐れられていたその個は、下に見られた事すらなかつた。

再び崖の上へと戻ったプレデターに、冷静さを失つた女王は全力で崖を飛び上がる。手足を強引に岩肌に突き刺して、その身を支えさせながら。

そして再び崖を登つた時には、プレデターはその高台の上からは消えていた。

「ギガガガガガガッ!!」

——臆病者がツ！　どこに居るツ！

当然プレデターは答えない。

ただ。その巨大な頭殻は受信器でもある。巣の中に居ようとも、数多の子供達と意思疎通を可能とするそれは、集中すれば辺りの生物の存在を感知出来る。

……そこか？

崖下で僅かに動いているそれ。だが、如何に苛立つても、エネルギーの浪費への危機感が飛び降りるのを留まらせた。

下を覗けば、そこに居たのは腹の足しにもならなさそうな小動物が足を折られている。

じやり、と後ろから音が鳴る。

自分が休息をし始めてから、近くでじつと隠れていたのだろう。走る事に特化した形になつていて子供達が崖上へと上がつてきていた。反逆を志したのは想定内だ。だが、それ以上に。

——あの子種と組んだのか？

思わず女王は聞いていた。それに対し、子供達は何も答えない。だが……そんな屈辱的な事に対して否定もしなかつた。

——もういい。

そこまで形振り構わなければ自分を殺せるとは思えなかつた事実よりも、それでもその選択肢を取つた事にどこか酷い落胆をしていた。

足を進める。尾の範囲内に届く直前、子供達は広く散開したかと思えば、そのまま逃げていった。

……は？

そんな逃げ腰に啞然とし、そして気付く。

どこまでも苛立たせて、どこまでも飢餓へと追い込むつもりだ。まともに戦うつもりなんて、微塵もない。

腹が立つ腹が立つ！

一匹を追いかければ、崖から飛び降りた。女王は更に追いかけて再び飛び降りる。

先程のプレデターの事を鑑みて、その一匹が崖に張り付いているのを確認すると同時に尾を振るつた。

どずずううつつ！

着地がやや疎かになる。四つの手を使ってやや不格好な姿勢。全身に痺れが走る。

だが、そんな事よりも。

避けられた……？　……避けられた？

肉を切り裂く感触もなければ、落ちても来ない。

頭殻から伝わつて来る感覚は、未だ元気に崖に張りついているプレデリアン。だが、切ろうとした位置よりかなり遠くまで動いていた。単純に、崖を這いずつて尾の一撃を避けたのだ。

それ程の敏捷性を手に入れていたとは思わなかつた。

そしてそのプレデリアンは崖の上へと戻ると同時に、他のプレデリアン達も自分を覗き込んでくる。

苛立ち。空腹。もう既に飢餓に近い程の空腹。

加えて、新たなる敵。未知の力。

あれ等を捕食する事は、この場所では子種を捕えるよりも難しい事だろう。

……一回、逃げた方が良い。

辛うじて残っている冷静な部分がそう告げてくる。

この場所でこの肉体を満たす事は出来ない。体力をひたすらに削り取ろうとしてくるその意志に、今の己は対応出来ていない。

だから、一回逃げてエネルギーを補給するべきだ。

……そんな事をこの己がするとでも？

ふざけるな！ ただ空腹を狙うだけの策を練られただけで、この己が惨めな敗北を認めろというのか！

全く。微塵も。

その選択肢はやはり、選べなかつた。この現状を開拓する策を思いつく事が出来なくとも。

ただ……試せる事は色々ある。

じやり、と音がした。

* * * * *

女王はこの星の外から来た自分達に対し、所持している武器などに興味も抱かなかつたのか。はたまた、その外の世界に興味も抱かなかつたのか。

きっとそうだろう。腕利きのプレデターが何体居ようが、正攻法では勝ち目の無い肉体を持つているのだから。外からやつて来たプレデターという種を捕らえて苗床どころか子種にして繁殖させる事までやつっていたのだから。

また、女王になるまで、集団の中の個として戦つた事もあるだろう。女王となつてからあの群れを成り立たせると、プレデターや反逆を翻した子供達を迎撃つた事もあるだろう。

だが、こうして狡猾に……ゼノモーフが手強い外敵に対して、手を変え品を変え攻め立てていくような行為への対応はした事はなかつた。

それは、もう断定して良い事だつた。

幾ら頭が良かろうが、知識や経験といったものがなければそれを活かす事は難しい。考え抜いたものが机上の空論であるかどうか分か

らない。

女王の策は、結局のところプレデターの想像の域を出る事はなかつた。

ただ、それでも。

あれから数日が経ち、女王が窪地に座してびくとも動かなくなつて一日以上が経とうとも。

プレデリアン達に、プレデターに刻まれているその絶大な力というものは、近付くのに対しても恐怖を覚えさせた。飢餓に陥っているのは間違いない。だが、その上で近付くのを待つているのも間違いない。

窪地の上からプレデリアン達やプレデターが覗いても、挑発しても、まるで休眠しているかのようにただただじつとしていた。

これは、どうしようもなくなつた女王なりの最後の策であり、そして挑発だつた。

女王は逃走も選べなかつた。個としての策で上回る事も出来そうになかつた。

だが、このまま餓死するまで待つ事もないと理解してもいる。この首を獲りたいのだと理解されている。

どれだけこの己が弱るまで待つつもりだ？　どれだけお前達は臆病者なんだ？

そういう問いをプレデリアン達とプレデターに投げかけている。

……女王は、あの場所から動く事はもう無いだろう。

走る事に特化していないプレデリアン達も、段々と集まつて来始めている。

……もし屠る事が出来たとしても、その次の瞬間、こいつらに囲まれている事になる。

難しいな。とても難しい。それこそ自殺行為とほぼ同義だ。

だが、今、ここにあるのは、子種だからどうだというような、そんなちつぽけな事柄じゃない。

手の届きそうな場所まで引き摺り下ろせた事への、そしてそれを引きずり落とそうとする事への覚悟。そして高揚。

どの形のプレデリアンであろうとも、子種のプレデターであろうとも。

逸る気持ちを誰もが抑えながら、等しく首を刈り取つてやろうと意気込みながら、女王にいつ挑むかを見極めていた。

* * * *

更に二日。女王は本当に身動き一つもしない。遠目では呼吸しているかすらも分からぬ。

だが、それでも一人飛び降りて挑んだところで、幾ら飢餓だろうと勝てる見込みはとても薄い。

そして勝てたとしても、周囲に臨むプレデリアン達を相手にして生き延びられるかと言われば、それも不可能だ。

だから、飛び込む時はプレデリアン達と合わせなければいけなかつた。

それを協調しているだなんて思いたくない、でもそれは必要不可欠だ、だから最終的に勝利をもぎ取る為には仕方のない事だ、そう言い聞かせていた……のだが。

プレデリアン達の中でも、高揚が苛立ちへと変わりつつあるのが感じられる。

けれど、それでもプレデリアン達は軍隊ではなかつた。ここに居る全てが、その首を、唯一の名譽を欲している。そしてプレデリアン達も一匹ではどう足搔こうとも殺せない事を理解している。

苛立つても未だ仕掛けないのは、不安の裏返しだ。

もう十分に飢餓に至つただろうか？ 総力を上げて、その中で自分が首を狩れるまでに衰えているだろうか？

長年その女王に仕えてきたプレデリアン達であろうとも、それは見極められていない。

プレデターもそれは同じではあるが。

流石にずつと起きてはいるはずだろうし、この場所に来て包囲を敷いてからは、女王は水すらも飲んでいない。

見た目は変わっていない。だが、変わり果てた、正に瀕死な女王を

殺したところで何の名誉を得られると言うのだ？

一度離れて適当に獲物を狩る。

血肉を食らつて口を汚しながら腹を満たす。

その口を拭う事すらせずにプレデターは歩いて登つて戻る。

そしてそのまま、いつも通りの足取りで未だ迷い続いているプレデターリアン達の隣を横切つて、窪地へと降りた。

女王が、僅かに顔を上げた。

枯れて久しい涎が、再び口から垂れ始めた。

顔を上げた女王は、自分を見てどこか落胆したように見えた。

多分、それは気のせいではない。

反逆を翻そうとも、産み育てた子供にはどこか期待を抱いていたのだろうから。

時間を掛けて立ち上がるうとするのに、槍を振るう。その途端、背後に控えさせていた尾がぶおんと飛んできた。

ガイインツ！

金属質な音が響く、が、女王の尾の穂先は砕けない。女王の骨の柄はへし折れない。

全盛ならば、この一撃でもう使い物になつていただろう。受け止めようと反応する事すら出来なかつたかもしれない。

確実に弱つている。

受けた衝撃のままに身を翻し、その尾を切り払う。

ずつ、と外殻を貫き、肉へと到達した感触。穂先には僅かながらも緑色の血が付着していた。

悲鳴こそ上げなかつたものの、女王は不服そうに尾を引っ込めた。体もきつと、脆くなつていて。

立ち上がつたその姿にも、霸氣と呼べるような威圧はなかつた。

勝機は十分にある、そう思えるが……。その様子には何か隠しているような、不穏さがあつた。

上からはプレデリアン達が我慢できなくなつたように飛び降りて来た。ぞろぞろと、先を越されて溜まるかと言つたように。
……。

女王は動かない。降りてくるのを待つかのように。

プレデターも動かなかつた。混戦の中を駆け抜けるならともかく、ただの板挟みになるのは避けたかつた。

今まで女王に付かず離れずの位置でひたすらに空腹へと追い込んでいた、敏捷性に特化したランナー。荒れ地の外でずっと待機していた、破壊力と堅牢さに特化したクラッシャー。そして、子供の中でも

特に才覚に溢れていた、新生の女王となつた二匹。

それらの大半が降りてきた頃。

全ての親である女王は胸から伸びる一対の小さな腕を、主となる両腕で掴んだ。

そして。

ブヂヂイツ！

躊躇なく引き千切り、口へと運ぶ。

ベリツ、バリリツ。ベリユツ、ボリユツ、ボリユツ。
がつつくように骨ごと噛み砕き、飲み込んでいく。
ゴキュ、ゴクン。

……。

飲み干せば、再び顔を上げて。

「ヴルル……」

殺意を露わにした女王に、全ては一斉に襲いかかつた。
自らの腕を食い千切つている間に襲い掛からなかつたのは、万全な
状態で戦いたいとかそんな高尚さが残つていたからではない。
それでも恐怖を、畏れを拭いきれなかつたからだ。

だが、振るわれる尾を、クラッシャーが身を挺して抑え込む。その
頭を踏んでプレデリアンの数匹が一気に飛びかかる。

これ以上の臆病者にはなれなかつた。

前からもプレデターが的確に関節を狙いにいく。その四肢を碎か
んと、直接息の根を止めに行こうと襲い掛かる。

しかし。

尾を抑え込んでいたクラッシャーは、気付けばその尾の先端の刃が
首に添えられていた。

振り回された腕に、背後からも前方からも、直接急所を狙いに行つ
たプレデリアン達の殆どが薙ぎ払われ、捕えられる。

プレデターが関節を貫こうとした瞬間、それは首を切られたクラッ
シャーが引き摺られてきて邪魔をされる。

「ギツ、ギカツ」

何がどうしてそうなつたのか、その馬鹿げた生命力は、皮肉にも全

身を握り潰されながら口に運ばれる合間にも意識を保たせる結果と成り果てた。

ぶちゅ、ごきゅ。

だが、それでも。女王は飢餓に陥っている。薙ぎ払われただけのプレデリアンはすぐに起き上がる。未だ辛うじて息のある、首を切られたクラッシャーはその足にしがみついた。

攻めは止めない。今が最初で最後の、屠る機会である事に疑いはない。

新生の女王の二匹が、前後からその長大な尾で突いた。ただ、それは怯えを捨てきれていない行動だつた。

女王と成ったのだから。この戦いの後には輝かしい霸道が待ち望んでいるのだから。

そんな欲が裏側にあるがままの一撃は、己に敵う者が居なくなつたから諦めて成った女王からすれば、生温いにも程があつた。小柄ながらもその一身で飛び掛かってきた個の方がよっぽど鋭かつた。

前へと一步。背後からの尾はギリギリ届かず、せめてと足を掴んでいたクラッシャーは虚しく解かれる。

ずん！ と地響きさえ起こしそうな震脚は、それだけで再び飛び掛けた。プレデリアン達をしがみつくだけで精一杯にさせる。その間に、背後は尾で貫かれ、前面は両手で払われ、掴まれる。

狙いを定められた新生の女王は一瞬、足が後ろへと退きそうになつた。が、矜持がそれを押し留めた。今、この場所でこれ以上逃げ腰を見せたら、生き残つたとしても女王としては在れない。不適と見做され、誰も付いて来ない。

そして子種、プレデターが再び女王の背後から槍を突く。

女王は気付いている。子供が闇雲に傷を増やそうとするのとは全く別な、外骨格の隙間を的確に狙うそれは一撃で致命傷になり得るもの。

だから、強く避けた。そしてそこにクラッシャーが体当たりを決めた。

「ギツ」

よろけた。

転ぶまではいかなくとも、その巨体のバランスが崩れた。

遠くで距離を取つて機を待つていた慎重なプレデリアン達も、一斉に飛び掛かった。ランナーは一気に駆け上り、その首へと辿り着く。そして、距離を詰めた新生の女王がその頭を掴んだ。

「ガアアアッ!!」

だが、女王は吼えると同時に体を強く回した。ランナードころか、他のプレデリアンも一気に吹き飛ばされた。頭を掴んだ新生の女王は逆に体を崩された。

激しい遠心力と共に振り回された尾は、先端でなくとも数多のプレデリアン達を肉塊へと変え、そして体当たりをしたクラツシャーに巻きつけば、何をさせる間もなく首を捩じ切つた。

「ギイツ……」

しかし、そんな時でもプレデターは冷静だつた。その暴風の中心、安全地帯にすかさず潜り込み、今度こそ関節を貫いた。

バギイツ！

それでもただやられる訳ではなく、強引に筋肉の収縮で穂先を碎く。

同時に倒れる新生の女王の頭を掴み、握り潰……せなかつた。

自らの一対の腕を、数匹の子供を口に入れた。だがそれらはローザルゼリーのようにすぐに体のエネルギーとなる訳じやない。削られた体力は、補給される前に底を尽き始めていた。

「ガアアッ!!」

新生の女王が、顔を上げてその腕を掴み返した。女王はそれを振り解けなかつたが、咄嗟に目の前にあるその頭を直接隠し顎で貫いた。掴まれたまま、新生の女王は即死し、倒れる。関節を貫かれた片足、踏ん張る事が出来ずに共に女王も崩れ落ちた。

その一閃で、プレデリアン達は一気に十体以上も死んだ。しかし、まだまだ全滅には程遠い。吹き飛ばされたプレデリアン、特にランナー達はもう近くまで走つてきていた。

尾を振るおうとするものの、先程よりも更に一段と重みを感じさせた。

……この私が!? この私が、空腹なだけで!?

一手の遅れが積み重なっている。万全の状態なら、どれだけ来ようとも関係無いというのに。

だが、どれだけ憤慨しようとも、その肉体にエネルギーが補給される事はなかつた。

首の骨を碎こうとしたランナーを捕まえようとすると、軽やかに避けられた。

クラツシャーの背後からの体当たりに、手を前に着いてしまう。振り向いている暇も惜しく、また尾で絞め殺そうとすれば、その前に掴まれた。離せず、隠し顎がその尾に大きい風穴を開けた。

子種が目の前で穂先を新生の女王の尾に挿げ替えていた。

* * * *

女王の敗北はもう時間の問題だつた。もし、ここから生き残れたとしても、無視出来ないダメージを負つている。

残るのは、誰が止めを刺すか……誰がこの女王を屠つたという名譽を手に入れるか。

それの為に、同士討ちが始まつていた。プレデターもこれまで無視されていたのが、ついでというように襲われるようになる。

結果、女王は未だ強く生を繋ぎ止めていた。

立ち上がりなくなつても、どうしようもない程に群がられる事はなくなつてゐるし、何せ急所まで届こうとしたプレデリアンが引きずり落とされるという事まで起きてゐる。

……結局はケダモノだな。

矜持もある。知性もある。けれど、それらは全く洗練されていない。

そう思いながらも、プレデターも少なくないプレデリアン達に襲いかかられて、流石に逃げに徹するしかない。

その視界の隅で、もう一匹の新生の女王が仕留めに掛かつた。

背後から、両腕と尾で同時に襲う。が、女王はそれに反応した。

動く片足で無理矢理と言つたように体を翻し、新生の女王の攻撃を捌いた。

一番警戒していたのだろう、とプレデターが思うも、それはすぐに間違いだと思い知る。

そのまま新生の女王に飛びつき、押し倒す。そして、反撃される前にその胸を隠し顎で貫いた。

緑色の血が吹き出し、そして。

ごきゅ、ごきゅ。

それを女王は大きな音を立てながら飲んでいく。新生の女王は悲鳴を上げる間もなく、がくがくと震えるだけ。結局、もう一体と同じように何も出来ないまま惨めに息を絶やした。

そしてそんな隙だらけな姿を晒す女王に数匹が一気に襲い掛かつたが、女王はそのままに余さず掴み取った。

顔を上げれば、血まみれになつたその顔は正に生き返つたよう。

「イ、ギ、ガアアアアアアアアアアアア!!」

掴んだ数匹のプレデリアンをもうそれを口に運ぶ事もなく。

万力のように、肉体が漲つていくのに連れて段々と強い力で握り潰していく。

最期は、上半身と下半身が離れてばどりと落ちた。

……ほら、こうなつた。

途端に同士討ちを止めて一斉に襲いかかつたプレデリアン達を、プレデターは呆れた目付きで眺めていた。

女王も心なしかそんな様子だった。

生き残りは半数を切つていて、数多に流される緑色の血はもう平坦な場所がないと言う程に地面を溶かしているが、そこに死体がごろりと落ちていき、結果として平坦なように見えている。

流石に女王は本調子にまで戻つた訳じやない。ただ、それでも先程までよりは目に見えて動きが良くなつていた。

片足を潰されようとも、全身から血を流していようとも、尾が使えなくなろうとも、プレデリアン達はそこから碌にダメージを与えられなくなつてしまい、怯み始めていた。

自業自得だというのに、馬鹿過ぎる。

そこへ、プレデターが再び前へと出た。

——貴様の方が優れているとでも言いたいのか？

女王が問い合わせてきたのに対し。

今こそ堂々と答えられた。

——事実だろう。

しかし、女王は意外にも否定して来なかつた。するだけの材料もないだろうが。

槍を構えれば、自ずと他のプレデリアン達も静観に入つた。

敵うわけがないから、さつさと孤独に死んでくれとでも思つていうな様子だつた。

動けない女王は死体を投げた。

酸が撒き散らされるが、今はもうそれを必死こいて躲す必要もなかつた。結局、ゼノモーフの因子を色濃く取り込んでいなければ、ここに立つている事すら出来なかつたのだ。

また全身に勢いをつけて投げられていたら、避ける事はおろか、視認する事も出来なかつただろう。ここまでしてやつと対等になつた。やつと、一対一で牙を届けられる。

身を低くして避け、接近する。その先で女王は、新生の女王の尾を引きちぎっていた。

鞭として？ 使えるのか？

ゼノモーフは、道具を使うとしても精々簡単な罠などを利用し返す程度だ。プレデターや他の知的生命体が如何に有用な武器を使つていようとも、それを奪つて使うような事はほぼほぼ見受けられない。

肉体に余程の自信があるからか。それとも矜持のようなものがあるのか。はつきりとは分かつていないが、けれど使えるだけの知性は確実にある。

だが、それでもプレデターは足を止めなかつた。根本から引きちぎつたその尾は、女王の身の丈と同等以上な程に長い。間合いの内側に入ればそう恐れるものではない……が、女王はそれを身に纏つた。胸と首を守るように。

……嫌な小細工だ。

そう思いながら腕へと槍を振るう。硬い部分で弾かれた。受けに徹されたら、足と尾を奪つても硬過ぎる。出血も今は落ち着いている。

削り切るのは無理だ。こんな死体……女王にとつての食料が数多にある場所で。

かと言つて致命を狙うのも酷く難しくなつた。

どうするべきだ？

一旦距離を取る。その瞬間、女王は纏つていた尾を掴んだ。体が瞬時に危険を訴え、跳ぶと同時にその尾が激しい勢いで地面へと叩きつけられていた。

先端は突つ立つていたプレデリアンを真つ二つにしている。
……これなら。

活路は残されている。その尾を攻撃としても使うのならば、そうして積極的に自分を殺しに来るのならば隙はある。

続けて地を這うように薙がれる尾を跳んで躰す。

威力こそ当たつてしまえば即死だろうが、軌道は直線的だ。避けるのにそう苦労はしない。

ただ、すぐさま懷に潜り込むような真似はしない。チャンスは一度切り。そう思った方が良いだろう。

女王は尾を短めに持ち直し、そしてスナップを生かして放つ。目に見えない速度、だがその分予備動作も大きく、狙いも自分に真つ直ぐと。

避けられる。だが、次に今度は地面に散らばる幾つもの死体を乱雑に掴めば、それを散弾のように投げてきた。

尾は女王の手元に戻つており、判断を間違えれば次の瞬間、その尾で体が四散するだろう。

だが、プレデターはもう怯えを抱いてはいなかつた。

同じく足元の死体を持ち上げ盾にする。腕の力だけで数多に投げられたその内の一つは、死体というクッションさえあれば容易に受け止められる威力だった。

続けて斜め上から叩きつけられる尾をするりと躲す。

「ギルル……」

女王はたつた一匹を仕留められない事実に歯軋りをしていた。避けられる。接近出来る。牙を届けられる。仕留められる。

その事実は、プレデターを勇気づけるのに十分過ぎるものだつた。一向に子種の一匹を殺す事が出来ない。

この肉体が万全ならば、今頃全てを肉塊に出来ていただろう。それを何度思つた事だろう。

己は間違つていた。飢餓に追い込むという小癪な策に対し、真っ向から打ち破ろうと躍起になつた事こそがここまで傷つき、追い詰められてしまつた原因だつた。

強さとは、多角的なものだつた。己はその内の一つしか持たずに、そして女王と成つて備わつてしまつた弱さに気付かないままに、頂点に立つた氣で居たのだ。

それを認めなければいけない。

だが。

それでも敗北を、死を受け入れるつもりは微塵もない。

ガインツ!!

子種が隙を縫つて槍を突いてくる。一突きで己の命までを刈り取らうとしてくるほどに鋭いが、防御するのが難しい訳ではない。

死体の一つ二つを口に運び、そして投げる。尾を四方八方から放つてそれらを巻き上げる。

近付いて来れば一旦尾を巻く事も考慮に入れながら、防御に重きを置く。

子種が己を殺す為には、的確に急所を狙わなければ倒せない。更に足場は不安定で変わり続ける。

それに対し、己は何でも一撃当てれば良い。すれば面白いように体は碎けてくれる事だろう。

有利なのは己なのに違ひない。食料も今となれば幾らだつてある。だから、我慢比べをしようじやないか。

女王はそう結論付けた。時が経てば、子種の方が先に崩れると信じ

て疑わず。

しかし……歴戦の経験というものは、女王とプレデターでは全く違っていた。敵と比べて、圧倒的有利な肉体を持っていた事は変わらないだろう。

しかし、女王の戦闘の経験は、どこも大差ない構造の巣の中に入り、大差ない姿形の敵を屠り、そして大差ない女王を潰す事ばかりだつた。時折プレデターを屠る事もあれど、それすらも圧倒的有利な肉体で叩き潰しただけだつた。

それに対し、プレデターは様々な星を旅してきた。様々な地勢、立地の中で、様々な姿形をした敵を的確に屠つていった。

女王が己に有利と断じた要因は、プレデターにとつては全く障害ではなかつた。

遠くに離れたプレデターに、女王は尾を振るう。単調になりつつあつたその攻撃。

待つていた。

最短、最速でプレデターが懷に潜り込んだ。段違いの鋭さに、持久戦へと持ち込もうとしていた女王は反応が遅れた。もう片方の腕で捕らえようとするが、指と指の間をすり抜けるように躱され、虚空を握つた時。

腹に強く槍が突き刺さつっていた。

「ギツ、ア、ツ」

プレデターはそれに乗る。目の前には胸。

同時にもう一つのスペアの穂先、ただの女王の尾を手に取る。大きさも重さも、この女王と比べたら張りぼてに等しいが、鋭さだけは大差ない。

胸から生えるもう一対の腕があれば、まだ抵抗出来ただろうが、そこにはもう何もない。

女王の手がプレデターを再び掴もうとするその前に。

その尾は胸へと深く突き立たれた。

「ガツ」

そして、引き抜く。

どば、と血が吹き出し、倒れる女王。

プレデターが槍と共に離れれば、女王は辛うじて腕を着いて胸を押さえたが、その全身はがくがくと震えてもう何も出来そうになかった。

プレデリアン達が唖然とする中、プレデターは再び槍を構えて、その首へと振り下ろした。

どづ。

首の骨の隙間へと的確に。

女王はもう何も言えず、体を痙攣させるばかり。

もう一度。

ぶつ。

神経の束が一気に千切れる音がした。

女王の動きが止まり、倒れ伏す。

そして更にもう一度。

ざぐ。

気管も血管も切り落とせば、後は自重でぶち、ぶちと音を立てて頭と首が離れた。

ごろりと転がるその頭蓋。

時が止まつたような、僅かな無音。

どこからかの微かな風と共に。

「ルオオオオオオオオオオオッ!!!」

プレデターは勝鬨を上げた。

辺り一帯に響き渡る程のそれは、正しくこれまで全ての戦が比にならない歓喜を現すものだつた。

Good End

周りのプレデリアン達は、立ち尽くすばかりだった。

以前のように怒りのままにプレデターに襲い掛かつて虐げる事もない。

そんな中、プレデターは戦利品としては大き過ぎる頭蓋ではなく、尾の先を切り取つて手にした。

死して尚、然とある重量と、切つ先の鋭さだけで体が震えてしまいそうな。

ただ、槍の穂先として使うには大き過ぎる、重過ぎる。武器として使うのならば、そのまま大きな剣として扱う方が相応しそうだつた。顔を上げる。プレデリアン達は、自分が唆した時と同等なように固まつたままだつた。

……俺達は、狩猟への欲求を本能的に抱いている。

ただ、それだけで宇宙の中でも優れた種族になつた訳じやない。

過去から知見を、教訓を受け継ぎ、そして昇華させていく事。

それを弛まず続けてきたからこそ、宇宙を駆ける狩猟が可能となつた。

この俺もそうして心身を鍛えてきた。自らの歴史を知り、どのようにして生きる事が真に誇り高きプレデターと成れるかを学ぶと共に、自問自答を重ねてきた。

狩猟への精神の持ちよう。受け継がれて成熟した文化。

女王の下で抑圧され続け、やつと解放されたばかりのプレデリアン達には、そのようなものは微塵もなかつた。

狩りへの欲求はあれど、それは幼稚なものでしかなかつた。思い通りに事が運ばなかつた時、どうしたら良いのか分からず固まつてしまふように。この子種が自分達より優れているという事実を認められていないうように。

けれど幸いなのは、それでも僅かながらにも、女王と戦うまでに時間があつた事だつた。

今ままじや倒せない女王に、どのように立ち向かえば良いのかと

いう思考する時間は、少なからずプレデリアン達の精神を成長させていた。

子種が女王を倒してしまったという事実に対し、それを否定したり横取りしようと襲いかかつてこない位には。

少なくとも、流刑にされるような同族よりは矜持といつものに真摯だつた。

そんなプレデリアン達の間をすり抜ける。それでもこんな囮まれている状態で襲いかかられたら一溜まりもない事に内心冷や汗を搔きながらも、平静を努めながら。

……きつとここで怯えた素振りを見せたら、その途端に襲いかつてくる。

そう確信しながら歩くのは正直なところ、女王と戦っている時よりも緊張していた。時間の流れが酷く遅く感じられた。

それでも群れの間をどうにか通り過ぎて。

……ほつとしたら駄目だ。それでも襲いかかつてくるかも知れない。

そのまま窪地から跳躍して高台へと登る。そして振り向けば、プレデリアン達が一斉にこちらを見ていた。

思わず体が震えたが、よくよく見てみれば誰も憎たらしくと言うようない強い負の感情までは、こちらには向けてきていなかつた。

そんな様子に足を止めてしまう。

……

自分は子種から脱却した。女王とはまた違つた強さを持つ、正々堂々と倒すべき敵と見做された。

そう、感じられた。

踵を返し、この場所を去る。

流石に疲れがどつと出てきていた。

いつから疲れだろう。もしかしたら、女王に反逆すると決めた日からずつとあつた緊張かもしけない。

そして今、この近辺には、プレデリアン達以外にはゼノモーフは居ないと言つても過言ではない。

「……休める場所を探すか」

いつ振りか、緊張の無い声でプレデターは独り言を呟いた。

重装備のプレデターが多数のゼノモーフと対峙していた。プレデリアンと同等な巨躯を鎧と武具で纏うその姿は、見た目としては身軽さを微塵も感じさせない。だが、その巨体の成せる技か、見た目以上の俊敏さを伴つて襲い掛かるゼノモーフ達を返り討ちにしていた。

両肩に備えるプラズマキャノンは並のゼノモーフを逃さず四散させ、近寄れたとしてもその体捌きは刺突はおろか、体に手を掛ける事すらも許さない。酸を飛ばして鎧を溶かそうとも試みたが、防具がその対策をしていない訳もなく、また隙間から染みて傷になる事もない。

こんな試練に臨むくらいだ。武器の扱いにも長けており、両腕に備えるリストブレイドと槍を同時に振るう事で、屍の山を効率的に積み上げる事も可能としていた。

……これだけなら、そう恐れる事はないな。女王も倒していくこうか。

そんな余裕も段々と芽生えて来る。

ただ、途中で異変に気付いた。

……誰か、他に居る？

遠くでも戦闘が起きているようだつた。しかも……私よりも迅速に殺してないか？

全身に数多の武装をしている私よりも、一体どうやつて？

それにそもそも、ここ最近でこの試練を突破した奴は居ないと聞いているのだが。

試練とは別に個人で来ているのだろうか。いや、こんなゼノモーフ塗れの場所に飛行艇で来るなんて、この星に閉じ込めてくれと言っているようなもんだ。

傍に逸れた思考。集中が薄れたのがゼノモーフにも分かつたのか、同時に数匹が襲いかかって来たのに反応が遅れた。

咄嗟に振るつた槍の柄を掴まれる。同時に蹴り飛ばし、リストブレイドで胸を貫くが、それでも必死にしがみついてきた。

くそ。とにかく、こいつ等を片付けてからだ。

プラズマキヤノンで頭を弾き飛ばし、力づくで引き剥がしながら体勢を立て直す。

顔を持ち上げれば、今が好機だと言わんばかりに一気に襲いかかつてきた。

三割程を殺したところで、ゼノモーフ達は撤退していった。

「……油断してしまった、か」

槍が少し曲がつて収縮出来なくなつてしまつたのに加え、プラズマキヤノンの一つが破壊されてしまつた。鎧も一部が強く削れて耐酸の分厚いコーティングが剥げてしまつていて、手痛い損害だ。

だが……それよりも気になる事は。

その原因になつた、自分以上の速さで屍の山を積み上げていた同胞。

鎧もヘルメットすらも身につけていない裸でありながら、呼吸に苦労しているような様子は全く見られない。

その代わりに身に纏つて いる薦には、ゼノモーフの肉体……しかも女王の肉体を加工して作ったような武器が幾つか。そして手に持つているのは、女王の尾よりも一際大きな尾を使った剣だつた。

それだけで強さは見て取れる。悔しいが、私よりも強いのは確実だろう。

……けれど。

「あんた、その体に何があつたんだい？」

ヘルメットは、それを同族と見做していなかつた。まるで……プレデリアンをゼノモーフと認識出来ないようだ。

「……強けりや、その内分かるさ」

余り話したくないようだつたが、それにしても不可解な返しだつた。

「弱けりや、なら分かるけど、強けりやつて何さ？」

暫くの間言葉を選ぶように悩んでから、言った。

「う、ん……。…………そうだな。強ければ、死ぬより更に厳しい地獄に落とされる。そう言つておこうか」

「……？　はつきりとは言つてくれないんだな」

「余り思い出したくはないんだよ」

ただ、推察出来る事もある。この同胞はきっと、ゼノモーフ達に一度敗北したのだ。

そこから何らかの理由で生かされて、その身体にされ、そして反撃に出た。腑に落ちない部分もあるが、そんなところだろう。

そうなると、私に接触してきた理由は。

「私の迎えがいつ、どこに来るかを知りたいのか？」

「察しが良くて助かる」

伝えると、同胞は感謝の意を示してから。

「プレデリアンもこいらには居る。もし会つてしまつても、戦おうだなんて考へるなよ。

一匹だけならあんたでもどうにかなるだろうが、十四、二十匹も相手にしたいとは思わないだろう？」

「……お、おおう」

「それじゃあな。あんたも健闘を祈る」

「え、あ、おいっ。共闘しようとかは思わないのか？」

さつさと去つていくその同胞に、思わず呼び返した。

「…………これは助け合うような試練じゃないだろう？」

また、言葉を選ぶような時間が。

返答の内容もあって、お前みたいな弱者を連れていられるかよと言ふような裏の言葉が見て取れた。

ただ、それは正論でもあつた。己だけの力で試練を突破しようと、この地にやつて来たのだから。

「…………分かつた」

返せば、今度こそ去つていつた。

「…………どうしようか」

何十体ものプレデリアン。きっと、これまで試練に臨んだ同胞達は

そいつらにやられて、腹を食い破られたのだろう。

『強ければ、死ぬより更に厳しい地獄に落とされる』

.....。

「まさか、な」

嫌な予感を振り払うように行動を再開した。

それから暫く経った後には、あの女性のプレデターの破壊された装備が転がっているのが見つかった。

周りには他にゼノモーフ等の死体はなく、それも含めて抵抗出来たような痕跡は何一つとして無かつた。

プレデリアン達に捕らえられたのは明らかだつた。

そもそも。

「あんな重装備と腕前じやあな」

俺を越そうとしているあのプレデリアン達に太刀打ち出来るはずもない。

子種は一匹たりとも居なくなつてしまつたから、きっと生かされたまま拘束されているだろうと思うも、今となつては別に増やす必要も今となつてはそう無いだろうから、苗床にされていてもおかしくはない。

どちらの方がマシかと問われたら、俺という子種から脱してしまつた存在が居る以上、もう自由にさせることはないだろから……苗床になつてさつさと死んだ方がマシだろう。

冷徹に思考を巡らせていれば、そんな弱者を助けに行こうとも思はずもなかつた。

破壊されたガントレットを拾い上げて、一部の機能だけでも使えないと試してみるが、流石に無理で再び捨てる。

それから、空を見上げた。

「……後、もう少し」

流石に母星が懐かしくなつていた。

* * * *

時が経つに連れて、この地に他の群れのゼノモーフ達が戻つてくる事はなかつた。

あのプレデリアンの女王が死んだ事も分かっているだろうが、残つたプレデリアン達も強者揃いであり、そして今やもう、そのプレデリアンを生み出す為の苗床も無くなつてゐる。

広大な縄張りではあるが、攻める価値はなかつた。

しかし、そのプレデリアン達は強く結束している訳でもなかつた。引き継がれた狩猟本能は抑えつけなければ、群れとしてそもそも形を為す事が出来ない。

そして、反逆を決めた後に女王と成つた二体は、呆氣なく死んだ。何よりも強かつた元来の女王も、数の有利と空腹に追い込むという策を正面から覆せる程ではなかつた。

そんな事を経験してしまえば、もう誰もが女王に成ろうとも思わず、そしてまた、女王を持たない群れの在り方はプレデリアン達に合つていた。

群れの為にこの身を犠牲にする事も厭わないという考え方にはプレデリアンには合うものではなかつたし、そもそも外敵という脅威に怯える必要もなければ、群れである必要もそうなかつた。

誰が誰に忠誠を誓うでもない。だが、緩いながらも仲間意識はあり、志は共有している。

そんな群れの在り方は、少しばかりプレデターの在り方に似ているようと思えた。

そして、その志とは、より強くなる事。あの子種だったプレデターを上回る事。

まだ、あのプレデターに勝つには自分達には欠けているものが多過ぎる。

そう自覚したプレデリアン達は、各々が思うがままに鍛錬に取り組んでいた。女王の抑圧から開放されたプレデリアン達は、そんな日々を少なからず楽しげに過ごしている。

いつか、あのプレデターをまた子種へと堕とせる時が来たならば、それは今まで経験した事のない絶頂へと誘つてくれるだろうと思ひながら。

だが……それにタイムリミットがある事など、理解していなかつ

た。望郷の思いなど、プレデリアン達の前では微塵も見せていなかつたから。そして、この地にやつて来たプレデターは全て苗床か子種にしていたのだから。

その日がとうとうやって來た。

気持ちの昂りは、十日以上前から抑えきれていない。

この試練は自分の至らなさを、矮小さを自覚させると共に、自らをより一段高みへと持ち上げてくれた。

ただ、それでも、この星からはもう一刻も早く去りたい気持ちばかりだつた。

この地で浅い睡眠を取つていれば、嫌な夢ばかりを見る。あの巣の中で、憂き晴らしにとひたすらに虐げられ続けた時の事や、女王の存在感だけで足が震えて止まなくなつた時の事を。

女王を倒したというのに。子種という地位から脱却出来たといふのに。それでも全てをかなぐり捨てて泣き叫んだ記憶は、この身に刻まれた恐怖は、微塵も消える事はなかつた。

昨晩も浅い睡眠の中で見た夢は、あの女王に敗北して好きなようにされる夢だつた。

……アレに正々堂々と勝つ事を諦めたのを、俺は少なからず後悔しているらしい。

その末路は、夢の通りに敗北しかないだろうに。ゼノモーフの因子を押しのけて主張する、元々のプレデターとしての純真な誇りは、それでもこんな形で勝利を得るくらいならば、正々堂々戦つて死ぬ方がマシだと訴えているようだつた。

「どれだけ鍛錬しようとも、無理だろうに」

そう咳きながら、回収地点に立つた。

……きつと、これから先、俺は内外色々と面倒な事に巻き込まれるのだろうな。

ゼノモーフの因子を取り入れた事による、内面の変化。完全には混じりきっていないそれぞれの反発。消える事は無いであろうこの星での記憶。

また、同胞達が忌み嫌う存在に近付いた事による、批判。押し付けられるかもしない烙印。

だから、せめて一度くらいは、何も警戒する事なく眠つておきたい。そう願つていた。

この地の太陽が空高くに登る頃。

光学迷彩を解いていきなり空から現れたその船は、ぱかりとその扉を開けた。

そして、紐が降りて来る。

地上まで降りてくるのに待ちきれず、跳躍してそれを掴んだ。

その瞬間。

「ギアアアアアアッ!!」

遠くからプレデリアンの咆哮が響いた。

「ガアアアアッ!!」

「グギガガガガガガッ!!」

運が悪かったのか、近くに数匹のプレデリアンが居たようだつた。それらが、この星から去ろうとする自分に対して強い怒りを向けてきていた。

……帰りたいと少しでも思われていたならば、きっと俺はある時、あの包囲から逃げる事は出来なかつたのだろうな。

意図して隠していた訳ではない。その偶然に、そしてもしそう思われていて、捕まつていたらという事を考えてしまうと、それだけで背筋が強く震え上がつた。

そして、プレデリアン達は捕らえようと跳躍して來た。船が持ち上がるよりも早く、より高く。

プレデターは上へと一気に体を持ち上げた。

戦うのは得策じやない。登れば、すぐ下にまでプレデリアンが飛び上がつて来て、紐を掴んだ。

その紐を切る直前。

——逃げるな、この臆病者がア!!

臆病者か。確かにその通りかもしれないがな。

——元々帰る予定だつたんだよ。気付けなかつた方が悪い。

ぶつつ。

プレデリアンは喚き散らしながら落ちていった、と思いきや。

もう数匹下から跳躍していたプレデリアンを踏み台にして、空中で再び飛び上がった。

そのままプレデターを捕らえようと、一直線に両腕を前に突き出して。

だが、プレデターはそんなプレデリアンに対して冷静に、女王の尾の剣を振るつた。

他のどの尾よりも重厚で鋭利なその刃は、プレデリアンの両腕すらをも容易く切り飛ばし、それでも隠し顎で最悪な接吻をしようとしてきたのを最後に蹴つて退けた。

「……全く」

緑色の血を撒き散らしながら落ちていくプレデリアンを目にしながら、胸を撫で下ろした。

そして登りきれば、今、正に試練に臨もうとしているプレデターが出迎えた。

「降りないのか？」

そう聞けば。

「死ねと？」

下を覗いてみれば、もう十体以上のプレデリアンが集まつてきていた。

「……囮まれてなきや、俺なら行けるかもな」

そう答えれば。

「……鍛え直す事にするよ」

そう言つて、試練を止めて船の中へと戻つていく。

そうして、船は再び宇宙へと飛び立つた。

* * * *

宇宙船の中で、数多の手続きをこなしていく。

当然の如く、もう死んだ扱いになつていたが、実は生きていたという事はプレデターにとつてはそう珍しい事でもないので、手続きはそこまで煩雑にはならない。

ただ、その途中で自分の生体認証が効かなくなっている事に気付いた。

「だよな」

もう既に自分がただのプレデターではない事は、すれ違つただけの同胞にも分かられているようで。

試練をやめたプレデターが聞いてきた。

「あんた……あのプレデリアン達とただの敵同士では無かつたんじゃないか？」

あそこまで執着するのは、何かおかしいように思えたんだが

「……そうだな」

女王の尾の剣を持つて、眺めながら続けた。

「色々とあつたが……もう一度とあの星には降りたくないね」

自分でも想像以上に辟易とした声が出る。

「……苦労したんだな」

それ以上は聞いては来なかつたが、船で働くプレデター達はもう既に、自分に対して精密検査を行おうとしていた。

これから色々と問い合わせられる事になる。

プレデターは聞いた。

「ひとまず……どこか寝れる場所はあるか？」

そう聞けば親切にここまで案内してくれて、一人にもしてくれた。

窓から外を覗いてみれば、見える宇宙の景色の中で、そのゼノモーフが蔓延る星があるのかも分からなかつた。武器を全て置いて、ベッドに横になる。

「ああ……」

一気に眠気が襲つてきた。

これだけ安心して眠れるのは、いつ振りの事だろうか。

再び女王の夢を見た。

捕らえられた後、踏まれて、土下座を強要された時の事が鮮明に夢として出てきていた。

目が覚めた時、体はあの時と同じ程に震えている。

そして、気付いた。

「……そうか、俺はもうずっと」

死ぬまであの女王に屈服したままなのか。

プレデターとしての純真な意識が、正々堂々と倒さなかつた事に後悔を覚えているとか、そんなちっぽけなものじやない。

単純に、あの女王に俺が追いつけることはない。正々堂々と戦える程に俺が強くなる事はない。

それを確固と刻まれたのだ。

外からノックが響く。

「起きていますか？ 貴方の身体を検査したいのですが

「ああ、行く」

身体を起こして部屋を出る。

ただ、あの女王より弱い存在になら。
もう、怖気づく事などないだろう。

Bad End

子種は、物憂げな顔で空を眺めている事があった。

こちらが見ている事に気付くと、すぐにそんな振る舞いは止めて元に戻っていたのだが、それが何を意味するのか最初は良く分からなかつた。

ただ、女王の抑圧から解放された後、一匹が気付いた。

あれは、帰りたがつてしているのだと。今まで、空からやつて来た全てのプレデター達は全て子種か苗床にしてきたが、そうならなかつたら、また空へと帰つていくのだろうと。

プレデターはこれからも時折やつて来るだろう。

そして、女王を殺すという名譽を手に入れられた後には、それに乗じて帰ろうとしても全くおかしくない。いや、きっと、帰ろうとするだろう。

だから。

プレデリアン達は、自分達が女王を殺せなくとも、女王が死んだ場合、一つだけ決めていた事があつた。

雄叫びを上げたその瞬間。

周りのプレデリアン達は、一斉にプレデターに襲いかかつた。
「えつ、あがつ!」

それはほんの数瞬。歓喜に打ち震えるばかりのプレデターに対し、四方八方から飛び掛かつてきたプレデリアン達には流石にプレデターも為す術がなく、一気に抑えつけられて、地面へと縫い付けられる。

——お、お前達つ、何をつ!?

その驚愕の問いに、プレデリアン達は冷徹に返した。

——終わつたら逃げるつもりだつたんだろう?

——この地に居るならまだ良い。だが、子種が居なくなつたら困る。

——ずっと、死ぬまで子種としてこの地に縛り止めやる。

図星でもあつたのに、プレデターは即座に言葉を返せなかつた。

槍を奪われ、装備を剥がされ、そんな中、プレデターは咄嗟に言葉を紡いだ。

——お、おい！　俺の本拠地へと行きたいと思わないか!?　こんなつまらない野生動物ばかりの星じゃなくて、俺の星には、俺みたいな強い奴ばかり居るんだ。だから、だから、な？

プレデリアン達は一瞬、顔を合わせた。

だが、その理由はプレデターの提案に逡巡したからではなかつた。その提案は、懇願だつた。明らかにこの子種はもうプレデリアン達に怯えていた。

卑怯者と断じて一騎打ちなどを望んだのならば、まだ解放される事はあつたかもしれない。

けれど、そんな強さとはかけ離れてしまつた言動はもう、プレデリアン達を落胆させるにはもう十分だつた。

また……宇宙の彼方にある星にプレデターの本拠地がある。そこへと、空から降りてくる船で行く事が出来る。

そんな突拍子もない事をいきなり言われても、プレデリアン達はそれを信じる事すらも出来なかつた。

だから。

もうプレデリアン達は何もプレデターに言う事は無かつた。

興味をなくしたようなプレデリアン達は、プレデターを引き摺つていいく。

そんな最中、何か致命的な失敗をしてしまつたとだけは気付いたプレデターは、それでも喚いて懇願し続けたが、程なく頭を踏まれて気絶した。

* * * *

気が付いた時。

目の前には女王が居た。

しかしそれはプレデリアンの女王ではなく、ただの野生動物を元に

したゼノモーフの女王だつた。

だが、その姿は威厳に溢れたものではない。

壁へと磔にされているその全身は、至るところが欠けていた。片腕と両足がなく、頭殻も砕けている。

その女王は、自分が起きたのに気付くと、顔を持ち上げた。

——貴様の企みも全ては無駄になつたのだな。私とお似合いだ。

女王のその声は、酷くやつれていた。そうでありながらも、どこか愉快そだつた。

ここは地下。プレデリアンの巣の中。

そこに自分は磔にされているようで。

女王の言つた言葉が、恐怖を刻み込む。

『私とお似合いだ』

体の感覚がおかしかつた。自分の体がどうなつているのか、見たくなかつた。でも、確かめざるを得なかつた。

そして。

「……あ、ああ？　あああああ！？　嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ、嘘だ！！」

両腕の、肘から先が無かつた。片足も膝から下が無かつた。

「お、俺の腕が、足がつ！　返せ、返してくれつ！　駄目なら殺していくれつ、頼む頼む頼む頼む、頼む、誰か！　誰か！」

叫んでも、叫んでも誰も来る事はなかつた。

そんな悲鳴を、女王は暇潰しが出来たと喜びながら耳を傾けていた。

「あ、ああ……あああ……」

体に力が入らない。欠損させられた肉体そのものと同等以上に、精神が折れていた。

涙がぼたぼたと、とめどなく流れてくる。このまま水を流していくれば、脱水で死ねないだろうかと思うものの、この壁は脈動していた。千切られた四肢の先と同化しているその壁は、自分に栄養を流し込んでいた。

それに、子種として壁に磔にされていた女性のプレデター達。この地下で生まれ、子を産めなくなるまでひたすらに産ませ続けられ、そして最後は自らも苗床として死んでいった。プレデター達は、何か食事を与えられるところも見たことがなかつた。

それなのに、子を産み続けていた。

——貴様も、私も生かし続けられるのだろうよ。子を産む為に。またやつて来る貴様の種族の雌と交わさせて、強い個を生み出す為に。「やだ、……嫌だ、そんななら、殺してくれ」

女王には、プレデターの言葉までは分からぬ。ただ、何を言つているのかは分かつていた。

——諦めろ。四肢を失つた貴様が出来る事はもう、何もない。

これまで積み上げてきたものが、耐え忍んで、体内にゼノモーフの因子を強く取り込んでまで得た勝利が、全て一瞬にして無に帰した。

そしてこれからはもう、死ぬまで自由になる事はない。狩りに興じる事はおろか、物を飲み食いしたり、歩く事すらも出来ない。

それは、プレデターにとつては到底受け入れられるものではなく。何度もプレデリアンがそんなプレデターを見にやってきて、プレデターはその度に殺してくれ、そうでなければアレを飲ませてくれ、と喚き、懇願するものの、それら全ては相手にされない。

話し相手が出来たと思っていた女王も、そうして段々と狂つていけばかりのプレデターに声を掛ける事もなくなつていった。

* * * *

多少なりとも目指すべき存在だと思えていた相手は、その身が危なくなれば、すぐにでも命乞いをするような情けない姿を見せた。

そしてそんな情けない存在が、女王を殺してしまったのだ。

生かしている理由は、子種としてという理由もあつたが、それ以上に自分達の戒めとして残している部分の方が強かつた。

プレデターという種と、ゼノモーフという種の本質の乖離も理解しないままに、プレデリアン達は目指すべき強さはこれではないと断じていたのだった。

しかし、だからと言つて目指すべき存在が別にある訳でもない。

そういう理由で、プレデリアン達はどこだろうといつだろうと、苛立ちを抱えながら日々を過ごしていた。

他の群れのゼノモーフを見かける事があれば、地の果てまで追い掛け残虐に殺す事も珍しくなく、それどころか、そのままその群れを

一気に半壊させてしまう事までもある程に。

そしてたちの悪い事に、今やプレデリアンの誰もが一騎当千。そして女王の抑圧から解放されて自由意志で好き勝手に動く。プレデリアン達は、前のように数で潰せる程の存在でもないだろうし、潰したところで最大の目当てであつた子種は無い。

恐れられ、手出しをしてはいけない群れとして、段々と周りの群れに周知されていった。

そんな日々を過ごしていれば、新しいプレデターが空から降りてきた。

重装備で攻撃を躱すのではなく、受け流す事に特化した立ち回りのそのプレデターは、プレデリアン達にとつては一匹でも容易く捕まえられる程度の存在だつた。

しかもそれは雌であつた。早速、再び雌雄が揃つた事に少しばかり喜びを覚えながら、それを子種でしかくなつた雄と交わらせてみようとした。

だが、もう狂いきつたその雄は雌を前にしても興奮するどころか、目が開いていても雌が居る事すら認識していないようで、子種を吐き出す事すらしなかつた。

訳の分からぬわ言を呴き続けているだけで、プレデリアン達はもう苗床にしてしまおうかと思うも、一匹が提案した。

この中で一番弱い奴に、精を吐き出させるように試みさせようと。それは追い求める強さの具体性もなければ、ここ最近の苛立ちは捌け口も無かつたプレデリアン達にはとても甘美なものだつた。

そうして最弱を決める争いが唐突に始まり、そして最終的にある一匹のプレデリアンがその役目を果たす事となつた。

プレデターは夢ばかりを見ていた。

現実逃避の末に、過去の栄光をひたすらに頭の中で繰り返して、その中に意識を閉じ込めていた。

成人の儀式で苦闘の末にゼノモーフの首を刈り取つた鮮烈な喜び。初めての単独での光年を軽く超える距離を経る旅。文明はなく、しかし自らより巨大で力ある生物達を屠る狩りに興じた。

一人旅にも慣れた頃、今度は文明のある星に訪れて、争いの中で淡々と知的生命を屠つていった。誰にも気付かれず、段々と戦火が収まつていくのを見るのは別の心地良さがあつた。

偶然近くに居たからと、掃除屋の真似事を依頼されて……この記憶は思い出さない方が良い気がした。どうしてだろう、何かが目覚めてしまう気がした。

そして、気付いたら。同期達の中でも中々に優れた狩人となつていた。

外界の事など何も目にも耳にも入らず。

ただただひたすらに、ひたすらに、そんな幸福だった頃の記憶を思い出し続ける。それは現状では一番幸せな事だつただろう。

だが、それも放置されこそ。

プレデリアンがプレデーターに話しかけても一向に返事はなく。その性器に手を掛けてみた。

確かに……行為をする時はこんな風にしていた。

性行為をしないゼノモーフにとつて、その真似事は興奮するものでもなく、淡々と触れていると段々とプレデーターの呼吸が荒くなつてくる。

「う、あ……？」

性交をした事は何度もある。そんな記憶に感覚が当てはめられようとするが、それらのどれにも記憶はしつくり当てはまらず、段々と意識が覚醒させられて。

そうして見えた光景では、六本の指が生える大きな手が、自分の性器を扱いていた。

「あ、ああ……？」

顔を上げれば、プレデリアンの顔がすぐ目の前にあつた。

そして現実に引き戻されたプレデーターは言葉が通じない事すら忘れて、喚き始める。

「ああ、ああああ、あああああ!! 殺してくれつ、嫌だつ、死にたいつ、死なせてくれつ、頼む頼む頼む頼む頼む頼む頼むぐつ」
口を抑えられる。

「ムーッ、グーン！」

プレデリアンがそのまま口を抑えながら扱いていれば、プレデターの目からぼろぼろと溢れていく涙が手へと流れしていく。

また、それでも目だけで必死に懇願する姿は、少なからず最弱と見做された苛立ちを癒やしてくれるようだった。

そして、自分の意志とは別に長らく果てる事の無かつた性器は元気を取り戻して。

そこにプレデリアンが雌を充てがえれば、精を放つ事はもう我慢出来る事ではなかつた。

「あ、ああ……」

氣絶したままの雌は、その雄の隣へと磔にされて。

プレデリアンは少しばかり鬱憤が晴れたというように、多少機嫌を直して去つていつた。

* * * * *

それから新しくプレデターがその地に来ても、個としても並のプレデターを遙かに上回るプレデリアン達には立ち向かう事はおろか、逃げる事も許されない。

そうして捕らえられたプレデターの雌は等しく子を産む為だけに磔にされ、雄は子種と比較される。

だが、不幸な事に、そのプレデターより優秀な子種が来る事もなかつた。

雌の数が増えるに従つて、雌を磔から引き剥がして充てがう事も面倒になつていき、長い年月が経つたある時、プレデターは磔から解放された。

そしてもうその時には、プレデターは自我すら消え失せていた。

新しく生まれ、そしてその世話をする事になるプレデリアン達はもう、それが過去、最強の女王を屠つたのだとは誰も信じない。

しかし、それでも子種ばかりは何よりも優秀で、それだけに新しく生まれたプレデリアン達は首を傾げるのだつた。

そんな日々の中、そのプレデターは今日も磔にされた雌達と女王の空間で、プレデリアンから与えられる食料を這いずつて口を汚しながら

ら食べ漁り、またプレデリアンの助けを借りながら、獣のように雌と行為をし続ける。

そうした一日がいつまでも、いつまでも続していくのに、プレデ

ターはもう何の疑問も感情も抱く事はなかつた。